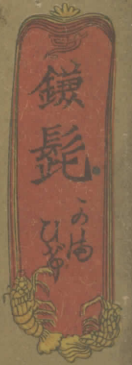


通類編

昭和二十五年十月十五日第三種郵便物認可
 昭和二十五年十月三十日印刷（毎月一日）
 昭和二十五年十一月一日發行（一回發行）



依藤大秀郷

香樂樓
 曲五國丸



芥子菜
 十八月号

相馬の將門

十番之内五

美味・滋養・重寶

牛肉窗來煮

高天一碧

爽！快！

山てす 野てす
海てす 川てす
家庭に 物見に

行くとして可なるものゝ名は賣來煮
毎戸に一罐御常備あれとすゝめます



元 賣 益 饅 松 下 商店
松下商店京都出張所

大阪市高麗橋二

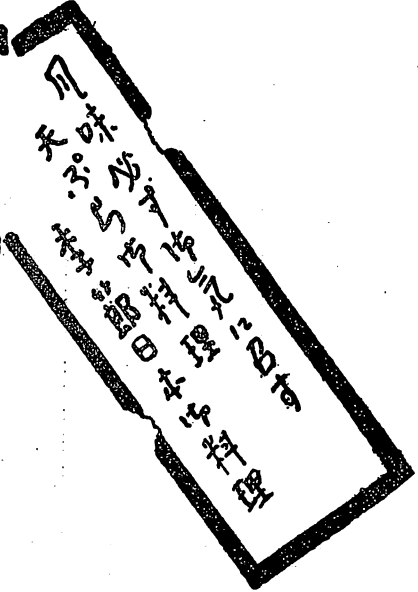
京都巽ヶ井五條上ル

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



喜又屋會食堂



道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

道頓堀 昭和五年十一月號 第五十輯

◇表紙 歌舞伎十八番「鎌髭」錦繪……………

□
 ◇中座東西大歌舞伎◇「里塚」鷹治郎の西屋金五郎◇「源平盛衰記」扇雀の佐の局、壽三郎の坂の四郎、福助の平重衡、魁車の若狭◇「鎌髭」福助の瀧夜叉の靈、猿之助の將軍良門、段四郎の小藤太◇「伊達綱宗」鷹治郎の綱宗、魁車の千代の方、扇雀の宗珍、猿之助の鐵之助◇「探三番」猿之助の三番叟魁車の翁、扇雀の千歳◇「伯藏主」長三郎の伯藏主◇「里塚」鷹治郎の金五郎、福助のお妙、市藏の茂平、扇雀の藤吉、壽三郎の久五郎、及西屋内の場◇「玉藻前」魁車の玉藻前、壽三郎の安倍晴明◇浪花座◇「少女の猛進」淡海のボーイ、樂太の重役◇「熟柿」の舞臺面◇「文樂座」假名手本忠臣藏「格拉フ」角座◇「女給」山田の相良純三、石河の小夜子、元安の勝見宣治、東の君代、進藤の吉水薫及舞臺面◇「この太陽」都築の杉山喬太郎、石河の岸蘭子、高田の弟春樹、梅田の犬丸老人浪花の皆川多美枝、伊志井の中根元雄、東の曉子木下の母常子◇松竹座◇大レヴュウ・シヤラバン・格拉ヒック◇樂天地◇曾我廼家五九郎劇◇「あの太陽」舞臺面◇新作八公、五九郎の八百屋八五郎

◇扉……………(鷹治郎の綱宗)……………田中滿彦(一)

◇室津風景……………高谷伸(二)

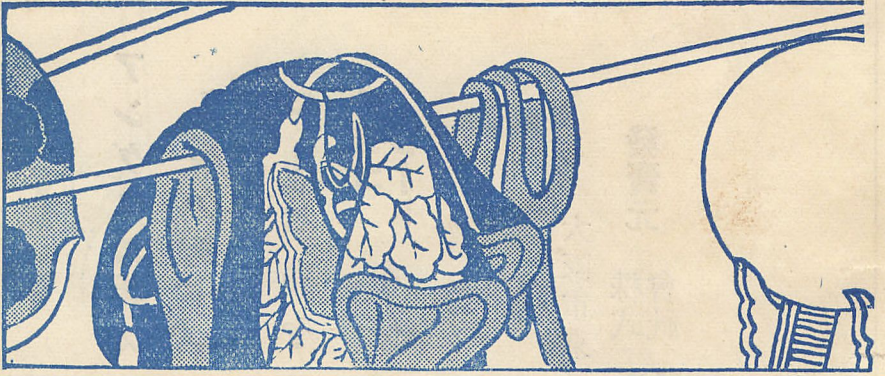
◇重衡紀行……………西尾福三郎(六)

◇鎌髭と喜熨斗父子……………倉田啓明(一〇)

◇鎌髭上演に就いて……………市川猿之助(一六)

◇獨樂について……………木村富子(二〇)





◆玉藻前上演所感

松居松翁

(三二)

歌舞伎十八番鎌髭……………(中座十一月興行上場)

お 舞踊操三番……………同

ほ 同 伯藏主……………同

む 同 獨樂……………同

石 玉 藻 前……………同

一 里 塚……………同

◆伊達綱宗

……………中座十一月興行(芝居見たまゝ同人江)……………(一二)

◆襲名披露に際し

市川段四郎

(一七)

◆『この太陽』脚色に就いて

川村花菱

(二六)

◆『女給』を語る

鳥江鍬也

(三〇)

□劇壇往來

(三二)

特 脚本 源平盛衰記

(十一月中座上場)

食満南北作

(三四)

脚本女

給

(十一月角座上場)

鳥江鍬也脚色

(四四)

輯 『女給』の唄

西條八十作歌

(二八)

△編輯後記

住田冬和 (七二)

アングロス井ス

ミルクチヨコレート

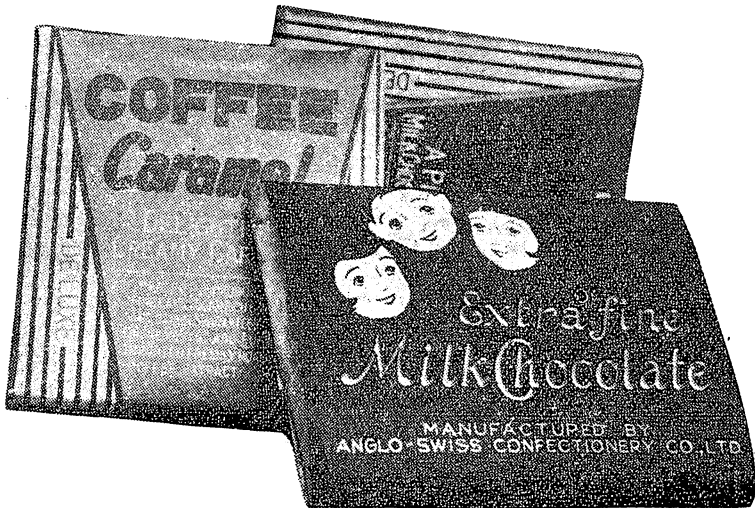
コーヒキヤラメル

チヨコレート
キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式會社 横山商店

電話東(94)二〇六一番





新聞

廣告は電通

支 主
局 ナル

本社 東京 日本電報通信社

南北 釜下 金古
京平 山關 澤草
經天 長京 函
青津 城崎 館

巴 青 奉 福 神 札
里 島 天 岡 戸 機

倫 漢 大 熊 岡 青
敦 口 運 平 山 森

飛 上 哈 鹿 廣 仙
港 崎 實 島 島 臺

羅 蘭 臺 大 松 長
府 東 北 分 山 野

大阪市北區中之島二丁目
新聞通信及
廣告代理總
大阪電報通信社

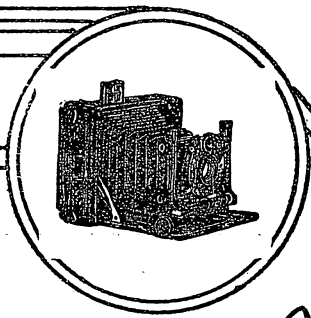
本電 九九五五
局話 二一六五

六一九九
〇八四三

三六六〇
九〇〇四

二製五
〇所六
三〇部





大なり

面影残さず繪姿不
 衰らし昔の態はねく……

肖像・風景・其他凡有る物を
 寫眞や小型映画に殘したいと
 鬼沼との時は是非共

長堀橋は南詰 小西六へ

寫眞機は

- リリーカメラ 小型活動
- パールカメラ 寫眞機械
- アイデアカメラ 各種在庫
- パレットカメラ

(カタロン進呈)





郎五金屋西 “塚里一”
郎治鷹村中



十一月・中座
源平盛衰記

佐の局 扇三郎 雀
 坂の四郎永覺 壽三郎
 平重衡 福助
 若狭 魁車



面臺舞 “ 髭 鎌 ”



十一月・中座

鎌 髭

瀧 夜 叉 の 靈

福 助

六部妙典實は將軍良門

猿 之 助

下男茂助實は小藤太

段 四 郎



“宗綱達伊”座中・月一十

郎 治 鷹 宗 綱

伊達綱宗

千代の方

茶道宗珍

松前鐵之助

魁

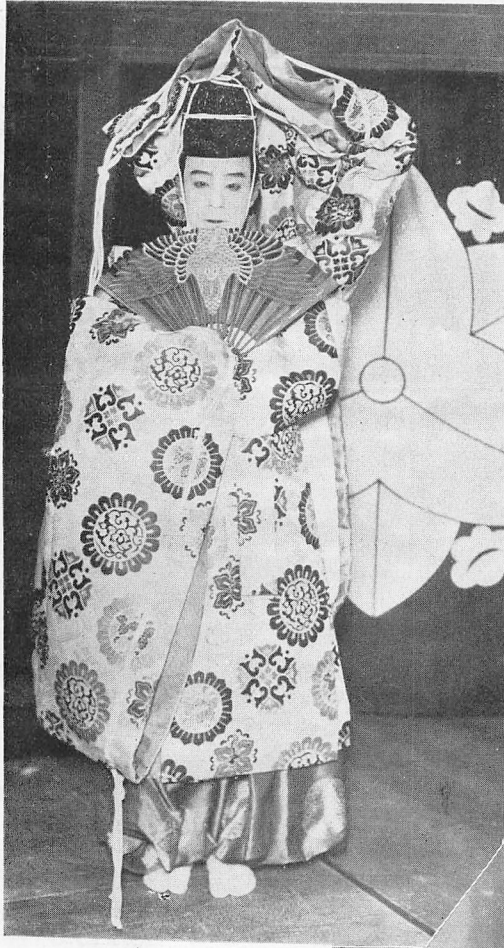
扇

猿之助

車

雀





十一月・中座
操 三 番

千	翁	三
歳	魁	番
扇	魁	番
雀	車	助

株式會社

攝

津

貯

蓄

銀行

行

大阪市西區北堀江御池町四ノ一六

電話新町一五五・六九一・二二五

大阪市東區農人橋二丁目十二番地

合名
會社
大阪橋本組

電話 東
特長一五八〇番
特長一五八〇番
二六五五番

支店 東京市麴町區丸ノ内二丁目六番地

電話丸ノ内特長四七八〇・四七八一番

支店 小倉市大阪町十丁目(電話四三〇)



新興帝キネマ産だん此の明快篇

原作
脚色
監督

川口松太郎

カメラ
塚越成治

中野英治
主演
糸順子

秋はアパートの窓に

監督主演者の珍しい顔合だけでも興味百パーセント……
内容は頗る明快な摩登振りを豊富に盛つた近代稀れに見る
名篇であることを！

近々封切!! 期待あれ!!!

帝國キネマ演藝株式會社

もみぢの楓

秋深む山水の畔へ

もみぢの錦着て歸る

嵐山へ

嵐山觀楓券 大阪天六から
往復特割

大人 一圓二十錢
(團體二十人以上は一圓)

紅楓の名トリオ

高尾 榎尾 柵尾

高尾觀楓券 大阪天六から
往復特割

大人 一圓八十五錢

湖畔に映ゆる

坂本三橋へ

坂本觀楓券 大阪天六から
往復特割

大人 一圓六十五錢
(團體二十人以上に限る)

伏見桃山から黄檗へ

宇治へ

大阪天満橋から
往復特割

大人 一圓二十錢
(團體二十人以上に限る)

橋満天ばりの

六天ばりの

京 阪 電 車



十一月・中座

伯藏主

伯藏主

長三郎



獨樂賣

獨樂賣

猿之助



一里塚

西屋金五郎 鷹治郎

女房お妙 福助

漁夫茂平 市藏

十一月・中座



場の内屋西 “塚里一”



西屋久五郎
壽三郎



悴藤吉
扇雀



前藻玉・座中月一十

郎三壽 明晴倍安師陽陰・車 魁 前藻玉

純支葡萄酒の代表

サクラ 櫻

マサ 正

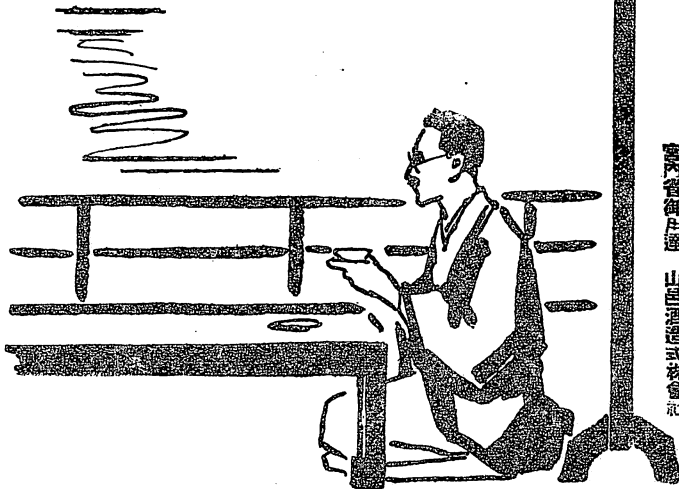
ムネ 宗

樽 | 瓶
詰 | 詰

如何にスピード

時代とはいへ静かに召上る
冬の櫻の味覚！心境！

断然 除外例でせう



東京有明区 山田酒造株式会社

愛よ！人類と共にあれ

日本映畫史あつてその記録を見ない國際的大映畫！

● 上山草人主演・鈴木傳明・岡田時彦特別出演

オールスターキャスト・島津保次郎監督

▲ 今秋映畫界の花形篇はこれ！ ▼

佐藤紅綠氏原作・富士所載!! 牛原虚彦監督

● 鈴木傳明主演・岡田時彦・田中絹代共演

豪壯雄大なる未曾有の一大白玉篇！

品作マネキ竹松

若者よなぜ泣くか

劇廣宣圖裝
畫告傳案飾



阿久田號

神戶市水通三丁目六一
電話漢(5)二四〇番

化粧品界の

スター

スキナあぶら取紙

皆さんに
愛用されて居る

發賣元

朝日堂株式會社
大阪南久寶寺町四

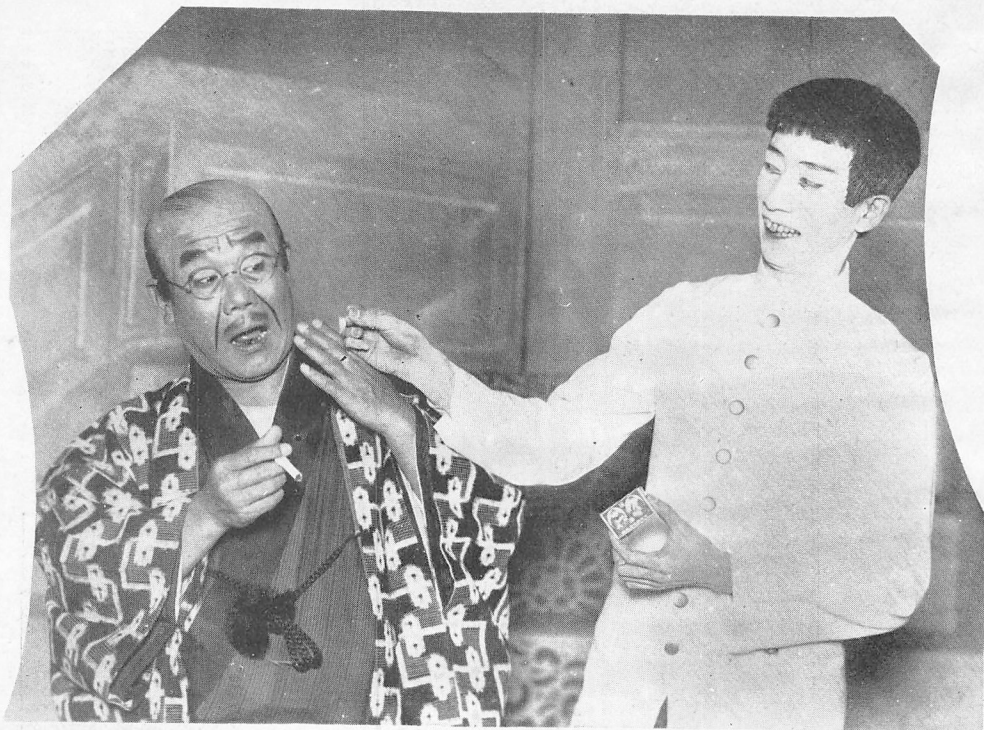
製造本舖

中田スキナ屋
大阪



少女の猛進

ボーイ村田 淡海・重役奥田 樂太



熟
柿
舞
臺
面

假名手本

◇ 文樂座十



“兜改”



“松切”



“及傷”



“裏門”



“腹切”

忠 臣 藏

一 月 上 演 演 目



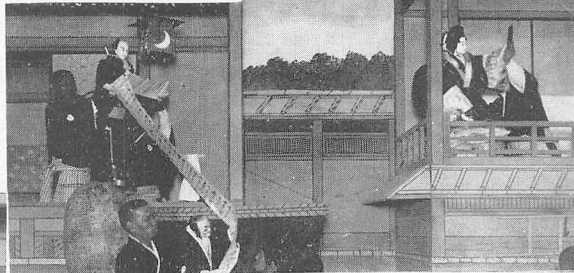
“ 明 渡 し ”



“ ニ ツ 玉 ”



“ 身 賣 ”



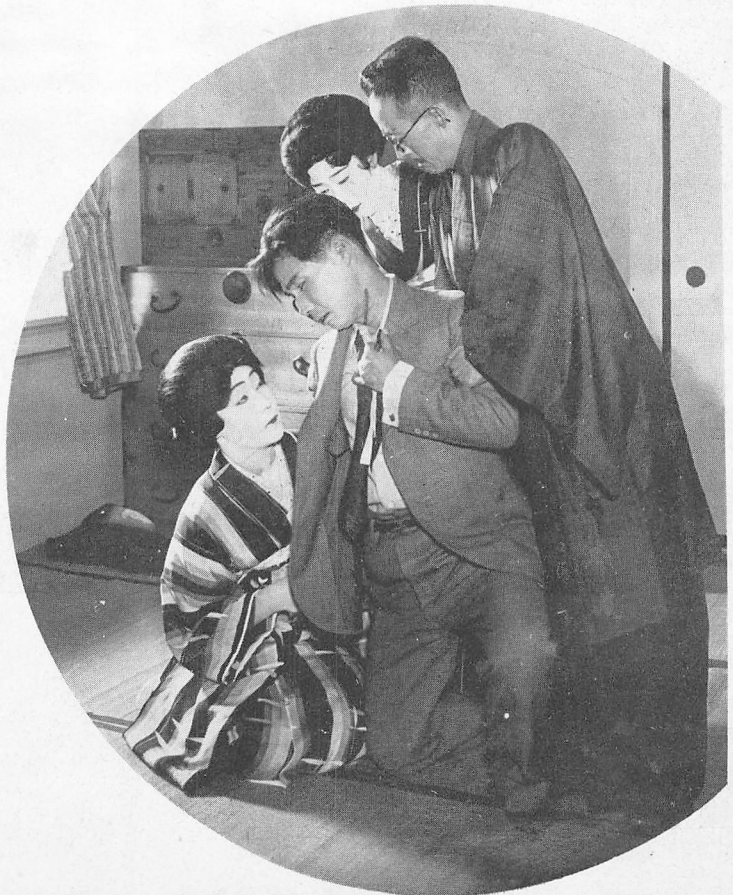
“ 茶 屋 場 ”



“ 茶 屋 場 ”



十一月・角座
 成美團
 女給



君代	勝見宣治	小夜子	相良純三
東愛子	元安豊	石河薰	山田隆也



吉水 薰
進藤英太郎

女給君代
東 愛子



座角・月一十

團美成

陽太のこ



御饗料理

祭 燕

お芝居の

お帰りを

せいおまら

いたし

居らさ

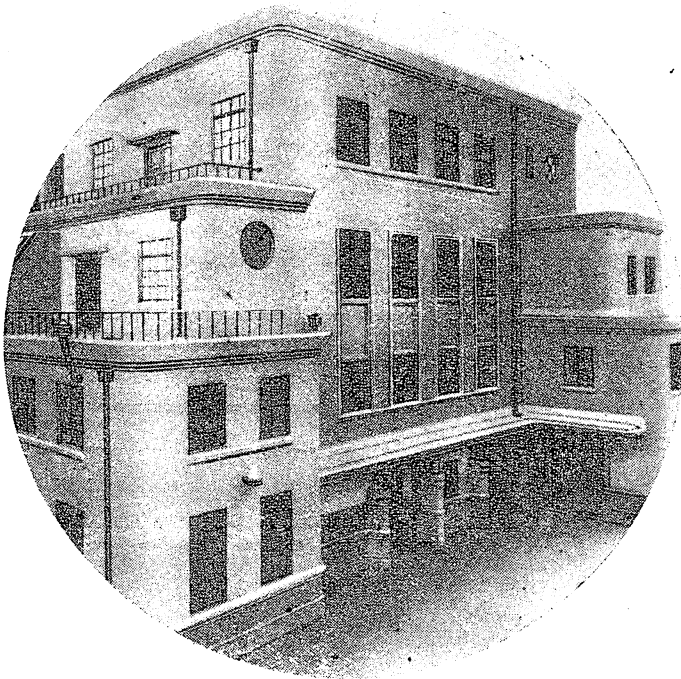
道頓堀松竹産あり

電話南

四九四
 八八五
 四二〇

松竹ビルディング

各座の備品倉庫・用度倉庫	地階
ビブル入口・大道具製作部	一階
文樂の倉庫・電気部	二階
衣裳部・小裂部	三階
ガクゲキ部・練習所	四階



松竹衣裳部

電話我五六三四番

あらゆる印刷



永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

大阪中央局私書函第壹壹八號

電話土佐堀 (44) 三〇八三番
四九四〇番

振替大阪一九三九〇番

入浴七千人萬突破記念

●●● 入浴者の大福音 ●●●

日本國民の誰もが持つ念願

伊勢參宮御招待

一生に一度は必ずお伊勢さまへ

特賣 自昭和五年十一月一日

期間 至同年十二月十五日

新世界

ラヂウム温泉大奉仕

出發 昭年六年初春一月中旬

參宮 一、省線二等車以上のローマンスカー
急行 一、喫煙室及び便所の設備あり
電鐵 一、五輛連結特別借切仕立(往復)

御招待規定

伊勢參宮 招待券付 特賣回数券

金壹圓五拾錢(十回券)

壹千冊に付三十人様の當籤割

(當籤番號各組共通)

第一回 抽籤日 十一月廿二日
發表日 十一月廿三日

招待券 引換場所 ラヂウム温泉
記念品

□ 三大特典!!

- 一、特賣回数券お求めの方へ高尚優美絹製防水手提袋壹個贈呈
- 一、當籤洩れの抽籤券十枚御持參の方に壹圓回数入浴券(五回分)壹冊贈呈
- 一、回数券壹組三十冊お求めの方に對して御壺名様「伊勢參宮」御招待

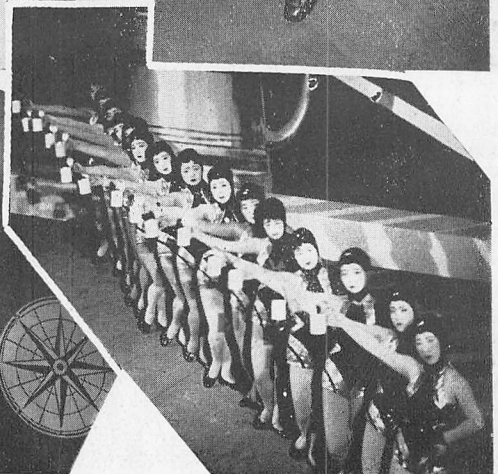
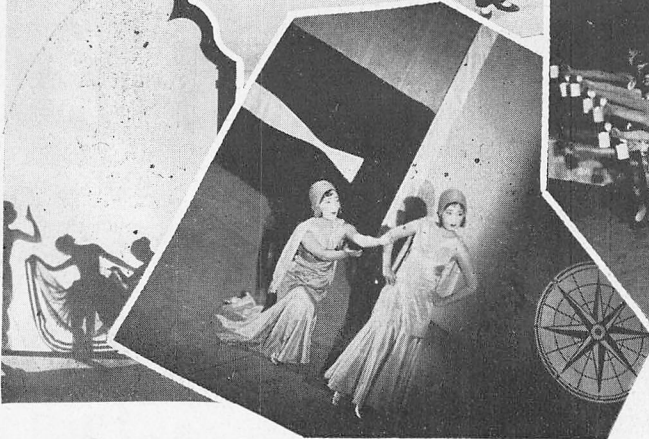
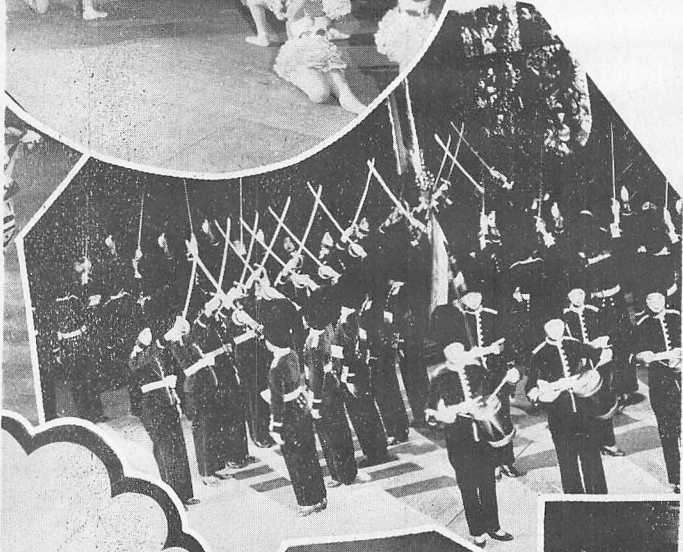
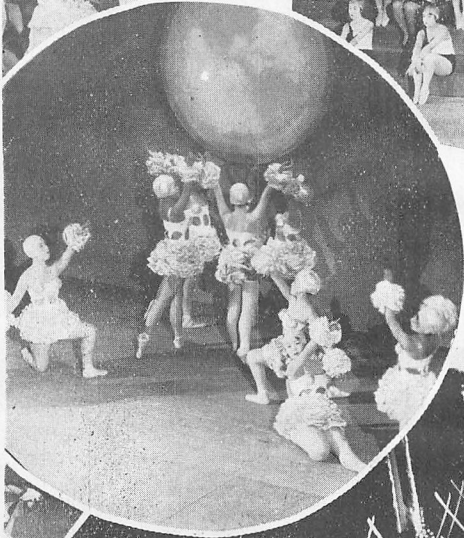
□ 待 遇!!

太々神樂奉奏、一同記念撮影、二見浦にて晝食、お土産贈呈後一同解散



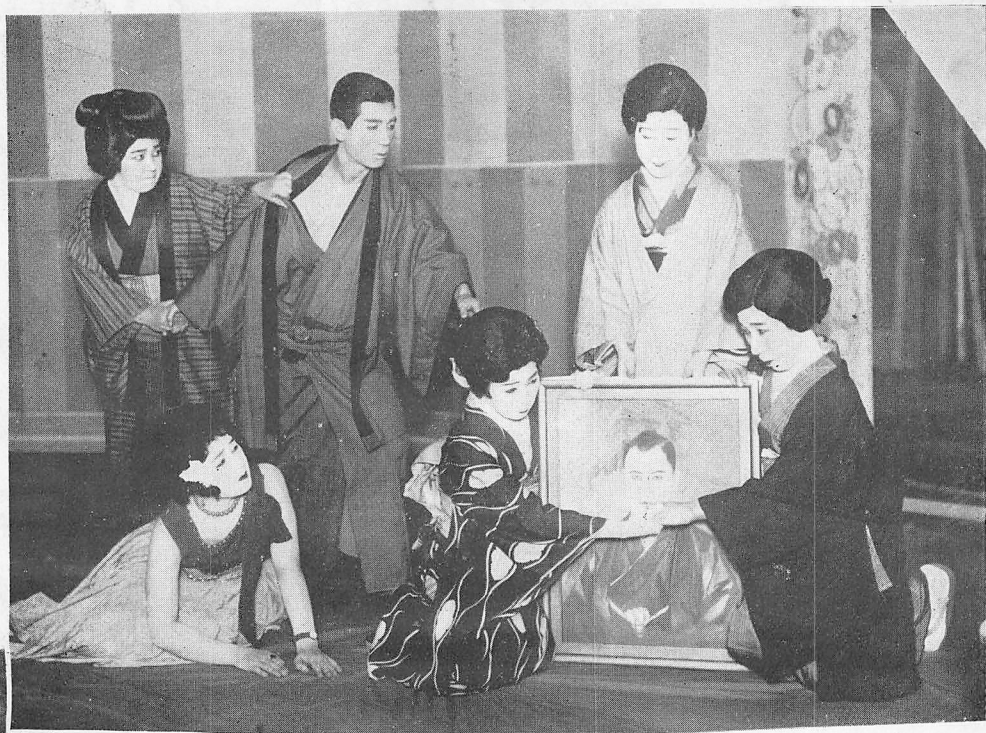
母常子	曉子	中根元雄	皆川多美枝	犬丸老人	弟春樹	岸蘭子	杉山喬太郎
木下吉之助	東愛子	伊志井寛	浪花千榮子	梅田重朝	高田亘	石河薫	都築文男







花柳壽三郎歸朝土産
松竹レヴユ
シヤラバ
グラヒツク



面臺舞 “陽太のあ”



十一月・樂天地
會我廼家五九郎劇

新作 “八公”

八百屋八五郎

五九郎

理料洋



大阪市今橋五丁目

つる家本店

電話本局
三三三
三一五
二六二
種時



に粧化淡な楚+清

粉白水園御新

色櫻・色肌・白純

錢十五各



園蝶胡東伊 鋪本

誌雜·究研劇換·刊月

十一月號

通類編

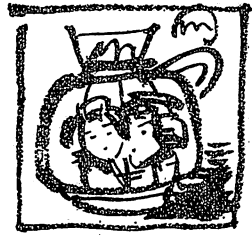
第五年

第五十輯



中座十月舉行
伊達綱宗

中打鷹佐郎



室津風景

「一里塚」上演に因み

高谷伸

「よさの泊り」は、どことも決めない心まかせの旅だつた。

夏の日ざかり、大ぜいの旅客に採まれて山陽線の那波驛を出たもの、赤穂へ行つて義士の跡を訪はうか、鹽田を見やうかどこへ行かうとの心も、はつきりきまつてゐなかつた。

那波か、坂越か、室のとまりか、さうだ、室の津へ行つて見やう。さう考へて、道を左に取つた。

室の津へ行くと、龍野から行くか、網干から行くかの二つに一つが本道である。それをわたしは那波から行つた。峠はあつたが、距離は近かつた。

大正七年の夏で、好況時代だつたから、相生の造船所からは烈しい爆音や、金属性の反響が、乾いた空気を震はせてきた。それが烈しい太陽の光線を一層苛だたせた。

造船所の町には、どん／＼新らしい棟割長屋のやうな借家が立つて行く頃で、氷屋の旗の赤い端だけが一軒の軒に躍つてゐた。その頃特有の成金気分が粗雑な新らしい家に溢れて、その

間にびつくりさせるやうなハンマーの音が、埃の立つた道をは走る自轉車の尻を叩いた。

海に沿ふた道は、岬を曲ると、舞臺が廻つたやうに静かになつて野瀬といふ部落の藁屋根が見えてきた。那波から室へ二里その中間がこの村だつた。徑はそれから登りになつてゐた。ちやうど西日を脊にうけるので暑いこと甚しい。

岬を登りつめて、室津を眼の下に見たわたしは、港町の風景の美しさに、暑さを忘れて、とん／＼と阪を駆け下つた。

弓なりに軒を並べた室津の町は、岬の端の賀茂明神を尖に大きくその港を抱えてゐた。

龜屋といふ宿に旅装を解いたのは八月三日の夕暮だつた。明るる四日から五日へかけて明神の祭だといふので港の子らは騒いでゐるが、祭の賑はしさはさほどでもなかつた。

部屋の床にうすよれた雪景山水が掛けてあつて、落款に廣重とあるのも旅らしく、寂靜寺の鐘の響と融けあつて、五燭の

電燈の光が、かへつて風情を添えた。

祭の日は子供達が一筋に十ばかりつないだ太鼓を叩きながら揃ひの浴衣で「あら、よいこらせう、よいせこらせ、ほうねんまつりは、よいまつり」野趣にとんだ節面白く町を廻る。夜は獅子が出る。赤銅色の肌をした漁師達が、禪一つで獅子頭をかぶる。それに數十人の男が取つて、明神の拜殿で踊り狂ふ。その踊りには黎明までつゞく。

町には作り物がある。水戸黄門八幡の数知らずとあるが、なんと笑つてはいけぬ。黄門が前髪で黒紋附白禪袴の股立をとつて、助さん格さんから釣りを取りさうな勢なのである。

次の日は提灯に飾り立てられた舟がでる。提灯松明一時にぱつと消えたりしては典侍の局の御最期だが、あかあかと灯を點して出るのである。夜の海の美しさは格別である。

しかし、典侍の局をはじめ平家一門最後の哀史は、こゝにも涙のあとを止めたのである。日本遊女のはじめといふ傳説は、とにかくも、須磨に敗れ壇の浦に亡びた平家の女臈の誰かど、生活に困つて春を賣つたといふことも誰が否定する確證をもつてゐるだらう。かうして室の津は日本賣色史の一頁を彩つた。徳川時代になると、幕府は諸大名に参観交代を命じた。大名行列は毛槍を振るて街道を上下した。泊り泊りの灯の色は明るかつた。港の町の灯は賑ふた。西國大名の海路を行くものは、室の津を第一の歡樂郷としたものだつた。

だが、舞臺はまた廻つた。明治維新になると、大名そのものがなくなつた。参観などは昔の夢となつた。汽車ができた。鐵道から忘れられた港は、日に日に衰へて行くの外はなかつた。瀧治郎演ずる「一里塚」には、かうした時代を背景にして、霸氣と恩愛と野心との渦が巻いてゐる。

交通上の便宜を失つた港は、たゞ漁場として再生するの外はなかつた。それも大した効果は得られなかつた。室津干軒の繁榮を夢に三四百戸の港町に、かすかに炊煙が立ちのぼる。

町には舊陣屋と稱する家もある。賀茂明神の石段に近く、昔の名残りの三軒の遊女屋があつた。おそらく今もあるだらう。しかし、それは昔の夢のあはれさをさらに深めるにすぎない

その頃第一の妓樓と言はれた西屋の家は空しく朽ちて、格子さへところどころちぎれてゐる。妓樓の跡の行燈に「木ちん」と書かれた文字の風にさらされた淋しさは深い。

室の泊りは荒れに荒れても、昔の夢はどこかに残つてゐる。古い港には、どこかに、微かに詩の聲がきこえる。室津の唄を、どこかに感じる港である。

西屋を題材に取つた作者は、この詩を感じたに相違ない。賀茂明神の燈に陽の光る朝、城山のもろこし畑に陽の輝く夕わたしもの室津の唄を求めて古い港町を歩いたものだつた。

その後十年、室の泊りもかはつたやらうと思ふ。再遊を期しながら回想の筆をこゝに止める。

大森痴雪氏作

一里塚

全二幕二場
(おほむ石)

— 中座十一月興行 —

お妙 久さん濟みませなんだ。
久五郎 何の、何にも用おまへなんだぜ。
お妙 旦那さん、今聞いてだしたやろう帳合頼みます。

金五郎 よし。

帳合する。
お妙は茂平を尻目に見ながら坐につく。
茂平と金五郎はそつと目ませする。
茂平 それぢや旦那さん、去なして貰ひます。
金五郎 さうか、ではいづれ、……よいな。

茂平 えい、よろしうござります。
(久五郎に) 御免なさりませ。
茂平が立上る時上手から明石、小太夫、三芳、



お妙 薩州のお侍は氣が荒いによつて皆氣浮舟、千壽に數名の禿とお秋がついて出る。

をつけなはれや。

千壽 その代りまた欺しがきいてよろしい、武骨な人は正直やさかい、ほほムム。

茂平を見て笑ふ。

皆さどめきながら廊下から去る茂平もその中に巻込まれて去る

久五郎 お妙さんの前であら、何いふてもだんないやらう、あなたは是が非でも今話の仕事をやリ通す積りでゐてやのか。

金五郎 乗るかゝつたからは行着く所まで行く積りや、久さん、私は男らしう働きたいのや。

お妙 そやつたら家の商賣はど

ないなります。
金五郎 異國から黒船がやつて來る、追つムけ港を開いて異國と商賣せんならんといふ世の中に、女郎屋なんぞ安閑と男がしてゐる商賣やない。

お妙 それでは親御へも先祖へも不孝になるやおまへんか。

金五郎 馬鹿なことを、商賣が女郎屋に限つたことはない、お前は唯私にさへついて來ればそれでえムのや。

お妙が尙言はうと

するを、久五郎が止める。上手から母のお房が出る。

お房 久さん、おいでやす。金五郎お前はけふ角屋へ五百兩の融通頼みに行つたそうな。

金五郎は怪とする。

今角屋から内々念を押しに來たによつてきつぱり斷りいふて去んで貰ふた、お前そんな大金、何にしなはるのや、その譯いひなはれ。

金五郎 お妙か。

お妙 え、恐れるやうな態度で近づくと。

金五郎 どうやつた、鍵は。

お妙 鍵より正金で五百圓持つて來ました。

金五郎 正金で、さうか、(物となる)これで濱への義理も立つ、あとの資本は手薄でも俺が根限り働いたらどうでもなる、決して案じてくれるなよ。

お妙 旦那さん、私どう思ふても不孝の罪が怖ろしいおますよつて濟みませんけれど、どうぞ私を家に残らしておくれやす。金五郎 家に残る、お妙、お前心が變つたな。



お妙 勘忍しておくれやす、みすく家の廻つて行けぬのを知り乍らどうしても私には

金五郎 これ、晝に何と云ふて私に誓ふた、僅か二時、三時とも經たぬそのうちに。

お妙 そない怨まれるのも覺悟してゐます、旦那さん、あなたの孝行の代りを私にさせると思ふてどうぞ勘忍して。

金五郎 お妙、孝行の道と云ふものは、時世によつて變るのぢやぞ、あんな賤しい家業をさせておくのが、決して孝行ではない、

その儘繼げる資産を捨て、出て行く私の心がどうしてお前には分らんぢや。

お妙 それが道理か知らんけれど、老先きの短いお二人を捨て、行くやうなこと、どう思ふても私には……なア、旦那さん。

金五郎は嚇となつて、纏るお妙を突飛ばして蹴る。

久五郎 その藤吉は西屋の子ぢや、私の子ぢや、西屋を捨てたあんたから兎や角指圖せられては迷惑する、殊に人の金盗んでまで害出をそゝのかすやうなことは眞平ぢや、にべなき言葉に金五郎、我を忘れてくわつと念き立ち。

金五郎 この私を盗み呼ばりされるお前か何年何十年他國して居やうとも元々私には東屋の跡取りぢや。



重衡塚紀行

源平盛衰記上演に因み

西尾福三郎

みかの原わきて流る、泉川

いつみきとてか戀しかるらん。

百人一首に出てくる泉川は今の木津川の古名であるが、關西線と奈良線とが十字に接するその木津河畔の森蔭に本三位重衡の墓所がある。

京都から奈良へ行く線路が木津驛にさしかると、汽車の窓越しに見へる左手の田圃に、こむもりとした森がある。木津驛からすぐ近くにみえてゐるが、歩いて行くと割合に遠い。枕の草子に「近くて遠いは田舎の道」と書いてあつた言葉が思ひ出されて微笑まれる。

新しい石造の重衡橋を渡つて少し行くと、木津川の堤を背にした小暗い濕地に御靈神社と云ふ鎮守の社を前にして安福寺と云ふ淨土宗のお寺がある。門を入るとすぐ左側に十三層の石塔婆があつて、それが重衡の墓だと云はれてゐる。



(重衡の墓)

日本外史や平家物語には、重衡は奈良坂で首を斬られたやうに書かれてゐるが、一説には木津嶺で最後を遂げたものとも云

ひ傳へられてゐる。

この安福寺は、元、南都六宗に屬するお寺であつたらしく、

重衡は治承の亂に南都焼打の際、茲の近邊敷が原？まで引き上げてきて、その時に既にこの寺のみ佛と縁を結んでゐたのである。だから、後に重衡が捕へられて鎌倉から奈良へ送られる途中、フトそのかみの事を思ひ出して、再び茲を訪れたのかも知れない。



(重衡墳墓の地)

から、歴史に表れた通りだとすれば、その墓所との距離が餘りでは一里程もある。茲から奈良阪まで一里程もある。その墓所との距離が餘り

本尊は定印の阿彌陀如来で、乾漆を用ひた點等に藤原時代の面影で残つてゐると、又石塔は臺の四面に梵字が彫つてあつて頂上の九輪を除いた外は、ほゞ鎌倉時代の形式を備へてゐる。尙當寺の附近に重衡首洗の池と稱するものがあり、寺に秘藏する巾一尺に長さ三尺位の畫像には、装俗姿の重衡卿が描かれその上部に



(重衡幽居の寺)

元暦二年乙巳六月二十三日
本三位中将重衡卿寂期の砌此木津當時の阿彌陀佛に植遇ありしに折しも杜鵑啼て西の方に行きけるを聞給ひて
思ふことかたりあはせむ郭公
けにうれしくも西へ行くなり

と書かれてゐる。その畫法も上部の色紙の布置も、共に當時の形式をもつてゐて相當よいものである。

この歌をみても分る通り、重衡は文弱一片の青公卿ではなく心を宗教に寄てゐるた感じ易い時代兒であつた事が想像される。この持佛堂を「哀堂」と名づけてゐるのも、いかにも重衡に恰はしい呼び方ではないか。

尙茲から蟹満寺物語の綺田へも近いし、又、お千代半兵衛の墓のある上田村へも遠くないと云ふ事を一寸附け加へておく。

附 平 重 衡

藤原氏と平氏の手によつて築き上げられた平安時代の燦然たる王朝文化が、東國の源氏に亡ぼし盡される迄の我國中古の歴史は、その間のどの頁を繰つてみても、爛熟華麗な色彩と、優艶典雅な情緒とに満ちてゐる。

中にも平安朝文化の幕を閉じた平家滅亡の一齣こそ、その多彩な悲壯美は史上空前の詩的美であり同時に絶後の劇的美であらう。

さしも驕奢を誇つた平家一門が、打連れて西海の波間に没落

しやうとする刹那の情景は、恰も豪壯な大日輪が一日の耀きを失つて將に波濤の彼方に落ち去らうとする瞬間の、あの榮華と哀愁の交錯したグリムプスに似てゐる。今を最後に五彩に耀く落日の一際美しき光芒のその一つが、これから語りうとする平重衡の運命である。

淨海入道清盛は頗る精力絶倫で、實に十九人の子の親だつた。重盛を頭として四人目が船幽靈や碇綱で有名な知盛で、その弟が重衡である。

(因に敦盛は清盛の弟、經盛の末子で知盛や重衡とは従兄弟、又、鮮屋の彌助維盛は重盛の子だから重衡の甥)源氏一門が擧つて平家の都兵庫の福原を攻めた時、重衡は兄知盛と共に東門を死守して一旦敵を劫けたが、義經のために背後を襲はれて西に走らねばならなかつた。

その途中、東人莊家長の爲に乗馬を射られたので、直ぐ様副馬に乗換やうとしたが、介副人が無情にもそれを振捨て、逃げました。つたばかりに、到頭重衡は囚はれの身となつてしまつた。後白河法皇は、囚はれの重衡に向つて、汝書を宗盛に贈り神器を返さしめなば命を助け屋島の平家方へ放ち還さしめんと仰せられた。

これを承つた重衡の態度は道に見上げたものだつた。彼は何の面目あつて生きて還り再び宗族と見へましやうやと答へて

る。

併し勅命とあれば奉ぜずんばあるべからずと云ふ所から、早速法皇の仰せを屋島の平家方本營へ書き送つた。然るに屋島には安徳幼帝の御側に、重衡の母時子兄宗盛等が居て「一重衡の死生は物の數ではない。神器は須臾も聖體を離す事はできない、願くば法皇こそ龍駕を枉げ給ふて源氏討伐に與せられよ」と逆ねぢを加へ來るのみか、剩え院宣のお使を傷つけ返してきた。

忠ならんと欲すれば孝ならずと泣いて悲痛の人間苦を吐露した長兄重盛の苦衷を、重衡も亦、期せずして茲で體驗せなければならぬ破目となつたのである。

これより先、重衡の治承の昔、近江源氏蜂起の際、父清盛の命を享けて、南都の僧兵共を打ち従へた事があつた。その時に東大寺大佛や興福寺を焼き拂ひ、數百人の僧を殺傷してゐる。幾ら時の勢とは云ひ乍ら、その時の自分の行ひを顧る度に、重衡は慚愧と悔恨に堪えられなかつたのである。それで、遂に囚虜になつた後の或日、黒谷の法然上人に目通して戒を授けて貰ふ事になつた。

彼も亦、その身は權門富家に生れ乍ら、慘酷な運命に操られるまゝに、數奇の過去の罪惡に怖れ戦く哀れな弱い男の一人だつた。

宗盛の無禮な返書は法皇を甚しく逆鱗させ、遂に重衡を鎌倉の頼朝に托せられる事になつた。茲に計らずも、源家の統領と平家の御曹子とが、昨日とは打つて變つた立場で對面する事になつてしまつた。

頼朝は侍姫千手及伊王の兩人を遣はして重衡を慰めやうとした。重衡は名高い琵琶の名手である。明日知れぬ囚れの身で、宴歌の席に風流をやる彼の心持は思ふだに悲劇である。或は重衡が琵琶を彈じ、又千手の前が代つて彈じ、朗詠に舞樂に、目前に迫つた死の蔭を暫し忘れられてゐた。

「一樹の蔭に宿り合ひ、同じ流れを結ぶも、皆是先生の契……と千手が歌へば、重衡は「燈火は暗し數行虞氏の滂、夜は深し四面楚歌の聲」と應じた。

句は橘相公の名作、調は古律の平家琵琶、切々たる哀音と相まつて悲劇は最高潮に達したのである。かねてより重衡に怨を含んでゐた南都の僧兵は、頼朝に乞ふて重衡の身柄を受取るや奈良近くまで連れ來つて遂に木津の傍で首を刎ねてしまつた。

それをきいた千手の前も伊王も、共に髪を切つて尼になり重衡の後生を吊ふ事にした。重衡の位は維盛と同じく、この時三位中将であつた。時に元暦二年六月二十三日、平氏一門壇の浦に亡ひへより更に一年餘り後であるから、彼重衡こそ、文字通り大平氏の最後を血で飾つた悲壯な落日光であつた。



「鎌髭」と喜熨斗父子

倉田啓明

過日、わたしは古い「歌舞伎」を取り出して、「鎌髭」の相馬良門に扮した、故人段四郎の寫真と、今度中座でやる、おなじ良門の猿之助の寫真とを、見くらべてみると、猿之助が實によく段四郎に似て来たものだ、つくづくおもつた。まつたく親子は争はれないものだ。

この歌舞伎十八番「鎌髭」は明治四十三年十月の歌舞伎座で段四郎猿之助の改名披露狂言として、新しく書卸したもので、作者は竹葉金作氏、今度の中座の團子改め段四郎の改名披露狂言もやはり「鎌髭」が選まれて、父の猿之助が相馬良門に扮し新段四郎は田原小藤太をやる。父の改名の時の狂言を、更に子も踏襲するのは歌舞伎道ではむかしからよくある例だが、今回この「鎌髭」の脚本は、もともと粉本らしいものがないので作者が古來の口碑や傳説や、古書を参考に、大方こんなものだ

らうといふぐらゐの見當をつけて、書き下したものが、全體の趣向もおもしろく、なか／＼古風に巧く出来てゐて、歌舞伎十八番の新作としては、平木白星氏の「象引」や、吉井勇氏の「解脱」や、過般左團次がやつた「關羽」などにも劣らぬものだが、しかし強いて難を言へば、臺詞に古劇らしい大味な點が乏しいやうで、ツラネの「日もはや西にをちこちの……」のあたりは、どうも默阿彌張りの七五調であるが、これは何とも致し方がないのかも知れない。

この狂言の中心は、いふまでもなく、六部妙典實は相馬小太郎良門が、一夜の宿を借りて来て、髭を剃る段になり、大盥に水を汲んで、草刈鎌をもつて悠々然と髭を剃るのを、下男に身をやつしてゐた田原小藤太が、良門と覺つて鎌で首を搔かうとする。ところが良門は不死身で切れないといふ件だ。良門の不死身は、むかしから傳説的に有名だから、そこを覗つたのがこ

の作のやまである。そこで、歌舞伎十八番の内の「鎌鼬」について、ちよつと考證めいたことを述べると、前にも言つたとはり、むかしの脚本は傳はつて居ないので、どんなものだったかよくわからない。既に「歌舞伎十八番考」の豊芥子すら、「未見當」と言つてゐるくらゐだ。

然るに故幸堂得知翁の説によると、三代目中村仲藏の日記になる「手前味噌」に、初代仲藏の出世話があるが、それには明和六年の春、江戸中村座で上演した、「曾我麴愛護若松」に、四代目市川團十郎の景清で、仲藏が、とんちきとち兵衛といふ猿まはしをしてゐるが、これが濫觴ではないかといふのだ。あるひはさうかも知れないが、しかしよく考へてみると、景清が不死身だといふ傳説は、聞いたことがない、すると得知翁の推定も、半信半疑になるわけだ。

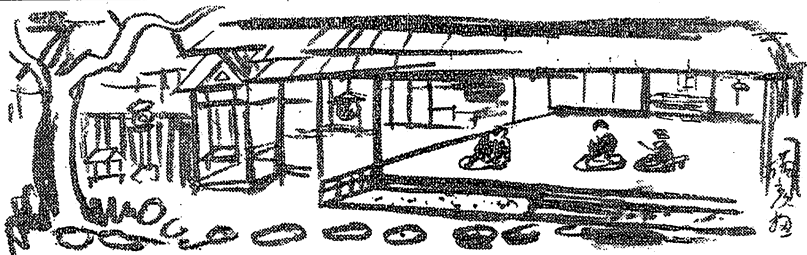
ところが、「鎌鼬」の狂言は、市川家でも由緒あるものと見えて、七代目團十郎が一度演じてゐるのだ。それは文政三年中村座の顔見世狂言に、「猿若瓢軍配」の二番目、難波新地福島屋の場で、この鎌鼬の件がある。七代目は廻國修行者雲龍實は武智左馬五郎光俊で、例の六部姿で泊り合せると、その家の主人福島屋清兵衛なるものが、焉んぞ知らん片桐助作で、市川團十郎が扮してゐて、髭刺りにかこづけて、鎌を左馬五郎の咽喉に引つかけたが、生憎と不死身で切れない。

この狂言の錦繪も番附も現に残存してゐるが、やはり六部は

縁側で、鹽と砥石を前に大きな煙管で葺をのんでゐる。その後には清兵衛がどてらのやうなものを着て鎌を握つてゐる。その傍に遊女らしい女が多勢ゐて、お市といふ女に瀬川菊之丞の名が見えてゐる。そして「此所大當り」と賞てゐるのだ。

いつもいふことだが、すべてかやうな歌舞伎十八番なんか近代人の科學的理智を求めようとするのは、求める方が甚だ無理だが、何事によらず、合理化しなければ納まらない現代の見物には、こんな芝居は馬鹿氣てゐるだらうけれど、この荒唐無稽で、夢幻的なのが、歌舞伎の生命で、古風な舞臺装置、鳴物衣裳の配合、畫面の見得、ツラネ——すべてが渾一融和されて一種グロテスクな、繪畫的色彩美を表現してゐるのだ。だから初手から理窟をいふのは野暮の骨頂で、理窟を離れて見るところに、不思議なおもしろさを味得するのだ。

けれどもこの「鎌鼬」などは、いづれかといふと、明治の新作だけあつて、荒唐無稽な衣を着せてゐるが、少し理窟臭い點がないでもない。前に言つたやうに、臺詞に大まかな味が少ないのなどがそれだ。さて、新段四郎は、歌舞伎俳優には珍らしく、中學を卒業してゐる。親父の猿之助も京華中學の卒業生だが、段四郎はわたしの母校立教中學の卒業生だ。だから俳優中でもまづ以てインテリゲンチヤに屬する方だが、これまで雌伏してゐたのか、あまりその聲望を聞かない。然し今度の改名を機縁に、大いに劇界を風靡するの覺悟があつてほしい。



伊達綱宗 一幕

— 中座十一月上演 —

(芝居見たま)

寛文十二年の春——雪の降る日。

この館の鍛冶場からは冴えた槌の音が響いてゐる。それは館の主綱宗が自ら刀を鍛へてゐるのだつた。
愛妾お千代の方を初め茶坊主の宗珍腰元りえが綱宗の身體を案じてゐる。
やがて、手槌を持ち、後に近侍柴田新七を随へた伊達綱宗が出る。

一時やんでゐた雪は再びちら／＼と降りだした。

——したが、心にかゝる最前の老爺が言葉、儀右衛門がひそかに呼んで参れ。
その命に新七が儀右衛門を召連れて来る。
——儀右衛門、安藝の噂、甲斐の取沙汰、今一應語つてくれい。
が儀右衛門は心なき下々の者ことゝて、そうした話の事柄

がわからう筈もない。

いらだゝしきを覺えた新七が表詰所で問ひたいさうとするのを、綱宗はとゞめる。そうして宗珍がその重役な使命を果す事になつた

——丁度親宗支が命日、
然らば松前鐵之助に添狀を認め遣はす程に
大事な使ひちや首尾ようせうぞ。

宗珍は一世一度の使ひと許り書狀を内懐に納め、去つて行く。ちつとその姿を見送る綱宗の顔には、不安の色が現れてゐた。

しばらくして、殿の下屋敷の差配役濱田玄蕃が、無遠慮に座へ通るのだつた。
——御隠居に申し上げます。宗珍め掟を破つての外出、吃と糺明致しまする。

一同驚きの眼を見せる。その時玄蕃は、宗珍の持参した書の前に置き、

——この様な偽筆現はれませぬ儀御思案が肝要と存じます。御免。

新七が思はず業物に手をかけるのを千代の方は押し止める。

勿論——たぎる様な憤怒を綱宗はちつと
——余の口上にて、宗珍の免さるゝやうわ

びて参れ。

— エ、殿様の御口上にて、

涙をかくして新七、表詰所へ出向いてゆく千代は神酒とさゝやかな膳部をおりえに運はせる。

— いや、酒は敵、余は一生涯堅く禁酒と佛に誓ふた。

その折、突然新七が慌しく戻つて来る。

— 殿様、お喜び遊ばせ、

— では宗珍が

— それ所ではござりませぬ、唯今若殿様が俄の御入來、表詰所の侍共は上を下への大狼狽。

— 龜千代が参りしとか。

— 早これへお越しでござりまする。

— 待て、余も出迎へるであらうぞ、

綱宗の心は歡びに満ちてゐる。

程なく鐵之助を隨へた綱村が出る。

— 父上。

— お、龜千代殿か。

— 別れたはまだいたいけな二才の昔、よ

う恙なく成人……

— お父上も御無事にて、

親子は手を取り交して泣く。このうちに雪も激しく降り出す。

— 嬉しさの内とも、綱宗には我が子の訪れた譯がわからなかつた。その不審をとくために鐵之助がすべてを物語る。

その前日、酒井雅樂頭役宅に於て、伊達安藤原田甲斐との最後の裁決老中列座の上敷度に渡取調原田甲斐一味は非分に落ち公事は安藤の勝利となつたのである。

然し、天のゆるさぬ、悪逆を甲斐は覺らず安藤をめがけて斬りつけ、遂にこれを殺害、

又、自らも諸士のために命を果てたのだつたすべてを聞いた綱宗の眼には悲憤と悦びの涙があふれてゐた。松前鐵之助は更に言葉を續ける。

— 若殿様にはこの喜びを一刻も早くお父上にと……

— 下座にゐたお千代の方はその時手を仕へて

— 卑しい流れの吉原の高尾と呼ばれたは

— したため此先お傍には居られませぬ、

— 然し余は生きて上屋敷へは歸るまい。

— え、

— よし、悪人は滅ぶとも、不徳の余一生を袖ヶ浦に蟄居、綱村殿にはこの父を誠めて善政を布き民を憐れみ、あつばれ名君の名を綱宗はさう訓へて觀音菩薩に誓ふた自作の劍を興へる。そうして頼母しい家臣共に言葉

をかける。

— やがて綱村を中一同、引返してゆくのだつた。

— と、鐵之助を呼び止めた綱宗

— 乳人淺岡へ、余が胸中の喜びを傳へてくれ。

— は、ッ、

— 一同は勇躍歸還する。



歌舞伎
十八番内
鎌鼩

旅行宿出會の場

おほむ石

良門 日も早西へ遠近のことふる
鎌の音浮えて秋を彩どる唐錦

茂作 あはれを涙へて啼く雁も
落ちて行術は白露の星とも見
やる庭の面

良門 ハテ風情ある
兩人 眺めぢやなア
合方替はつて

茂作 トキに六部どんやうく
鎌も研ぎ上がった

良門 私は鎌で髭を剃るのは親
父のを見たゞけ故、申さば是
が初めてゞござんすから、上
手にやつて貰ひませう
茂作 なんでもねえ事、併し近

頃聞いた事のねエ此鎌鼩、勝
手は知らぬがやつゞけ様か
良門 ム、ドレ髭の座へ直ら
ふか

岩戸神樂の鳴物になり
兩人 やつとことつちやアウン
トコナ

居直りきつと見得、
茂作は肌ぬぎになり片
褌とりける右の鳴物に
て雙方よろしく茂作鎌
を立身にさし附け

茂作 見やんせ六部どん、丁度
今夜も宵月に

良門 雲間を放れありくと
茂作 形ちは鎌と同じ三日月

良門 ホンニのふ
見上げる
茂作 すきを見て六部の咽喉へ掛
ける、六部は手盥にて髭を濡し
盥を持つたまゝ兩人氣味合ひ、
ト、鎌の柄へ手を掛け顔見はせ

良門 フン
茂作 ハン
兩人 ムフ、ハ、ハ、ハ、
良門 イヤすんでの事に此素ッ首を、イヤあ
ぶねエ事のう
茂作 剛い髭ゆゑ力一杯もしや双先きが此方
の咽喉へに

良門 なんともない、私は不死身さ
茂作 ヤア
良門 夫故からだへ双物は立たぬワ
茂作 スリヤ夫故に、フム
思入れ此時ドロくになり日覆
より星を下るす、良門、茂作手
盥へ寫りしこなしにて

良門 ハテ
兩人 怪しやなア
星くりの合方

良門 途に虚空の東に當り群がる星のたゞ

申に、光を放つ一つの明星

茂作 東は則ち金星の司どつ所にて四方に千筋の光明輝き其影忽ち空に滿ちしは

良門 扱は現世に名將現はれ天下を治むる知らせなるか不思議な奇瑞を見る物ぢやナア

星を引上げ鳴物打上げ此止まり
兩人は懷中より帛紗包みの位牌を落し

兩人 コレハ

互ひ違ひに取上げ見て

良門

慶林院秀山郷里大居士俗名倭藤太秀郷

茂作

平泉院將門二前寂定禪門

キツと思入合方早めて

此位牌を所持なすからは扱は相馬の餘類よ

ナ

良門

イ、ヤ知らぬ覺へはない

茂作

覺へないとは云はれまい、最前より見る所、汝の相形世の常ならず、殊にかねが

ね聞き及ぶ右の灸所のこめかみに隠し質は

せぬ一つの黒子は正しく一子良門と三寸組

板見ぬきし證據

良門

ヤツ

茂作

なんと動きは取れまいがな

良門 ム、さいふ汝も秀郷の位牌を所持なす上からは本名なくて叶はぬ

茂作 いかにも我れは倭の一族、良門 扱は倭の一族よナ、父の敵秀郷の位牌當座の腹癒せまづ斯うなして

碓石に打ちつける

どろ／＼になり、悶絶する

茂作も位牌を取らうとして同じ

放心し直ぐに心付き

茂作

今の位牌を割ると等しく放心せしは不覺の至り

良門

良門を見

オ、此奴の悶絶なすこそ幸ひ頼信公へ申し上げ、討手の手配りおうさうだ

花道までつか／＼と行き、キツト見得、あはれの鳴物にて振あ

つて揚幕へ這入る

大ざつまへ折から吹き込む一陣の颯風と共にあなたなる佛間のもとに忽然と現れ出づる姫の亡魂

どろ／＼になり、二重は鼠壁田樂にて瀧夜又姫の靈、白の振袖すあみ肌ぬぎにて長刀を構へ押

だしにて現はれる

良門 瀧夜又 良門

鹿鳥様の合方になり樂を冠せ御身孝道を全ふせんと願ひ諸神諸佛も感應まし／＼今宵導き參らせし此家の主じこそ我等親子が仇敵伊豫守頼信、まつた下男に姿を和せしは父將門を射止めたる倭藤太が一子ぞや

有し姿を假の世は又現はせしか此事を御身に知らせん爲ぞかし怨み重なる彼等が頭べ討取つて父將門や此瀧夜又の妄執を晴らしてくれよ太郎良門、心得たるか

ハ云うより早くかき消す姿、うつゝと見やる良門は四方をきつとねめ廻し

ドロ／＼にて瀧夜又元の所へ滑へる、風の音にて良門心づき四方をきつと見て

良門 ハテ心得ぬ今秀郷の此位牌割ると等しく放心なす中、あり／＼見たる瀧夜又殿が詞の告げ扱は此家は源氏の一族、亡き人々の靈魂を慰むるは今此時、アナ磨しや悦ばしやナア

だしにて現はれる

良門 瀧夜又 良門

鹿鳥様の合方になり樂を冠せ御身孝道を全ふせんと願ひ諸神諸佛も感應まし／＼今宵導き參らせし此家の主じこそ我等親子が仇敵伊豫守頼信、まつた下男に姿を和せしは父將門を射止めたる倭藤太が一子ぞや

有し姿を假の世は又現はせしか此事を御身に知らせん爲ぞかし怨み重なる彼等が頭べ討取つて父將門や此瀧夜又の妄執を晴らしてくれよ太郎良門、心得たるか

ハ云うより早くかき消す姿、うつゝと見やる良門は四方をきつとねめ廻し

『鎌髭』上演に就いて

市川猿之助

今度、倅團子改メ、三代目段四郎襲名狂言として、上演致します此の「鎌髭」と言ふ狂言は、私にとつては、最も懐しい思出のある狂言でありまして、明治四十三年の折に、私が、猿之助襲名狂言として、亡父、段四郎と共に演じたものであります。

此の狂言は滅多に舞臺にかゝらぬもので有ますので御存じのない方もあると思ひますが、これは享保四年、亥の正月に、當時木挽町に在りました森田座に於いて、四代目、團十郎が、九歳にて、初舞臺の際に、菓子折の中から世利出る、此の狂言を演じたさうで、之が書卸しで、其の後、四十有餘年の後、明和の初年に、顔見世狂言として、矢張り、四代目、團十郎が、不死身の六部妙典を勤めたと言ふ事が傳つて居ります。それ以來、ずつと上演された事もなく、久振りで、私の襲名に際して、之を上演したのであります故、可成り古い物なので御座います。何分にも、昔の物でありますので、脚本として残つて居りませんので、唯僅かに鎌で不死身の六部妙典を斬つてゐる似顔繪を参考にして演ずる様になつたのですから、私の襲名に際して

殆んど新にアレンジしたのも同然で唯々大昔の芝居の味を失はない様、古風な面影を現したいと随分亡父は苦心した様です。

元來、此の狂言は、歌舞伎十八番——「暫」「矢の根」「助六」「勸進帳」「不破」「不動」「押戻」「七ツ面」「景清」「鳴神」「毛拔」「解脱」「蛇柳」「外朗賣」「翫」「象引」「鎌髭」「關羽」——の掛物を、師匠から十八人の門弟に分けて貰つた折に、亡父はくじ引で、此の「鎌髭」を貰つたのでした。斯うした事から、亡父と私、兩人のものと云ふ意味で、此の「鎌髭」が、私の襲名狂言として選ばれたのであります。そこで今度も倅團子の段四郎襲名に際して之を選んだのです。

私の襲名の折には、父は、良門と言ふ人物を、大きく見せる爲めに、成可く動かない様に、大間に演りました。此の「鎌髭」の六部妙典は「大時代物」で、幾ら斬られても、着物も切れないと言ふ、一寸考へて見ると、馬鹿々々しい様ですが、要するに、理屈に合はぬ處が、此の狂言の味と言ひませうか。唯、古風な、大味な處を見せるのが良いのでせう。(五、一〇、二六)



襲名披露に際して

三代目 市川段四郎

存じて居ります。

又、今は、黄泉の客となりました亡き祖母は、先月、東京の歌舞伎座に於いて、襲名興行が決まりました際は、病床より起き出で來まして、何かと懇ろな教を受けましたが、祖母の有難い心づかひに報いる爲めにも、最大努力をして、勉強します。今となつて考へて見ますと、祖母が今一ヶ月、いや今十五日だけでも餘命を保つて居る事が出來ましたなら、一度でも、私の舞臺を祖母に見て貰つて、もつと種々教へられて、より一層勉強が出來たで御座いますし、そして、祖母も安心して、一生を終へた事と思ひますと、何だか、心淋しくなつて參ります。

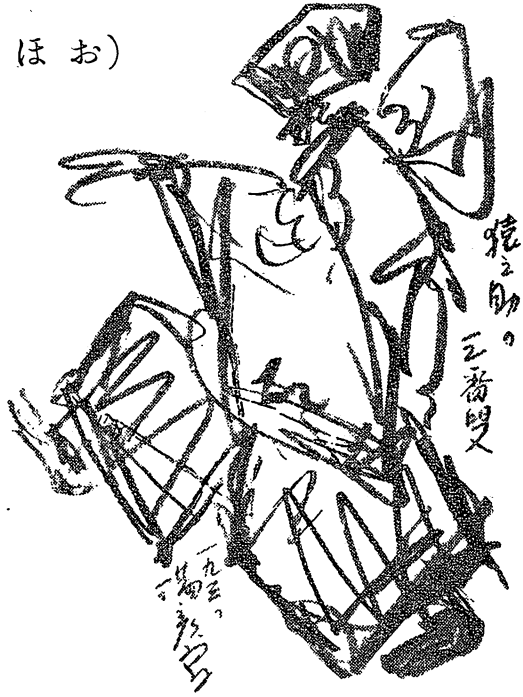
けれども、祖父と祖母の教を受けた父が、何かと此の後とも導いて呉れますので、之からは、より一層、粉骨碎身勉強して行きたいと存じて居ります。

(五・一〇・二六)

不肖、私の此の度の三代目、市川段四郎襲名に際して、何か私に書けとの事で御座いますが、此の「鎌鼬」が、私の襲名狂言として、何故再演されたかと言ふ事は、父猿之助が、書いた事と存じますので、今更、若輩の私が、喋々と述べる事も御座いませんと思ひますし、又、父は、亡祖父、市川段四郎と共に可成り苦心をして演じて居りますので、唯々、私は、亡祖父と父の苦心の型を、今又繰返して、不肖ながらも、熱心に寫し出して、前回上演よりも、もつと御見物の方々に、御満足して頂く様に、及ばずながら一意専心勤める心組で居りますが、何を申しましたも、若輩の私の事で御座います故、此の様な大役はとても満足に爲し終はせるものでは有りませぬけれども、父が苦心と研究の教示を受けまして、父の影法師の萬分の一でも寫し遂げる事が出來ますれば、私にとつて、喜ばしい事であると

操 三 番

(おほむし石)



猿之助
三番目

天照らす春の日影も豊かにてさす手引く手の一トさしは昔を今に式三番、ありし姿を假衣に竹田が作の立上へ是にて翁千歳よろしく出来る

とらうくたたりうたりあらら

千代の始めの初芝居、相河原時賑やかしに人の心なす蓬萊に鶴の羽座み龜の

尾の長き樂えを三つの願、幸ひ心に任せたり

鳴は瀧の水く鳴といふのはよい辻うらよ、天津乙女のさまが許、たへずにふたりたへずとらのが眞事なら、日は照るとも濡るゝ身にきつゝなれにし羽衣の松の十かへり百千鳥、たへずと

うたりありうとら

よろしく舞ひ納まる

其戀草は千早振る神のいたこの昔しより盡きぬなきのいさご路や、落来る瀧の末かけていも脊のよい申としに天下泰平國土安穩、今日の御祈禱なり翁よろしく振り有て翁、千歳は入る。

千歳 おふさへくよるこびありやわが此處より外へはやらじと思ふ

天の岩戸を今日ぞ開ける、此初舞臺萬世も花のお江戸のとつばひとへにおとり立おこがましくも御目見得にほんに鶴の眞似鳥哉

難江の岸の姫松葉もしげり爰に成かし住よしの神の恵みのあるからは君にあふぎのおんたとへ、あふとは嬉し言の葉も濱の眞砂の数々によむとしつきぬ年波や

友じよの翁はあだつき物よつこ補引いてなびかんせそふも千歳中人して水ももらさぬならば深いゑにしぢやないかいな面白や、

相生の松夜しゆびにあふの松、ほんにこゝろの武隈も岩代松や曾根の松あがりし歳やの陸言に濡れて色増す辛崎の松、松のすがたの若みどり、

千秋萬歳萬々せい五風千雨もおだやかにめぐみをぬはふ種まきとらうたいかなで、祝しける



舞踊劇 伯藏主 一幕

(おほむ石)

白藏主 詞 我は此邊に住む古狐のこつちやうです、此處に獵師萬作と申す者がござる、狐を釣る事大名入で釣る程に、某が眷族共數多釣取られてござる、又彼れが叔父に伯藏主と申すがござる、彼れの申す事はあま逆な事でも用ゆるとござる、今日は伯藏主に化け獵場へ近寄り釣を止めさせようと存する、マア似たか似ぬか水鏡を見申さう。

唄へ 駕す姿の伯藏主、我は化けたと面影の、それぞと悟る犬の聲ぞつと身にしむ鳴子風

詞 今の話を聞きあつて畏を捨てたは殺生を、止まると見ゆる、オ、夫れがよい、チト寺へも來させませ寺の事なれば、別に馳走はありないが、昆布に山椒茶ばかりおまそふ、茶ばかり、ウ、ウ、嬉しや、まんまと畏を捨てさせた、此上

詞 ヨウ扱こそや、又捨て畏が掛けてある、おのれ眷族共の仇、覺へたか

杖にて畏を叩く
ウ、クサイ、身にまとふたか青縁を脱いで一口にふくする程にぞ、動いたら爲めにならずぞ
又叩く畏落る

エイエイエツフン、くさい、く
花道へ行く
こんくわい
花道へ消へ込む、萬作出て畏をながめ、残念の思ひ入れ

『獨樂』に就いて

木村富子

「獨樂」といふ舞踊は、澤瀉屋にとつては所謂、家の藝とでも申すのでせう。成田屋の勸進帳、音羽屋の土蜘蛛など、同じやうに、認められて居る珍寶であつて、その昔先代の段四郎氏が踊つて、好評を受けたものと聞いて居りますが、私は其の頃は幼少であつたか、或はまだ生れて居らなかつたかして、全然其の踊りに覺えは御座いません。獨樂の踊りなどは、昔からいくらか有りさうで居て、實は一つも無かつたものと見え先年東京の福助氏の羽衣會で「獨樂」の古曲を探しましたところ、如何しても見附かりませんので、其の時に岡鬼太郎先生が「獨樂賣り」といふ新曲をお作りなさいました。これは二人の獨樂賣りに町娘や男の子等が、らんで中々面白く賑やかなものでしたが、私は此の獨樂賣りから思ひ附いて、澤瀉屋自身が「獨樂」に成るやうな、一人だけで踊れる「獨樂」の新曲を作りました。

昔の芝居には「變化舞踊」といふものが流行して「五變化」とか「七變化」とか申して、一人の俳優が早替りで、いろいろに踊り分けて見せましたさうですが、後に短い舞踊を組合はせて、いく人もの俳優が、代り合つて小曲を踊つたと申します

それを復活させたのが、昭和三年の九月、歌舞伎座の中幕に出た「小品舞踊五種」で、これは猿之助氏が「五郎」と「獨樂」福助氏が「黒髪一菊五郎氏」が「子守り」と「鳥羽繪」を踊りましたので、當時好劇家が興味を中心と成り、一幕見など、毎日見物が殺到するほどの有様でした。おかけ様で拙作までが好評を受け、越えて本年の四月にも、明治座で再演に成りましたが、此の踊りは、獨樂がくるく廻る度に秘傳が有るのださうで、此の秘傳は、猿之助氏の母堂がよく心得て居られたさうですが、猿之助氏は其の秘傳に依つて踊つて居られるのか、それとも自身の研究から奇麗に廻つて居られるのか、それは私にも判りませんが、後の「又渡り」の件は、二度目の明治座の時から附け加へられたもので御座います。

今度、中座の中幕に上演に成りますと、恰度三度目で、猿之助氏が親ゆづりの自在滑脱な「獨樂」の舞踊は、いよく油が乗つて、其の光彩を放つて居る事であらうと、私も其のうちに一度見物にまゐるのを、今から楽しみに致して居ります。

獨樂

石むほお

萬作 さあ〜是はかくれもない坊様方のお手遊び、評判の獨樂ちや、獨樂ちや。

大さく言ひ、獨樂賣萬作は好みの拵へ、獨樂を入れたる、箱をくり紐にて首にかけて出づ

独樂の助の獨樂賣

常々商ふ品は大獨樂小獨樂、廻らば廻れ門禮も、屠蘇の機嫌の調子よ

沖ちやエ沖ちや朝夕まはる

引いたり帆が廻る、舟にゆられて眼がまはる

しよんがへ

身は氣散じな世渡りや大路をわたる初東風に

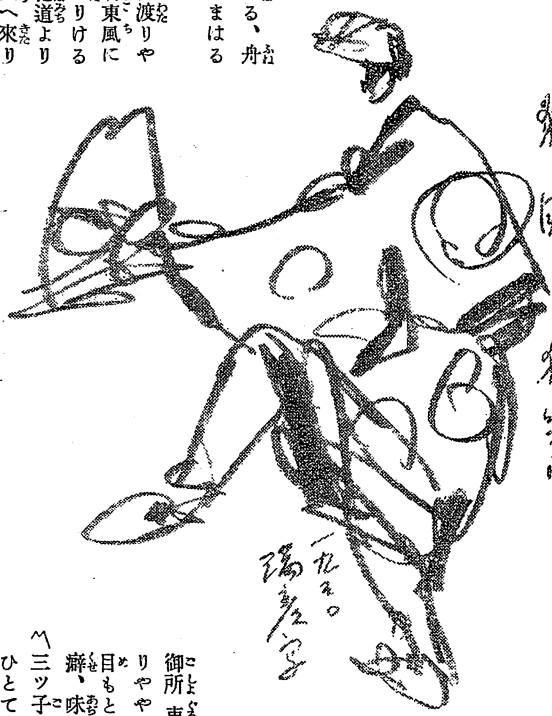
浮かれ〜て來りける

萬作は花道より舞臺中央へ來り

て、衣紋をつくらふ

萬作 さて御見物の何れも様へ、古めかしい言立も、初春なれば改めて、エヘン、そも〜獨樂の始まりは

常々古りし延喜の御代かとも、時平の大臣がよこしま



より、筑紫へ遠くさすらひの菅丞相が愛樹の梅。東風吹かば匂ひおこせよと詠み給ふ、君が情の通ひてや、花物いはねど都より、一夜のうちに飛ぶ梅のその枯木にて手ずさみの、姿も優なこまつぶり

優雅なる振りより

くだけたる振りに

常々冠の紐をき

リムとしやんと巻いて投げては

えいと引く。

〆サツキ引け〜

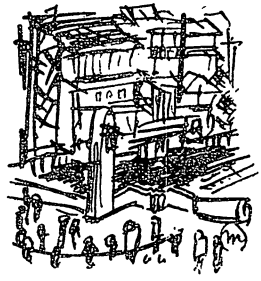
御所車ありや〜こりやこりやつとな、酒がすぎてか

目もとは櫻、梅は笑へど常の癖、味に拗ねたる松の振り

〆三ツ子の親は七十の、賀の祝

ひとてなますやら、米炊味噌摺りあたふたと、刻む嫁菜の姉いもと、色香を添へてなまめかし

これより萬作は箱の内より大獨樂を持ち出でてよるしく振り



『玉藻前』の上演諸感

松居松翁

今度大阪の中座で、愚老の『玉藻前』を上演して下さる事を愚老は眞惜みなく嬉しいと思ひます。一しきりは一年に何回か愚作を上演してくれた大阪劇場も、近頃はちつとも交渉をもつ事がなくなりました。舊作「尾形光琳」は、大阪の俳優諸子によつて、昨冬京都の顔見世に上演され、今春は矢張り京都で新舊二作の上演を見ましたが、大阪では丸二年以上何も上演されなかつたやうです。そこへ此作を上演される事になつたのは、愚老に取つて愉快なことの一つです。

それに舞臺監督は愚老自身に、舞臺装置は愚息桃多郎といふ東京の大谷社長からのおたのみも嬉しく、日限りの執筆物が三つもあつたのですが、みんなおつほり出して、二十八日から大阪致しました。

此作はたしか四年程前、ヘアリングの所謂デミニーチヴ・ドラマ風のものゝを盛に書いて居た時代の作の一つで、自分では

口幅つたいお話ですが——稍得意なもの、一つなんです。東京の歌右衛門がやりたいと音にばかり立て、居ながら、さあといふ時になると、いつも實行にならずに居たものです。それが偶然大阪で魁車君と壽三郎君とで演出さるべき運命になつたのは、愚老に取つて稍盲龜の浮木の歡びがあるのです。

勿論親子ともフロイドの精神分析學に凝つて居る今日から考へると、トーテムの思想や、フロイドの所謂アイデンティケーションなどを、もつと利用してかくべきだつたのですが、知らないといふもの程強いものは有りません。が『玉藻前』を全然妖狐として取扱つた當時の愚老の態度も、自分としては失敗とは思つて居ません。

それに今度は俳優諸君が非常に熱心なので、これも嬉しい一つになつて居ます。愚息は二十八日に「つばめ」で梅田へ着くと、中座の舞臺監事の方が迎へに来て居てくれて、これから稽

古にかゝるといふので、旅装を其儘親子で中座の樂屋へかけつけて、稽古の御世話を焼く事にしました。舞臺稽古が一日くり上つたので、俳優諸君が氣をもみ出し、特別に時間を作つて、稽古をくり返すといふ熱心さ。これならわざわざ、東京から駆けつけて来た効があつたと、これも嬉しい事の一つに數へて居ます。

たゞこちらの御見物には少し過ぎやしないかと心の裡では心配して居ますが、それも俳優諸君の手で救はれさうです。それは魁車君の玉藻前の臺詞が、江戸つ兒口調なので、アクセントの研究や何かで、非常に骨が折れ、その爲めに感じが出ないと啗して居られるので、「それはつまらない苦心だ。玉藻前はどうせ京都の人なのだから、どうか上方語でやつて貰ひたい」と申しますと、魁車君は「それならお手の物だ、やつと解放されたやうな氣がする」と云つて居られました。

此點で愚作の味が少しでも餘計出てくれ、ば、有難いことだと思つて居ます。

舞臺装置は、最初愚息が象徴的に面白いものを考案したのですが、大阪の劇場の追ひ出しでは、餘りに溢過るからと、愚老は強いて父の暴威を揮つて、今度の装置にかま直して貰ひました。愚息は不満足らしいのですが、でも「電氣の使ひ方でどうか胡麻化しますよ」など、元氣で居てくれるのは、これも親馬鹿の愚老としては、嬉しいことの一つです。

衣裳小道具の考案考證も、みんな愚息がやつてくれました。愚息のつもりでは衣裳は三越に小道具は藤浪にと贅澤な事はかり云つて居るのですが、この不況時代の事だから、萬已むを得ぬもの、外は、大阪に有る物でやつて貰ふ事にしましたので、この交渉に大分骨が折れたやうです。

それでも關係者一同非常に親切に、やつと満二十歳になつたばかりの小倅の命令を實行してくれるので、親馬鹿の愚老はこれも嬉しい事の一つに思つて居ります。

それに電氣は、愚息が遠慮なしに大仰なプランを立て、居るのですが、設備の十分でない中座の照明部主任が、非常な努力で愚息の案を少しでも多く實行に現はさうとして居てくれるのは感謝に堪へません。

感謝ついでにもう一つ。大道具は此座の竹中桂次君が、わざ／＼東京の拙宅へ来てくれて、愚息と折衝されて居たのでした併し装置家がほんの子供の事であるから、どんなものが出来るかと思つて来て見ると、——命令した時よりは悪くなりがちの大道具が——意外に大仕掛なものに進展して居る事を發見しました。

舞臺稽古をやつて見ない今のところ斷言は出来ませんが、兎に角愚息は大喜びで居ます。これも愚老の嬉しい一つです。

(十月三十日舞臺稽古の朝、藤村家の奥座敷にて)

松居松翁作

玉藻

前

(おほむ石)

玉藻前 (欠伸をしながら) 晴明さん、もうそろそろ尻尾を出してもよきさうなものですね

晴明 もう直です、出かゝつて居る筈です

玉藻前 (晴明の方へ進み寄つて) ど、どれ何處に?

晴明 (呆れて) 冗、冗談ぢやない、わしが尻尾を出すといふかね。御生憎だがわしは狐でないから、尻尾の持ち合せはございませんよ

玉藻前 手前ども、御同様でございますよ

晴明 しかしおまへさんは……

玉藻前 三國傳來の九尾の狐ですかね

晴明 そ、それに違ひないぢやないか。天竺では……

玉藻前 斑足王が千人の首を斬つて祭つた塚の神ですつてね、法螺も休みく、吹かないと、晴明さん今におまへさんこそ、尻尾を

出さなけりやならない事になりますよ

晴明 馬、馬鹿な、わしが何で……

玉藻前 わたしはもう半分位は、おまへさんの尻尾をつかまへて居るんですからね

晴明 煩さいな、すこし静かにして下さいな

玉藻前 わたしはもう半分位は、おまへさんの尻尾をつかまへて居るんですからね

晴明 煩さいな、すこし静かにして下さいな

玉藻前 やつと祝詞がすんだかと思ふと、今度は御經と早替はりますところは全く器用

晴明 爾時金剛手菩薩入三摩地名金剛等至熾盛光焰其光普照一切佛土周倫焚燒三界其中所有一切魔羅作障難者一切尾糞也。(眞言のお經)

玉藻前 やつと祝詞がすんだかと思ふと、今度は御經と早替はりますところは全く器用

晴明 爾時金剛手菩薩入三摩地名金剛等至熾盛光焰其光普照一切佛土周倫焚燒三界其中所有一切魔羅作障難者一切尾糞也。(眞言のお經)

玉藻前 やつと祝詞がすんだかと思ふと、今度は御經と早替はりますところは全く器用

晴明 爾時金剛手菩薩入三摩地名金剛等至熾盛光焰其光普照一切佛土周倫焚燒三界其中所有一切魔羅作障難者一切尾糞也。(眞言のお經)

玉藻前 やつと祝詞がすんだかと思ふと、今度は御經と早替はりますところは全く器用

晴明 爾時金剛手菩薩入三摩地名金剛等至熾盛光焰其光普照一切佛土周倫焚燒三界其中所有一切魔羅作障難者一切尾糞也。(眞言のお經)

代の事だ

玉藻前 (尚笑ひつゞけて) 唐土へ佛の教へが渡つたのは唐の時代ですよ、殷の紂王の時代に御經があつてたまるものですか

晴明 (半ペソをかいて) 左、左様かなあ、併しおまへさんが、そ、そんな昔の事を詳しく知つて居るのが、既に人間でない證據だ

玉藻前 無學者論に負すといふのは、全くお前さんの事ですよ、お前さんも陰陽頭とか何とか云はれて、朝廷の祿を食んで居るんだから、女童をよるこぼせる加持祈禱などばかりに醜観しないで、少しは本をお讀みなさい

晴明 どうも濟みません

玉藻前 あやまるには及びませんが、それにしてもわたしを三國傳來の九尾の狐だなんて云ひ出したのは、流石におまへさんも見上げた山師ですよ

晴明 山師はひどいなア

玉藻前 何しろあゝいふえらいお方をお欺し申さうといふんだから、此上なしの山師ですよ

晴明 おまへさんこそ殿下を御惱ませ申して

玉法にたゝりをしやうといふんだから、山師どころか、恐、恐ろしい謀叛人だ

玉藻前 (冷笑して) わたしが何時殿下に祟りをしました

× × ×

玉藻前 それでは、おまへさんは、わしが最初から九尾の狐とは信じてゐなかつたのね

晴明 面目次第もありませぬ

玉藻前 (呆れて) わたし、おまへさんのやうな圖々しい人は初めて見ましたわ。それにしてもおまへさんはわたしを調伏するなんて、こんな驅ぎを始めて、愈わたしが尻尾を出さないとなつたら、一體どう鬼をつけるつもりなの

晴明 (割合に落つて) よろしく御指導を願ふんですね

玉藻前 (益々呆れて) 御指導を? 誰、誰の? 晴明 賢明なるおまへさんのね

玉藻前 まあ、おまへさんは一體剛巧なんて

せうか、馬鹿なんぞせうか

晴明 かうなつてみると餘り剛巧ともいへなくなりまししたね

玉藻前 まあ、呆れ返つた厚顔しい男ね、人を動物扱ひにして置いて、もうかなはないとなると、今度は指導をして貰ひたいなん晴明 これがいゆる窮鼠却て猫にすがるといふ新ですよ

玉藻前 鼠が猫にすがるとでなくつて、人間が狐にすがるとだわ

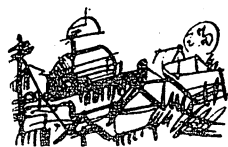
晴明 わしもこんな破目になつては大變だと思ひながら、どうしやうも無くつて、これまで事情に引摺られて來たのですが、しかしそこは如才なく萬一を慮つてこの御殿の近くには人ツ子一人寄せつけない様に置いて置きました。泰山府君の御供は、神祕中の神祕だからといふわけだね、さうら御覽なさい。あの御殿の中は勿論向ふの廣庭には影法師一ツありますよ

玉藻前 おまさんの様な悪黨には、わたし生れて初めて逢ひましたよ、全くいゝ度胸ね

晴明 (平氣で) 左様見えませぬ、有難い仕合せで

玉藻前 まあ

晴明 そこで此難境を、おまへさんはどう切ぬけさせて下さる



『この太陽』の脚色について

川村花菱

『この太陽』の原作は、非常に觸感の新らしいピチ／＼したもので、それを舞臺にかけると云ふ事は非常にむづかしい事だと云ひました。それは新派の芝居の舞臺上の約束が尖端的に行かないと云ふ事情と、ともかくにも五幕十何場の長時間を持たせると云ふ上から見て、義大夫のサワリのやうな所もなければならず、原作をそのまま、にスラ／＼と表現して行くと、近代的には興味があつても一般芝居見物と云ふ立場から見ても、あまりにも芝居が無さすぎると云ふうらみがあるやうに考へました。

私は腕子と云ふ婦人は大好きな人です。あ、云ふはつきりした氣持の持主はめつたにありません。あの氣持を完全に舞臺に生かして行くと云ふ事は極めてむづかしい事で、ともすればにくらしく感じられやしないかと不安に思ひます。

稀に見る婦人である丈に、その存在は一層意義のある事なのですが、従つてそれが一般には理解されにくい。理解されにくい所に腕子の存在があるのだと思ひます。

蘭子にしても、多美枝にしても、従來の通俗小説にはめつた

に表はれて居ない性格で、蘭子にも私は同感を持つてゐるのですが、その方面の事を詳細に表現して行くと、芝居の筋が二道になるので、つまのやうな形式にして仕舞ひました。

男の方から云へば、杉山は、サーニンを怎かしたやうな代表的男性で、本當の女ならば當然惚れなければならぬものだと思ひます。技巧とか、美しい顔や姿と云ふものでなしに只本當の男性中の男性と云ふ底の方で女を惹つけて行くのですが、やつぱりこれも芝居にして見せるには、説明の出来ない點が多いのでむづかしいと思ひます。

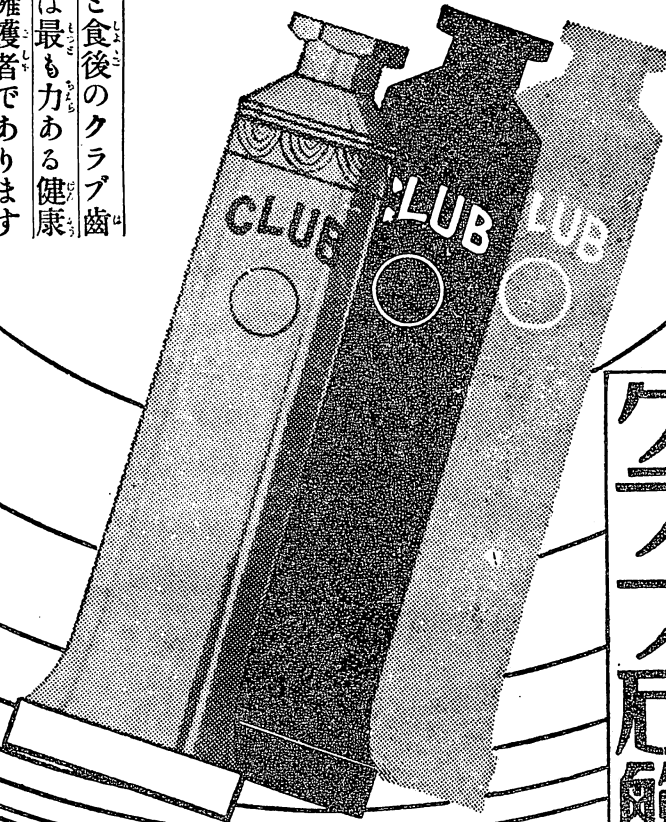
此度の脚色は、要するに、「この太陽」の輪畫丈をうつすら書いたと云ふ丈で、原作者のねらつた深い所までは少しも行き届いて居りません。大詰などは、太陽を出してごまかしてあるのですが、自分ながら、餘りのあざとさに恐縮して居ます。

こうした作品は、もつと新味を持つて脚色して、腕のある新劇團の人々に由つて自由に上演して見たら、本當のモダンな通俗劇が出来はしまいかと思ひます。

の 一 第 力 效

磨 齒 ブ ラ ク

朝と食後のクラブ歯
磨は最も力ある健康
の擁護者であります



最良の石鹼

ク
ラ
ブ
石
鹼

西條八十新作

「女給の唄」

一、わたしや夜さく酒場の花よ

赤い口紅、錦紗のたもと

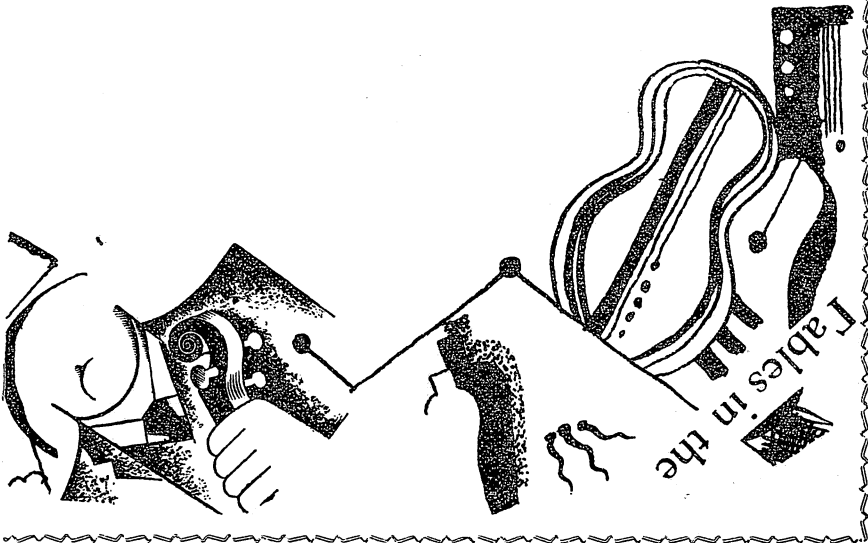
ネオン、ライトで浮れておどり

さめてさみしい涙花。

二、わたしや悲しい酒場の花よ

夜は乙女よ、晝間は母よ

昔かくした涙のたもと



更けて重いは露ぢやない。

三、弱い女をだまして棄て、

それがはかない男の手柄

女いとしやたゞ諦めて

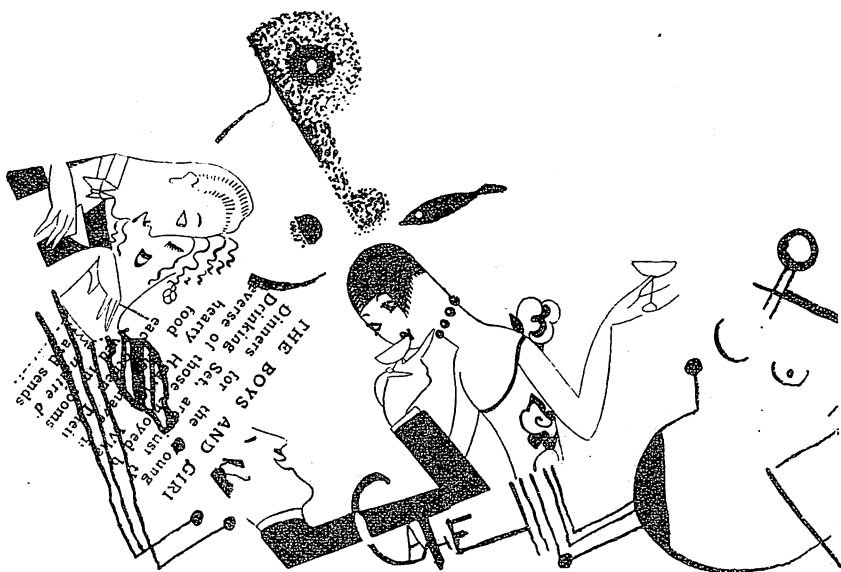
辛い浮世に赤く咲く。

四、雨がふるく、今夜も雨が

更けてさみしい銀座の街に

涙落ちても戀しいむかし

惚べ惚べと雨がふる。





『女給』を

語る

鳥江 鍊也

○ 廣津和郎氏の小説『女給』を、今度角座の十一月に新組織された成美團に劇化上演することになつて、その脚色を僕が引うけた。

その小説といふのは、この間それが掲載されてゐる婦人公論の雑誌社と、作中のモデルに使はれた文壇の大御所××氏との間に、香ばしからぬ問題を惹起して、トンダ宣傳になつた程のもので、その宣傳の利き目は雑誌の賣行きを増したといふことである。だから、芝居にしても一般の興味を惹くには充分だ。

○ 芝居になつた『女給』はどこまでも芝居である。小説そのままのプロットを見せるには第一時間が許さない。次に限られた空間藝術に於て然りである。そこで、原作を如何にアレンジしたかを鳥渡こ、で述べておかう。

原作は百五十枚程の原稿で、廣津氏は最初これを一気に書上げてしまつた。それがこの十一月號位で、約大半が掲載された

ので、全部載り切るのは來年の二月號位であらう。

だが、芝居では、半分だけやつたのではまともがつかない。特に、全部の原稿を見せてもらつて、雑誌よりは一足お先に全部を脚色上演してゐる始末である。

○ 内容は小夜子といふ一女給が銀座のＴカフエで小説家の吉水薫を知る所から書出されてゐる。この吉水が自家用の自動車で小夜子が大森の海岸に誘ひ出し、變なことしやうとしたが果さなかつたといふ、ブルヂョア文士の一面をバクロしてゐる。

(一)、が彼の××氏との問題の原因であらう)。そして小夜子が女給になる迄の苦しい生活記録が書いてある。この間に子供を産む。それから話をもとに戻つて相良といふ一青年との交渉が初まる。相良は小夜子を熱愛して、彼女に結婚してくれと迫るしかし相良には妻子があるので、小夜子は「考へる」と言葉で濁す。相良は自分が獨身だつたら結婚してくれるものと思ひ込んで、遂に妻子を離別する。小夜子は困つて両親に相談して來

ると、北海道の實家へ歸る。相良が追つかけて行く。そこで彼女に結婚の意志のないことを彼は知つて、歸京の途中仙臺で自殺する（これは未遂に終る）。所で彼女はそんな事件のためにヴァンプの小夜子といふ評判が立つて、再び東京に舞戻つても、世間は彼女をヴァンプ扱いにする。その時、また吉水氏が顔を出して、彼女を物質的に應援する件がある。そのうちに相良は東京へ歸つて来て「結婚詐欺」の告訴をする。警視廳に彼女が召喚される。そして刑事連からこんな女は社會の青年を害するものだと言罵されるが、彼女は敢然として「取締るなら相良の様な男共だ、三十面を下け、しかも妻子のある身で、私だち女給のサービスの言葉を盲信して妻子を放り出したり、自殺をして見たり、そんな馬鹿者共こそ取締つてもらひたい」とやつつけたのが、反對に刑事の氣に入つて許される。彼女は長い警視廳の廊下をチャールストンをおどり乍ら引下つた——といふのが小説のアウトラインだ。

芝居は大體、その筋に依つてゐる。小説の傍流の筋として君代といふ女給とラグビーマン掛川の事や、吉水氏と京子といふ女給の事などがあるも、それも取入れてやつてゐる。

たゞ、違つてゐることはお終ひの件りだ。警視廳での小夜子の氣焔は廣津氏とも了解の上、やめてしまつた。

その代りに、小夜子のアパートにして、こゝへ相良を出して

ゐる。そして原作の結婚詐欺の告訴の代りに、相良を毒死させて、小夜子といふ女給が、その職業意識の單なる愛嬌の一言が純情な一本氣の青年を死に至らしめる痛ましい事實として扱つて見た。

第一幕は銀座のTカフエーで、こゝで小夜子の半生の苦勞話を聞かしてゐる。次は土橋のガード、小説にもある所だ。第二幕は北海道の實家、親子姉妹水入らずの夕飯に、小夜子が都會生活の苦辛を物語る所、見物のお涙頂戴をねらつたつもりである。次が停車場で相良と小夜子の別れ。第三幕は銀座裏の地下室酒場、大詰がアパート。停車場以後は原作をよんでゐる人にもまだ知られてゐない所で、事件のクライマックスである。

役々では石河薫の小夜子、東愛子の君代、山田隆也の相良、都築文男の小夜子の父、米津左喜子の母、浪花千榮子の妹、伊志井寛の掛川勇、進藤英太郎の吉水薫などが重なる所、とにかく近代神經に觸れた芝居をやつてくれてゐる。

あながち、世間の「女給」全部が小夜子のやうな女性ばかりではない。しかし、この小夜子の生活史のどこか一部づつは僕たちの知る限りの「女給」諸君が持合つてゐる様にも思ふ。それだけ、この「女給」劇は近代社會が生んだ職業婦人の存在と同時に、劇場での新しい「生産」の一つとして舞臺に送つたつもりである。

劇壇往來

東西大歌舞伎

中座

一日初日
午後三時開幕

【狂言】一番目、食滿南北作同舞臺監督、吉川觀方衣裳考案、松田種次舞臺裝置「源平盛衰記」一幕、歌舞伎十八番の内「鎌鼬」大陸庵連中・中幕大森痴雪作同舞臺監督、吉川觀方衣裳考案、松田種次舞臺裝置「伊達綱宗」一幕、所作事、上の巻「探三番長唄連中・中の巻」伯藏主「竹本連中長唄連中・下の巻」木村富子作「獨樂」常磐津連中・二番目大森痴雪作、松田種次舞臺裝置「一里塚」一幕、大喜利、松居松翁作同舞臺監督、松居桃多郎舞臺裝置「玉藻前」一幕

【配役】伊達綱宗・西屋金五郎(鷹治郎)本三位中将重衡、瀧夜叉姫の靈・金五郎女房お妙(福助)柴田新七、伯藏主・獵師駒作、長三郎(伊豆藏人)太夫頼兼・仲居おあき(吉三郎)幸若坊・鹿島踊り琴作(駒之助)富田二右衛門(成笑)井上右近・漁師綱藏(成三郎)宣寸の辨恵・橋本吉之丞・男衆文吉・三浦介(扇)秋保三之助・遊女千壽・上總介(鷹之助)阿字卍字海龍・順禮四郎平・青山重大夫(升藏)十力法師(政治郎)俊方の妻若狭・愛妾お千代の方・翁・玉藻前(魁車)託宣十乘・伊東善十郎(奥山)阿開阪本の源興(魁童)白捲の律師千坊・漁師音藏(市昇)仲居おきん(雀)漁師磯右衛門(齊五郎)釵の澤明俊馬土づたい、老僕儀右衛門・料理人利七(九剛次)濱田玄蕃・船頭彌右衛門(箱登羅)母親お房(蓮女)木工馬允友時・日野次右衛門土佐の漁師茂平(市藏)坂の四郎永寛・澤田久五郎・安部晴明壽三郎)老僕藤平次(西屋藤左衛門(大吉)童阿彌丸・腰おりえ(成太郎)石金丸(章景)重衡の北の方佐の局茶坊主宗珍・千歳・西屋の伴藤吉(扇雀)三澤作左衛門(呵猿)戸野三郎。旅座頭李市(段徳)猪の熊入道猿心(辯猿)下男茂作實は小藤太守卿(段四郎)六部妙典實は將軍太郎左衛門・松前鐵之助・三番叟・獨樂實万作・島原直馬(猿之助)

志賀 淡海お名残り

浪花座

一日初日
晝正午二回開演
夜五時半

【狂言】第一、足立萬里作「うねぼれ男」三場・第二、近江飄餘作「少女の猛進」二場・第三、足立萬里作「熟柿」三場・第四、石橋和作「カメラエビント」三景。

【配役】許婚お玉、中山儀一(龜鶴)紳士、昌一、車掌栗野(辨慶)板場中野、重役奥田、祖母とら(樂太)友達松太郎、老母、妻おぬい(白石)學生今尾、祖父重信、桃山忠篤(歸帆)木村靜子、情婦濱子(登喜次)紳士田邊、俳優(樂祐)老人西村、執事上野(都)茂平妻みよ、老母くら(式部)幸吉女房かつ、令嬢百合子(辨天)令嬢富士子、妹かな、山川妻直子(かもめ)友達徳造、番頭重助(源五郎)仲人福田、社長清水、代診松山(十太郎)父山崎茂平、叔父又作(太郎)ボーイ村田、谷澤周助、開業醫山川(淡海)

新組織の成美園

角座
一日初日
晝正午二回開演
夜五時半

【狂言】第一、廣津和郎原作、島江鏡也脚色、婦人公論連載「女給」三幕六場、門脇陽一郎演出・森寛次郎裝置・西條八十新作主題歌「女給の唄」演奏・第二、牧逸馬原作、川村花菱脚色、大阪毎日新聞既載「この太陽」五幕十一場、中井泰孝演出、繁岡鑿一裝置
【配役】小夜子父重造、杉山喬太郎(都築)勝見宣治、兄浩一郎(元安)作家吉水薫、白井巽(進藤)客増井、壯漢大岩(山中)噺子弟春樹(高田)小夜子弟清(伏見)社員田子、父皆川(鈴木)そばや、中根謙介(茂義能)犬丸老人(梅田)女房お作、山内常子(木下)女給君代、噺子(東)女給さかち、早瀬辰子(香取)女給すみ子、ダンサー百合枝、中根房江(雄鳥)小夜子の母お末、中根孝子(米津)皆川母(吉野)妹幸子、姉萬子(六條)女給小夜子、岸蘭子(石河)ラグビーマン掛川、中根元雄(伊志井)會社員相良純三、高曾我部(山田)

文樂座十一月興行

一日初日
午後三時開幕

【狂言】「假名手本忠臣藏」大序より一力茶屋場まで
【配役】「鶴ヶ岡」直義(町)判官(つばめ)顔世(南部)若狹之助(浪花)師直(和泉)三味線(可、團六)「桃井屋敷」口(長子、陸路、三味線、寛市、友作、友二)同奥(文字三味線勝平)「下馬光岩進物」島、三味線友造、友平)「殿中双傷」駒、三味線重造)「裏門」相生、三味線歌助、芳之助、友之助)「扇ヶ谷」津、三味線友次郎)「霞ヶ岡」綾、三味線友若、猿太郎)「山崎街道」(源路文、三味線綱右衛門、友右衛門)「二つ玉」(つばめ、三味線勝市胡弓友太郎、小綱)「身賣り」(南部、三味線吉彌)「勘平切腹」(古靱、三味線清六)「祇園一力」由良之助(土佐)力彌(さの)重太郎(長尾)喜多(富)彌五郎(文)おかる(鏡)九太夫(貴鳳)伴内(鏡)平右衛門(大隅)亭主辰仲居千駒、幡路、龜久)三味線新左衛門、道八、吉兵衛)
【人形劇】顔世御前・おかる(文五郎)加古川本藏(吉田玉次郎)斧定九郎・斧九太夫(茶

屋場)(玉幸)斧九太夫(扇谷)百姓與市兵衛(門造)大星力彌(門太郎)高野師直・原郷右衛門(小兵吉)石堂馬之丞・與市兵衛・女房(玉七)千崎彌五郎(政龜)妻戸無瀬・矢間重太郎(扇太郎)鹽谷判官・寺岡平右衛門(玉松)早野勘平・大星由良助(榮三)桃井若狹助・鷲坂伴内(紋十郎)

會我 五九郎劇一派

樂天地
十月三十一日初日
晝夜二回開演

【狂言】(1)「湯屋番」一幕。(2)「みず腫れ」一幕。(3)新作「八公」三場。(4)「あの太陽」一幕。(5)「女房心得帖」一幕三齣
【配役】樂童(為頭)勘五郎、伴小彌太、留造(蝶太夫)葉茶屋倉光、伯父辰五郎大工棟梁(通天)湯屋主人千太郎、鬼王(社長)與村、剃身屋の茂平)樂雁(會社員、田代、熊五郎)光子(お和すみ、ダンサ千鶴子千太郎妻)萬里子(細君今子母おふで)清子(近所の娘、映畫女優)みさを(女房おたき與村の妻女房おとめ)櫻子、田代の妻春子娘お美喜、娘お加代(五九郎)藏下の八五郎、寫真屋小泉、千太郎の母お茶)



源平盛衰記

一幕

食満 南北作

老僕 藤平次

戸野三郎

幸若坊

赤若鬼

青鬼

法師大せい

佐の局

俊方の妻若狭

第一場 南都東大寺の燒跡

舞臺は治承の亂に重衡のために燒亡したる南都東大寺大佛殿の一部、大佛の膝など大きく見ゆ。

かしこ此處に或は腰をかけ、或は長刀を杖に立ち或者は大地に胡座し、ある者は後向きに鑿石に腰を下ろす者など、それは劍

時は

處は

人は

第一場は南都東大寺の燒跡

第二場は木津川のほとり

本三位中將重衡

木工馬之允友時

伊豆藏人太夫頼兼

坂の四郎永覺

劍の澤明俊

宣寸の辨惠

詮宣十乘

白毫の律師千坊

阿闍坂本の源興

阿字卍字海龍

十力法師

石金丸

童阿彌丸

の澤明俊、宜寸の辨恵、詫宜十
乘、白毫の律師千坊、阿闍坂本
の源興、阿字卍字海龍である。
諸寺につき鳴らす殿々たる鑑の
音にて暮ひらく。

明俊 もう佛敵重衡が此處へ来るぞ。
辨恵 東大興福の伽藍を焼き、瑜伽唯識兩部
の法門因明内明一卷も許さず三論華嚴の經
の經釋大乘小乘の佛典を悉く煙となした
本の三位の罪は重いわ。

十乘 永覺法師が申受けて鎌倉よりつれて戻
つた重衡にこの焼跡のさまを見せてやるも
佛罰を思はしめる一ツの方便。
千坊 しかし木津川のほとりて彼を斬るにし
ても、唯打首にしてはあまりに手輕ぢや。
源興 砂へうづめて頸を、鋸でひいてやらう
せてそれが佛への詫ぢぢや。

海龍 手ぬるい、逆はりつけぢや。
明俊 ハハハハ、もう吾等法師の手に落ち
た重衡焼かうと儘、煮やうと儘ぢや、まア
急くな。
辨恵 でも鎌倉からは源三位の孫伊豆藏人太
夫頼兼と石金がついてゐるぞ。

明俊 フハハハ、藏人は源氏の武士、石
金丸は小わつば物云ふたら頭引ぬくまでぢ
やわ。永覺法師の沙汰をまつても遇うある
まい。
十乘 永覺法師が来たとして、この評定にかは
りはない、あの法師は轉害門で三尺の長刀
を打ぶつて手いたく働いた時疵まで受けた
恨みの一戦。
千坊 フム、さうぢや和僧達よりはもつと手
殿しい刑罰を申付るかもしれないわ。

源興 眞實ぢや、鎌倉殿からあの佛敵を申受
けたもあの法師の働きぢや。
こんな噂をしてゐる後へ榻の直
垂頭黃の腹巻三尺の長刀に大刀
を無雜作に横たへた坂の四郎永
覺、コニツと出て、この噂をう
しろの焼跡の石段で聞く。一同
心づかぬ。この時大聲にて。
永覺 徒らな問答無益ぢや。
明俊 ヤツ、永覺法師か。
辨恵 我等の評定を徒らな問答とお云ひや
るか。

永覺 云ふた、鋸で挽いたとて、火にあぶ
つたとて、それでこの伽藍がもとの如くに
成らうか。たゞ重衡を申受け法滅の跡を見
せ、木津を涉つてかしこに斬らば、本の三
位の罪障消滅、今宵成の刻、重衡の頭はね
て、彼が軍勢を號令した奈良坂のほとりに
梟けて諸人に見せしめい。

明俊 心得である。
永覺 まだ油斷のならぬ世ぢや、平家に心を
よせて本の三位を奪はうといふやからがな
いでもない、御坊の成敗濟むまで木津川は
舟一艘人一人も涉らさぬやう、詫宜十乘お
坊見はりせい。
十乘 心得である。
一體する、永覺焼落ちたる堂を
見上げ。

永覺 ためしなき佛敵、かほどの法滅は震且
にも類は稀ぢや、この殿堂と共に焼死んだ
る衆會千七百、山階寺にては五百有餘、在
々所々の坊舎には二百人、戰場にてうたれ
たる者七百、併せて一萬二千有餘の法類に
物申す、御坊達の仇、法滅の佛敵重衡は今
正に佛罰を蒙つて木津の河原にむさきむく

老手に聞くまでもなけれど、源平久しく干戈を交え、しかばねは亂麻の如し、かくて災ひは三國無雙の佛體にまで及ぼし奉る。佛法破滅の人、天竺の提婆達多我朝の守屋今又茲處に本の三位中將平重衡あり、三逆の罪、許させ玉へ、南無佛く。

石金丸

中將の卿く。

呼はり、石金丸案内して佐の局十力法師と共に急ぎ出る。

頼兼つかく、とよつて

藏人

ヤツ、重衡卿の北の御方。

佐の局

オツ、お身は藏人太夫頼兼殿か。たつた一目我夫に逢はせてたべ。

十力

日野におわす御姉君、三位局の御もとに浮世に隠れませし北の方にしておはします

石金丸

これへまします道すがら、すりぬけて庵を訪ひ、これまでお供申したり、今世のお別れ二世の御縁のはかなき日、何卒何卒中將の殿に。

明俊

ならぬわ。

石金丸

エツ。

明俊

吾等の手に受取つた本三位重衡、頸に

石金丸

エツ。

して對面させうぞ。

永覺 明俊ひかへい。

明俊 ナゼおとめあるな。

永覺 法師の情佐の局は鳥飼中納言の御胤、永覺法師が何事も心得てある、近う來られい。

佐の局 お許し玉はるとか。

よつて

中將の卿。

これにて重衡靜かに正面を向き

重衡 佐の局か。

佐の局 アツ。

御顔の色の黒き、御垂のむさくろしき、瘦たる殿が我夫か。

あきれる

重衡 昔の面影あらばこそ、そも一の谷にて童子鹿毛にあわふかせ板宿にまで落ちのびしを、源氏の武士、庄の三郎家長とやらんに馬は射られ囚へられて京鎌倉を曳かれさらされ、この頸はねられんとせしを、奈良の大衆の懇望によつて今また此處に曳かれし重衡、北の方、世盛りの夢破り玉ふな。

佐の局 イエく、夢はいつまでも夢のまゝにさめたるはござりませぬ。二十年の榮華一門の榮え、今又悲しいこの有様。

重衡 ソレも佛罰であらうぞ、飾りを下ろして吾等が冥福を祈り玉へ。

佐の局 それが今生のお言葉でござりまするか

重衡 二世の紀念。

おくれ毛をかみきつて涙す

佐の局 おかたみとや。

重衡 オツ。

雙方思入れ

佐の局 せめてはと十力法師にもたせましたお小袖お召かへ遊ばして死出の晴着とも。

重衡 よう心づかれた過分に存じ申す。佐の局手傳ふて白き小袖をきせる。着かへて

脱ぎ替ゆる衣も今は何かせん、けふを限りのかたみと思へば。

よむ、北の方も涙ながら

佐の局 たのみをく、ちぎりはくちぬ物といへば、後の世までも忘るべきかね。

重衡 オツ、二度見奉る嬉しさ、もう此世に思ひ置く事もなし、藏人太夫、とうく

馬を。

頼兼 ハツ。

馬をひかうとする。

佐の局 イエまつて下さりませ、最後のお場

所は木津の川邊と聞く、せめてかこへ。

重衡 今世に女を具して、源家の人々、奈良

法師の物笑ひを受け、この上に耻をさらせ

やうとか。

佐の局 エツ。

重衡 のかれよ。

佐の局 イエ〜今世の赤繩は淺くとも、未

來のちぎりを。

重衡 エイ未練候三位の局へよしなに傳へら

れよ。

佐の局 もし。

とめるを振拂ふて馬にのる、佐

明俊 詮宜十乘、一人も木津を涉すな。

十乘 心得である。

永覺 戊の刻に成敗すまば、かしこのあかり

を一時に消し、吾等こなたの岸にあるもの

のしらせにせい。

明俊 其儀承はつた。

永覺 法敵とてけふが最後、必ず情を忘ら
れな。

明俊 ハツ。

十乘 とう行かれい。

石金 卿。

十力 中將の卿。

佐の局 我つま。

よるを法師等は左右に拂ひのけ

一同つき従ひ、舞臺上手へ這入

る、永覺はちよつとのこつて思

入れ。局はすりよつて。

佐の局 もし情にどうぞかの岸へ。

永覺 面波色黒ずみしを見あげてさせ御涙玉

とちる、まして痛はしの最後の様。

佐の局 エツ。

永覺 必ず見られな。

佐の局 ても。

永覺 川を渡さぬは永覺の情ぞ。

いひ捨て、這入る。

佐の局 ヤヨ十力、よし川は涉らずとも、せ

めてこなたの岸からなりと。

十力 御最期を縁をよそながら。

佐の局 オツ。

跡をしたふて這入る又、いんい
んと響く鐘の音、播磨の國の住
人福井庄の下司次郎大夫俊方の
妻若狭、老僕藤平次附添ひ旅す
がたにて出る、老僕はジロ〜
と四邊を見て。

藤平次 方様、何といふむごたらしい法滅の
跡では御座りませぬか。

これにて若狭悲し氣に見やり。

若狭 恐ろしいは重衡様、吾妻次郎大夫俊方

どのも恐らく御誂め遊ばしなであらう、常

日頃から佛法師依の吾等夫婦、この恐ろし

い、御寺の焼打、俊方殿も目前に見られあ

まりの淺ましさに、進んでお討死遊ばした

事であらう、重衡様は佛敵の上、我々の仇

のう藤平次。

藤平次 左様で御座りますとも、親しく殿様

のお討死のあと、また、如何に佛の道場が

荒されてゐやうかと、福井からはる〜の

巡拜、かほどにまでとは思ひませぬだ。

若狭 佛罰は恐ろしいもの、相國人道様にも

幾程もならぬに火の病でお亡くなりなされ

たも末の子重衡の卿に御下知遊ばしてこの

南都をおせめなされた故ぢや、それにしても我夫の御最期の程も聞きまし、若し此のほとりに御堂の焼けた其時をよく物語る人もあらばくわしう聞きたいものではないか

藤平次 せめてこのお姿、見上げ申すも勿體なけれど、御同向遊ばしては如何で御座りませう。

若狭 もとより罪障消滅の爲、二ツにはなき夫の佛に手向かひし佛罰の程もさんげいたしませう。

藤平次 それがよろしう御座ります。大佛の像に對して手を合はす。この時旅ごしらへの戸野の三郎、幸若坊の二人語りながら出る。

三郎 幸若坊、お身はとうへ髪を下したな。幸若坊 あの時、怖ろしき、盧遮那佛のお頭の流れ墮ちる様、如何に相國入道の下知とはいへ、そびらに汗をもやうしてな。

三郎 さんげ滅罪の爲の法體か。幸若坊 鑑にかへる墨染の袖、さう言ふことも武士を捨てたか。

三郎 捨てたとも、今では絹賣る商人ぢや。

幸若 ほんにお互はかうしてさんげしたが、重衡の卿は京鎌倉と引まはされ、けふは木津でこの法師連に首斬られるとやら。

三郎 むかし御主とあほひだ丈け、物悲しい心地もするな。

幸若 しかし人は皆重衡の卿がこの東大寺や與福寺を焼いたと思ふてゐるであらうが、重衡の卿はその時下知はなかつた、火をかけたいなどそんな事は仰有らなんだ。

三郎 さうとも、あれは福井の庄の下司次郎太夫俊方が、楯を破つてたいまつにして、酒屋在家へ火そかけたが折柄の乾の風、と

う、このやうな事になつたのぢや。これを聞き若狭思はずツカ〜と前へ出る。

若狭 この衆達、今の噂はまこととござるか三郎 ヤツ扱つても美しい女性、今の吾等の話を聞いてゐられたか。

若狭 この御堂を焼いたのは誰殿ぢやと云はれますな。

幸若 サア、世の人は何と云はうとこの東大寺の御坊達がどのやうに云はれやうと、正しくこの眼で見えてゐた、これは次郎太夫俊

方といふてな、福井の下司、人かきのけて手柄せうとの俊方、佛罰はてきめん、般若路での討死むごたらしう法師に斬られた。

若狭 エツ。若狭はいよく驚き、もし次郎太夫俊方の事をよう御存知で御座りますな。

二人 エツ。二人驚き顔見合せて

三郎 お身は。三郎 エツ。あのう、次郎太夫に由縁の者で御座ります。

三郎 左様か、それなればよう用ふてやるがよい、あの俊方の功名心から酒家の在家へ火をかけてな。

若狭 エツ、ではこの御寺をやきましたは。幸若 重衡の卿ではない、皆あの次郎太夫俊方の仕業ぢやわい。

若狭 エツエツ。危ぶく倒れ懸るを藤平次押へて

藤平次 さうしてあなた方は。

三郎 その暇ひから世をのがれ、今では町家のなりわひぢや。

幸若 またわしは見る通りの世捨人、ア、恐ろしい、よう俊方を申ふてやらつしやれ、南無阿彌陀佛。

二人去る。

若狭 ア、この御堂を焼いたのは重衡様ぢやなかつた。

藤平次 あの衆の話では、御下知もなかつたに御主人様が。

若狭 コレ藤平次、何にも云ふてたもんな、妾の胸ははりさけるやうぢや、佛敵ぢや、法滅の悪魔ぢやと罵つたは重衡様ではなかつた、ア、重衡様ではなかつた、現在の我夫次郎太夫様ぢや、俊方様ぢや。

ア、申わけがない、ア、三世の諸佛にあわす顔がない。

大地へ倒れる。

藤平次 もし方様、お氣をたしかにお持ちなされませ、申さば之も御主人様の御勝軍の御方便で御座ります。

若狭 イヤ方便ぢやない、正しう御寺はやくたのぢや。

きつと見る、兒、阿彌丸、むさ

くるしき姿にあか桶をたづさへて出る、藤平次 申し其水一ツたまはりませぬか。阿彌丸 お易い事ぢや。のます。

藤平次 方様、この御堂を焼いたのは重衡様ぢやなかつた。

阿彌丸 どうぞなされたか。

阿彌丸 それはお困りて御座りませう、オツ姉上、すぎ行かれた姉上に供養と思ふて

若狭 エツ。氣がつき。

すぎ行かれた姉上とは。

阿彌丸 聞いて下さりませ、姉上は二月堂の尼御、私は東大寺の兒で御座りました。あの治承四年の戦ひに。

若狭 エツ。阿彌丸 姉の松月尼はこの御堂のうつぱりのほりましたが、焼け死にました。

若狭 エツ。阿彌丸 諸學僧や、尼御大衆、兒、從弟、焼け死ぬ者千七百。

若狭 エツ。

阿彌丸 山階寺に五百餘人、所々の坊舎に二百餘人、戰場にて討たるもの七百有餘、しかも大師先徳の秘佛も年來住持の本尊も皆この猛火に焼かれました。

若狭 エツ、エイ。

藤平次 いよ、驚き。そ、そ、それも皆、我夫。

藤平次 もし。

阿彌丸 どうぞ姉上の爲、焼死んだ方々のため、よう回向して下さいませ。

藤平次 さうしてあなた様は、阿彌丸 今は住むところもなく、二月堂の縁の下に居ります。

若狭 アノ縁の下に。阿彌丸 南無佛。

若狭 アツ悪魔ぢや、我夫は悪魔ぢや。藤平次 もし方様、方様、お氣をおしづめ遊ばしませ。

若狭 鬼、鬼。

藤平次 エツ。阿ツ獄卒が妾をとらへに來た。

しかけて藤平次の中から鬼に見
える(かはる)

ア、許して下され、重衡様を恨んだは悪か
つた。

よると焼のこりの柱からバツと
火をふく。

ア、焼いたく、妾の夫が焼いたのぢや。
又青鬼出る。

若狭 アレー。
狂ひまはる。

許して／＼。

いづの程にか藤平次が鬼とかは
りお経文も焼いた。

狂ふ。

祓佛も焼いた。
尼も、兒も、部も、學僧も、ア、焼いた
焼いた。

藤平次 もし方様。

若狭 ア、佛陀の冥助を願はうとした妾は、
大逆無道の佛敵であつたか。

藤平次 もし。
若狭 ア、許して下され。

大地に倒れる。
永覚出る。

永覚 誰ぢや。
長刀をかまへる。

藤平次 ハイ、お許し下さりませ。
若狭 スツクリ立つて。

若狭 イヤ許すことでない。
永覚 何。

若狭 この堂塔伽藍を焼いた福井の庄の下司
次郎太夫俊方の妻ぢや。

永覚 ナ、何といふ。

若狭 すみませぬ、すまぬ、妾の身を八ツざ
きにしても中將様を助けて下さりませ。

永覚 フム、物に狂ひし女か。

藤平次 イヤ左様では御座りませぬ、重衡の
卿の家の子福井の庄の下司、次郎太夫俊方
の妻若狭、これまで参つて、はじめて承
はつた治承四年師走の兵亂、この御堂を焼
きましたは中將殿の下知でなく、主君次郎
太夫俊方様をくだいて火をつけ、酒家在家
へ火を放ちましたので御座ります、それを
知つた方様かやうに、かやうに御もだへて
御座ります。

永覚 ヤツ、扱ては酒家在家に火を放つたは
俊方といふ者か。

藤平次 ハイ。
永覚 フム。

若狭 思入れ若狭ツカ／＼とよつて。
重衡様を助けて下さりませ。
ヒステリカルに叫ぶ。

永覚 フム……戌の刻が合圖のしらせ。
長刀をつくが
木のかしら

暗轉

第二場 木津川のほとり

中央に重衡圓坐の上に坐し、上
手に以前の劍の澤明俊、宜寸の
辨悪、詫宜十乗、白毫の律師千
坊、阿闍坂本の源興、阿字正字
海龍ひかへる。
下より伊豆藏人太夫頼兼、重
衡のうしろには石金丸ひかへ、
水音にて明るくする。
明俊 此世の名残ぢや、死糧をとらせい。
大喝する。

海龍 オツ。

用意の品を
呼んで下手に向ひ

これにて法師二人白木の膳に食を盛り、一人は瓶子かわらけをもつて出る。

明俊 お名残ぢやめされい。

重衡 下藪の申す死頼とや、今死する身に魚鳥あるべからず、幸ひの御堂冥途の血脈對飯とつて、傍なる辻堂の佛に供へる

十乘 血脈とあらば酒まゐれ。

重衡 イヤそれとても參るまい、只今頓切られんとする者の極熱に酒は悪しかる者、たゞまねびのみ。

三度のむふりをする。

ヤヨ御坊等、そもおこと等は頼朝の跡をよしと思ふか、又悪しと思ふか。

明俊 ひかれ者の小唄とやらんか、鎌倉殿の政事今更に批義して何にならうぞ。

重衡 イヤ平家は源氏をしひたげ、今又源氏は平家をしひたぐ、因果の經世恨むべからず、されど敵を敵に渡す事は昔よりしい

まだ聞かず、頼朝も彌勒の氏をばよもたじ、今日は人の身明日は必ず身の土を思ふべし、重衡はめぐりて佛法流布の境、奈良にめぐり来て、此處に切らるゝは大乗值遇の過去の縁淺からずと思へば罪深かるべしと覺えず、ハヤ斬れ法師。

坐をかまへる、木工馬之允友時やつれたるこしらへ揚幕を出てひざまづく

頼兼 誰ぢや。

石金丸 オツ、馬之允殿か。

友時 ホウ今生の御對面叶ひましたか。

重衡 オツ友時か、進め。

友時 ハツ。

立つて海龍、源興ツカ〜とよつて長刀のこじりにてひかへ

海龍 油斷させて重衡を奪はうとや。

源興 おぞくもはからふたり。

二人 ならぬぞ。

明俊 まで。

とめ 死頼も今生の酒も皆、これ法師が情の振舞見ればやつれ果てた侍一人、何の事があ

らう、近う呼んで主従ならば一世の別れ許してとらせい。

海龍 フム、果報な奴。

二人 すゝめ。

兩人舞臺へ来る

頼兼 ソレ友時。

友時 ハツ。

重衡 友時。

友時 ハツ。

重衡 日野よりの使ひか。

友時 ハツ、お見上げ申せば色黒み昔の御面影さへ。

重衡 未練ぢや、北の方からも聞いたぞ。

友時 たゞ御いたはしとのみ見上げ參ります。

重衡 友時、もう申す事もない、たゞ重衡世に在りし程は出仕にまぎれ世務にほだされ

後世を願ふ心微塵ばかりもなし、呪や世亂れ軍起つて後は、彼を禦ぎ我を助けんとよ

り他事なし、就中南都炎上の事、王命なり

武命なり、君に仕へ世に隨ふ習力及ばず、

罷り向ひしなり、火出て來り風烈しく伽藍

罷り向ひしなり、火出て來り風烈しく伽藍

滅亡に及び、それをしも重衡のしわざと云ふか、是非もなし我一人生捕られて京鎌倉に耻をさらし、こゝまで骸をさらさん事、如何にしても佛罰とより思はれず、いかなる佛を憑み奉りてか一切この罪をのがれ得べき哉、日野よりの使者其心得あつてか友時ハツ、大納言典侍の御方、まつた北の方より釋尊慈恩の附屬をうけさせらるゝやう、彌陀經一卷懺法一卷正しくおとゞけ申しまする。

重衡 過分ぢや、友時あの御佛を。

友時 ハツ。

阿彌陀堂より佛體を出しかたへにすえる。

重衡 如來大悲の誓願を深くのみ奉る。五色の糸にて佛の手より自分の袖へくゝりつける。

重衡 致深懺悔佛法不思議の力に、忽ち罪を滅して淨ひに導き給へかし。

友時 中將の殿。

友時 鐘の音。

明後 ハヤ成の刻ぢや。

一時鳥啼く。
重衡 思ふ事、かたりあわせん郭公、げに帰しくも西へ行くかな。
静かに見送る。

暗轉

舞臺は木津川のこちらの岸邊の體。
松を楯に對岸に見入る佐の局のび上つて十力法師と共に祈つてゐる。

佐の局 極重悪人無他方便唯阿彌陀得生極樂
十力 お局まだあかりが消えませぬ。

佐の局 我つまのお命も露の間ぞ。

十力 もし。
双方思入れ、永覺法師かけて来る。

永覺 ヤツ、北のお方か。
佐の局 オツ先刻の法師殿。

永覺 御方、永覺は重衡の卿御命を助けまひらするぞ。

佐の局 エツ、コリヤ中將の卿を。
永覺 かういふうちも心せく。フム渡舟をとめしは我指圖かくと知らばとめ置かんに。

のび上つて

水のひびきにさからうとも、戰場にきてたえし音聲。
松を小楯にヤア、劍の澤の俊あるか、重衡の卿に罪はないぞ。

本つり數へてヤツ成の刻か。
對岸の火消える

フム合圖の時刻、火は一時に消えたるか。
佐の局 アツ我夫には。

十力 御最期ありしか。
佐の局 もし。

永覺 フム。
大地にドツと坐す、物に狂ひし若狭足り出て來り

若狭 重衡様を助け。
佐の局 その中將の卿には最早御最期遊ばされしぞ。

若狭 エツ、中將の殿が。
のび上る、永覺はジツと若狭を見る、若狭行かふとするを永覺長刀にてとめる、佐の局もよるこの仕組よろしくかねの音。

幕

〔角座十一月上演脚本〕

女

給

三幕六場

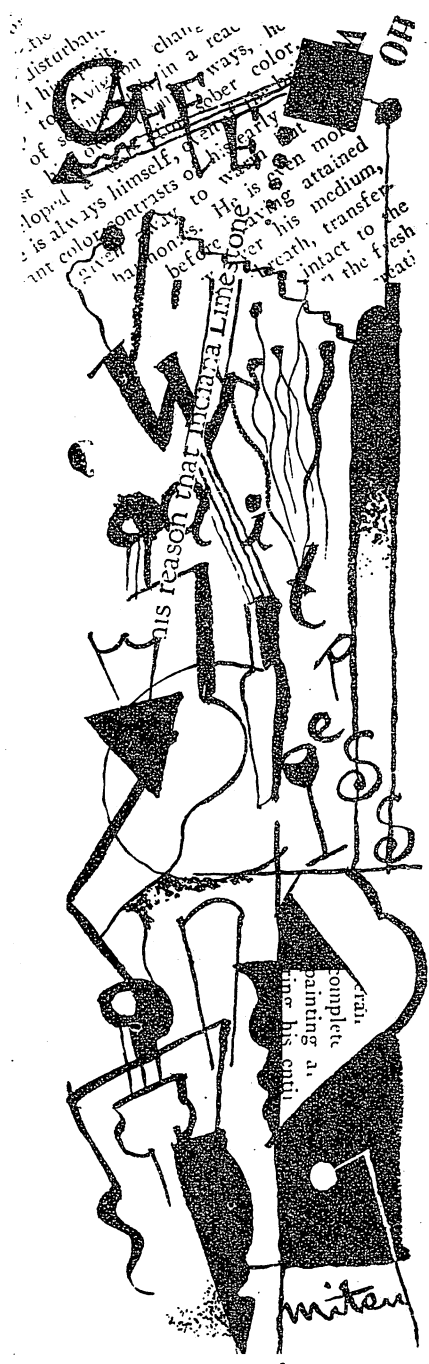
原作 廣津和郎
脚色 鳥江鍬也

登場人物
一、學生風の客 三

人

一、會社員 増井
一、同 田子

一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、
女	小	同	女	男	同	同	同	同	女
説	家	給	給	給	給	給	給	給	社
君	吉	小	田	ボ	久	梅	友	す	サ
	水	夜	鶴	!			み	カ	純
代	燕	子	子	イ	代	子	子	子	エ



一、相良の友 勝 ば 見
 一、支那 二 ば
 一、労働者風の男 二 ば
 一、小夜子の母 お 米 人
 一、同 弟 清 子
 一、同 妹 幸 子
 一、同 父 夫
 一、車 夫
 一、在の女房 お 作 人
 一、炭坑夫 十 人
 一、同 小 頭
 一、同 客 大 勢
 一、驛 八 夫
 一、大學生 清 美 人
 一、女 給 生 八 夫
 一、同 百 政 合
 一、同 同 枝 子
 一、雑誌記者 A 合
 一、掛川 川 勇
 一、女 給 京 子
 一、アパ ー ト の 老 婆
 第一幕 その一
 銀座表通りTカフェエの階上
 正面は酒場と別室の出入、下手

にボツクス、奥は客の出入、上手
 手斜に二つの窓、外は銀座の夜
 景、窓の下にソファとチイテ
 ール、中央にテーブル椅子など
 植木鉢がその間に宜しく配置さ
 れてゐる。照明など可なりに落
 ついた感じのカフェエである。

○ 晩秋の夜。

開幕前に新作歌「女給の唄」を
 序曲的にきかず、音楽のみ低く
 残して幕揚がる。

上手テーブルに學生風の客三人
 が日本酒を飲んでゐる、上手テ
 ーブルには會社員風の老人田子
 その同僚らしい増井(三十代)
 がカクテルを飲んでゐる。

ボツクスに會社員相良純三(三
 十代)が打洗んでゐる。
 女給サカエ、すみ子、久代は學
 生、友子、梅子は田子、田鶴子
 は酒場についてゐる、男ボーイ

下手奥に立つ。
 音楽は次の會話のうちに消へ
 る。

増井 (グラスを持つて立上り)では、田子
 さんの健康を祝して
 田子 おつと空つぽだ、もう一杯、キツイ奴
 を一杯。

増井 そんなに飲んでもいゝんですか。

田子 今夜はいくら飲んでもいゝんだ、おい
 キツイ奴を二つ(注文する)

友子 ジンカク、てなきやアアサン、プラン?
 田子 そんな事を云つたつて判らねえや、何
 しる生れて初めてカフェエて所へやつて來
 たんだからね。

増井 やつぱりジンカクにしときませう。

友子 ジンカク、はい(立つて酒場の方へ行
 く)

田鶴子カクテルをこしらへる。
 増井 (坐り)随分いけるんですね。

田子 (可なり酩酊してゐる)今夜は特別だ
 よ、動けなくなる迄酔つた所で、明日から
 シンジル會社も俺にはねえんだ、いつか一
 度はこんな氣持で飲んで見てえと思つてゐ

たんだから、今夜はブツ倒れる迄飲ましてくれよ、だがカフェエつていゝ所だね、こんな極樂世界が手近にあらうとは思はなかつたよ。

増井 田子さんもあの帝モスには随分長いことお勤めなさうですね、二十五年にもなるさうぢやありませんか。

田子 長えやうて短けえ二十五年だつたなあ（考へ込む）毎日朝の八時に出勤して夕方五時に會社を退けて歸る、同じ事を繰返してゐるうちに夢の様に年はながれた、そして俺の頭もツル／＼に禿げちまつた、若え學校出がドン／＼入つて来て課長になり部長になり、支店長や重役の椅子に就く奴もあつたが、俺だけは同じ椅子にかぢりついて、毎日そるばんと帳簿の首ツ引、それが世間の景氣が悪くなつて會社が少し左前になると、やれ冗員淘汰だの、老朽整理だのつて、先づこの忠實な俺見てえな奴からクビだ。

増井 でも田子さんは今度の整理で解雇手當をフンダンにもらつたといふぢやありませんか。

田子 なあに、タツタ五千圓ぼつちだよ。増井 五千圓ですか。

梅子 まあ、このおぢさん、會社を首になつて五千圓ももらつたの、いゝわねエ。

田子 何が、いゝ事あるもんか、五千圓と二十五年ぢや釣合がとれねエヤ。

友子 その間にカクテルを持つて來る。

増井 だけど、田子さんには子達が澤山あるから安樂なものだ、まあその五千圓で二十年の骨を洗ふ所か、もうおつつけ骨を焼く支度にかゝらなきやならねエ、ハハハ、

（淋しい笑ひ）

増井 （もう一度立上り）ぢや、プロジェクト（グラスを干す）

田子 （グラスをさしあげ）サンキユウ（のむ）

學生風（ひとり）新聞をひろげてよんでゐる。

學生 1 ラグビー選手掛川勇氏の結婚披露宴（よんで）おや、あの掛川が結婚したのか。

同 2 何とか會社の重役の令嬢とこの間大神宮で式をあげたんだよ。

同 1 さうかそれで昨夜帝國ホテルで東京の知名の士を招待して盛大な披露宴をやつたんだな、寫真入りで出てゐるよ。

同 2 どれ、どこに——（新聞をとつて見る）馬鹿にしてやがらあ、奴さん、花嫁御と並んでさうすまじ込んでるぜ。

同 3 （のぞき見て）女は随分ジャンだねサカエ、まあ掛川さんつて随分ひどい人ね。

同 1 どうして。

すみ子 どうしてつて、そんな新聞、君代さんに見せたら卒倒しちやふわ。

同 1 へえ、君代と掛川と何かあつたのかい。

サカエ 大ありだわ（淨るりの文句で）子迄なしたる三勝どの。

同 3 へーン、子供迄あるのかい。

同 1 そして掛川の奴に捨てられたんだらう、愉快だなア。

同 3 おい君ちゃん。

サカエ ゐないわよ、さつきから部屋で休んでるわ。

同 2 しかし掛川の奴も少しひどすぎるね
同 1 本當だ、いくらラグビーのチャンでも、やり方が少しあくどいよ。

サカエ それも好きで一所になつたんぢやないの、掛川さんが毎晩の様に通つた揚句、新橋かどこかの待合へ呼出して、無理に關係をつけやうとしたんですつて、そこで君代さんは自分と結婚してくれるのならと云つたら、きつと結婚すると約束をしたんださうです、その後もさうした所で一度違つたといふから、たつた二度の關係よ。

同 3 そしてお腹がふくれましたか。サカエ と同時にさよならさ。すみ子 卑怯だわね、姿を晦ますなんて、

同 1 その子はどうしたんだ。サカエ 里アチをやつて他所にあづけてあるの、

同 2 カクテルぢやないか。すみ子 馬鹿ね、この人は。サカエ ホ、。この時、バアにある卓上電話の

ボーイ (受話器をとる) ハイ、さうです

(聞く) ハイ、ちよつと待つて下さい、小夜子さん、お電話——小夜子さん——(とアクセントをつけて呼ぶ)

サカエ 小夜子さんなら君代さんと奥にゐるわ(立つて下手正面の出入に呼ぶ)小夜ちゃん、小夜ちゃん。
女給小夜子(二十代)出る。

小夜子 電話?
ボーイ 吉水先生からです。サカエ まあ、吉水さんから——小夜ちゃんおごつて頂戴よ。

小夜子 いやなサカエさん(電話に出る)ハイ、私、私よ、判つて——え、ゐらつしやいな、さうね(ボーイに)私の番まだなの——

ボーイ ネキスト。
小夜子 (電話に) 次のよ、すぐ来て頂戴どこにゐらつしやるの、何ですつて——麻雀してらつしやるの、そんなものどうでもい、ぢやないの、すぐよ、すぐね——(切る)

サカエ よう。小夜子 (サカエに) いやよ、サカエさん——

サカエ だつて、吉水先生は近頃小夜ちゃんでなくつちや夜も日もないんだからね。同 1 吉水先生つてあの小説家の。

サカエ え、さうよ。同 2 へえ、吉水がこゝへ来るのか。サカエ え、小夜ちゃんをトテもひゐきてゐらつしやるわ。

同 3 文壇の大御所を手玉にとるなんて小夜ちゃんも豪の者だね。小夜子 あらそんな事……。

サカエ この間も吉水さんの自動車で大森の海岸へドライブしたのよ。小夜子 まあ、サカエさん、覚えていらつしやい。

同 1 よう、吉水夫人。同 2 おごれ。

この時、ボツクスの相良がやをら立ち上り、くるりと向き直る相良 小夜子さん！

小夜子 (見て) アラツ、相良さん(その方へ行く)いつの間に来てゐらつたの、ちつとも知らなかつたわ。相良 さつきから来てゐました、まあかけ給

へ。
小夜子 え、。

この邊りより蓄音器ヴァキオリ
ソロが聞こえる。

相良 今夜はあなたに話があつて来たんです
小夜子 馬鹿にまじめですわね、おや、今日
は飲んでらつしやるのね。

相良 え、少しばかり——

小夜子 これ洋酒ぢやなくつて（卓の上の洋
酒を見る）

相良 さうです。

小夜子 あなた、あんまりおやりにならない
方ぢやありませんか、それなのに……

相良 でも酔はなきやおられないんです、酔
つてもゐなきや自分の心持を訴へる事が
出来ないんです。

小夜子 馬鹿にセンチね、で、話つて、どん
な事——

相良 （聲を落して）小夜子さん今夜こゝを
しまつたらあの土橋のガードの所まで来て
くれませんか、あなた、いつもあそこを運
つて歸るんでせう。

小夜子 え、ですけれど。

相良 たつた五分間ていゝんです、五分間。
この時下手の田子老人が立上る
この邊りから蓄音器賑やかなも
のに變る。

田子 増井君、さ、これから泳ぎ出すんだ。

増井 もう歸りませうよ。

田子 何、歸る、だれが歸るもんか、これか
らだ、おい、如さん勘定たのむよ。

友子 ハイ（向ふへ行く）

増井 どこへ行くんです。

田子 若いくせに察しの悪い奴だな、吉原へ
くり込むんだ、吉原へ——

増井 止ませう、もう、こゝで切上げて歸
りませう、お宅までおくりますから。

田子 いやだ、今夜は徹底的に遊んでやるん
だ、おい、いくらだ。

友子 （その時来てゐる）ハイ、七圓五十錢

田子 （十圓札を出して）それ、みんなとつ
とけーおい、増井君、今夜の所は此の失業
成金にまかしとき給へよ。

増井 そりやいけませんよ。

田子 いゝよ、いゝつて事よ（出て行く）
増井も捨台詞づいて行く、友

子、梅子、久代見送る。
ボーイ 毎度ありがたう。
君代 正面から出る、相良の方へ
来て頭を下げる。

學生1 （君代をみとめ）よう。

同 2 失戀女給！

サカエ （2を制して）ちよいと。

君代 何ですつて、失戀女給はよかつたわね

同 3 （ヤニ的に）子迄成したる掛川さん
——だらう。

君代 そんな憎まれ口を叩かないでお酒でも
頂戴——

同 1 よし、やらう。

君代 もらほう（1の横に坐る）

同 1 （盃をやり酌する）
入口から相良の友人法學士勝見
宣治（三十代）出る。

ボーイ いらつしやい。

勝見 いや、僕は客ぢやない、人を探しに来
たんだ（四邊を見廻す）

小夜子 （勝見を見て）いらつしやい。

勝見 やつぱりゐたな。

それでいゝんだよ、今更君と云合ひをして
も始まらんからなア——それよか酒にしや
う、おい酒だ。

勝見 いかんと云ふのに、とにかく歸らう、
おれやどうしても連れて歸る。

相良 歸らないよ。

勝見 何ッ。

相良 おい酒を持って来いと云ふのに。

勝見 ちや一度歸つて又出直したらどうだい
あなたがちカフエーへ来るのが悪いと云ふん
ぢやない、妻君や子供をどうするかと云ふ
んだ、今日も妻君が僕のところへ来て君の
眞實を聞いてくれと云ふんだ、だから妻君
ともう一度逢つて、よく諒解し合つた上で
出直して来たらいいぢやないか、さ歸らう
歸つてくれ(小夜子に)勘定。

小夜子 はい。

と小夜子サカエに告げる。

サカエバーの方へ行く。

小夜子 相良さん、勝見さんもあつしや
るんだから今日は一ト先づ歸つて下さいな
でないと私が辛いんですから。

相良 ……しかし。

小夜子 歸つて下さい、私を可哀想だと思つ
たら歸つて下さい。

相良 よし歸らう、その前に一度君に話した
い事があるから、今夜土橋へ来てくれ給へ
よろしいか、きつとですよ。

サカエ 勘定書を持って来る、勝見
見支拂ふ。

勝見 や、お邪魔でした。

君代 お歸りですか。

サカエ (相良の帽子を渡して) 又どうぞい
らしつてね。

相良 灘々起ち上る、そして小夜
子に何か云ひたさうにする。

勝見 おい、歸らう(と手を執る)

相良 ちや待つてるよ、きつとね。

ボーイ 有難うございます。

と勝見、相良入る。

君代とサカエ見送つて行く。

小夜子じつと考へに沈む。

君代が引返して来る。

君代 どうしたの。

小夜子 君ちゃん、ウエートレスなんてほん
とらにつままないわね。

君代 どうして。

小夜子 てもいくら私達は眞面目でも、世間
がさう見てくれないんだもの。

君代 全くだわ、今のお友達の方だつて何と
思つてるか知れやしないわ。

小夜子 ほんとに相良さんにも困るわね。

君代 でもあの方、全く命がけて小夜ちゃん
を愛してゐるんだわ。

小夜子 そりや私もよく知つてるわ、でも私
君代 愛しちやゐないの、

小夜子 きらひぢやないけど、今の私は戀だ
とか愛だとか云つてる場合ぢやないわ、あ
の方そんな事はちつとも考へないで、私の
顔さへ見れば結婚してくれと云ふの、困つ
ちやふわ。

君代 で、あなたは何て返事をしたの、

小夜子 云ひやうがないから考へときませう
とさう云つたわ、だつてあの方には奥様や
子供まであるんですものどうする事も出来
ないぢやないの。

君代 まあ子供迄あるの、相良さんに限つて
そんな人ぢやないと思つてゐたけど、男つ
てみんなであらめね。

小夜子 さうかしら、でも私あの人信じても
いゝ人だと思ふわ、そりや初心なところが
あるんですもの。

君代 さう云へば、さつきのお友達の方奥様
と別れたとか何とか云つてゐたぢやないの
小夜子 あの方なら、そんな事をなさらない
とも限らないわ。

君代 もし相良さんが奥様と別れたら、あんな
結婚する氣なの。

小夜子 私、そんな事考へた事ないわ。

サカエ 小夜ちゃん、相良さんが、今夜待つ
てるつて。

小夜子 ……

カサエ あゝ私一度でいゝから小夜ちゃんの
やうな目に逢つて見たいわ、息のつまる程
惚れられて見たいわ。

君代 ダメよ、男なんて一度許したらケロリ
として了ふから。

サカエ まさか、掛川さんぢやあるまいし。
君代 あいつは例外よ。

サカエ 聞いた？

君代 何を？

サカエ 出てるわ(と新聞を指さす)

君代新聞を取上げて讀む、そし
てビリ／＼と裂く。

君代 小夜ちゃん、男つてみんなこんなもの
よ、あの掛川が昨夜ホテルで結婚披露をし
たんだつて。

小夜子 あんた、口惜しいでせうね。

君代 いゝえ、さうでもないけど。

小夜子 さうだわ、私あんたの氣持が一番よ
く判るわ、私だつて、これで男には一度失
敗してるんですもの。

君代 まあ、あんた子持なの。

小夜子 さうよ、でもこんな事、お客様にし
やべつちやいやよ、サカエさんもね。

サカエ 云はないわ。

小夜子 私今日はみんな云つて了ふわ聞いて
くれる？

君代とサカエ領きつゝ三人一つ
の卓を圍む。

小夜子 私その子のためにこんな處で働く氣
になつたの、こんな醜ましいジャズの中に
ゐて、私だけはいつも一人ぼっち、お前の
中でじいつとその子を抱いてサーピスして

んの、そりや淋しいわ。

君代 可愛い／＼でせうね。

小夜子 え、可愛い／＼わ、思ひ出すだけでも
ジイツとから身體中が熱くなるわ。

サカエ 坊やはこつちにゐないの。

小夜子 え、北海道のおばあちゃんのとこに
ゐるわ、その子の父親と云ふのが、やつぱり
掛川さんのやうに、子供の出来た事を知
ると姿を晦まして了つたの、私どうしやう
かと思つたわ、死なうかと思つたわ、それ
に田舎は人目が煩さいから、せめて子供を
産み落す迄と思つて妊娠の身を抱へて一人
で東京へやつて來たの、それからずつと今
日迄血みどろで戦ひ通して來たわ、身重な
身體で封筒はりや麻つなぎ、罫紙折りの内
職迄やつたわ、二千枚折つて了つた二十五
錢、今思つてもゾツとするやうな冬のさ中
に、火の氣一つない關口水道町のぼる二階
で夜の目も寝ずに働き通しました、——子
供のために、泣けて仕様のない時、私
は口に迄出して、自分で自分を叱りつけた
ものです。

君代 やつぱり、そこで赤ちゃんを産んだの

小夜子 さうよ、私お産の時の苦しみは今でも忘れないわ、あんまり苦しがるんのお産婆さんと下のおばさんが相談して、お醫者と呼ばふかと云つてくれたんだけど、お醫者を呼ぶと百圓位かゝるでせう、だから私斷りました、死んで了へ〜と自分の身體を呪ひ乍ら、齒をくひしばつて斷りましたそして苦しい陣痛を我慢してゐる時、そんな時ふつと頭に浮んで来るのは、父でもない、母でもない、憎い〜と思ふその男です、私を捨てゝ行つた男の事です……(と涙)

君代 とサカエホロリとする。
小夜子 君代でも死ぬ様な苦痛をこらへてやつと産み落しました、その時一番先に來たのは「あつ百圓助かつた……」と云ふ考へてした、赤ん坊の最初の産聲を聞き乍ら「あゝ百圓助かつた」と思ふ心持が、お産のすんだられしさより、強かつたなんて——
君代 身につまされて泣いてゐる小夜子 君ちゃん、泣いてくれるの。
君代 私判るわ、その時の小夜ちゃんの氣持が判るわ。

サカエ みんなさうよ、私達はみんなさうよ
君代 でも世間の人達は。

小夜子 もうそれを云ひますまいよ、せめて私達だけでも戦ひませうよ。

君代 え、戦ひませう、女給のために、

小夜子 君ちゃん、サカエちゃん。

と三人卓の上でかたみに手を握る。

小夜子 戦ひませう、強く、もつと強く。

君代 え〜。

サカエ 吉水蒸がいさゝか酔つて入つて來る。

ボーイ いらつしやい、小夜子さん。

三人 いらつしやい。

吉水 よう、いやにしんみりしてゐね。

小夜子 先程はお電話をありがたう。

吉水 や(掛る)ビールでも貰はふか。

小夜子 ハイ(とバアへ行く)

吉水 (君代の顔を見て)泣いてゐるね。

君代 そんな事ありませんわ。

吉水 嘘をつけ、しかし女の涙つて奴は可愛

い化物さ。

サカエ 今小夜子さんの身の上話を聞きまし

たの、先生小説に書いてあげるといゝわ。

吉水 書いてもいゝなア——しかし、しかし僕にはまだ、彼女の眞實がつかめない。

サカエ あら、とつとに擱んでる癖に、

小夜子 ビールを持來り酌をする

吉水 おい、さうかね、君にも眞實つてものがあるかね。

小夜子 どうですか。

君代 先生にだけはあるでせう。

吉水 さうか、よし、ちや今夜何處かへ行かう——え?

小夜子 先生、私先生にだけはごまかしの氣持でお交際が願へないと思ひます、ですから本當のことを云ひます、私そんなのんきな身分ではありません、もつと〜苦しんで戦ひ抜きます。

吉水 それもいゝ、ちや僕に對してもサーピス以上の何でもないと思ふんだね、それもいゝ、とにかく飲もう、飲め、(とコップをつきつける)

小夜子 いゝえ、頂けません。

吉水 いゝや飲め、サーピスだ。

小夜子 後向きになつたまゝいや

吉水 注いでやれ。

君代注いでやる。

瓶とコップの觸れ合ふ音がすかにおのゝく二人の手、小夜子顔をもむけて泣く。
吉水皮肉にテーブルに片広ついで煙草をのむ。

—— 暗 轉 ——

第一幕 その二 土橋附近のガード下

正面は高架線、下手寄りにガードがある、電柱一本立つ、電燈が闇の街路を佐しく照してゐる。
前場の夜更け。

支那そば屋の屋臺車が上手寄りに止まつてゐる。

近くを市電が通つてゐるらしい警笛が聞える、犬の遠吠え。
相長が下手のガードの下から人

待顔に電柱の下に出る。

そば屋は時々相長を見る。

相長はそばやに顔をそむける。

省線電車がガードの上を通る。

相長は腕時計を見て下手へ歩き出す、そしてガードの下へ入つて行く。

そば屋 (相長を見送つて) 女でも待合して

るんだらう、氣樂な奴もあればあるもんだ

労働者A B がそば屋の前に立つ

労働者B おいワントンをくれ。

同 A デンキブラン。

そば屋 へい有難う御座います。

労働者そばを食べる、下手から

小夜子と君代出る。

君代 相長さんまだ来ないわね。

小夜子 今にいらつしやるわ。

君代 さうかしら、でもさつきあんなふうにして連れて行かれたんだから、あてになら

ないわ。

小夜子 でもアレ程仰つたんだから、きつ

といらつしやるわ、いく時?

君代 (腕時計を見て) 十二時よ。

小夜子 おゝ寒む、君ちやん遅くまですまな
いわね。

君代 何を云つてんのよ。

労働者食べ終つて歸りかけ、二人の姿を見てニタ／＼する、

労働者A へ、へ、今晩は。

君代 ……

同 A そこまで送つてあげませうか。

君代 ……

同 A いくらチップにならないからつてさ
うツン／＼しなくてもいいぢやないか、話

しさへ判りやいからでも出すよ。

同 B よせよ、どこかの野郎を待つてるん
だよ。

同 A 構うまんか、ねえ君、手ツ取り早い
處で一つ。

君代 失敬な事を仰有るな。

同 A あゝ左様ですか。

君代 馬鹿。

同 A ハハ、ハハ、馬鹿は嬉しかつたね、
どうもお邪魔様。

労働者二人這入る。

そば屋 ハハ、ハハ、仕様のない奴だな姐さ

ん方寒かつたらこゝにポツチリ火の氣があらりますよ。

君代 えゝ有がたう。

そばや あなた方誰かを待合してるんぢやないかね。

君代 えゝ。

そばや だいが前からそこらに一人うろ／＼してましたがね、あたしや一ト廻りしてゐるから目附けたらそう云つてあげやう。

小夜子 どうぞ、すみません。

そばや イヤ私達でも覺へがあるよ、待たるゝより待つ身になるなつて……ハクシヨイ風をひいたな。

屋簷を曳いて這入る、相良がドの下に出る。

君代 (相良をチラと認め) 小夜子さん、私失禮してもいゝでせう。

小夜子 待つてよ、せめて相良さんがゐらつしやる迄附合つて頂戴な。

君代 あらゝゐらつしつたわよ。

小夜子 あら(見る)

君代 ぢやお先に、ごめん下さい(上手に入る)

小夜子 (君代を見送り、氣まり悪げに立つてゐる)

相良 (四邊を見廻して小夜子による)

小夜子 お待ちになつて――

相良 十五分ばかり。

小夜子 すみません、さつき、あれからどうなすつて、

相良 あゝ勝見の奴か、あいつにつかまると煩さくつてね。

小夜子 でもあの方のおつしやる事に嘘はないと思ひますわ。

相良 さうかも知れない、だから僕勝見に對しても今夜といふ今夜こそしつかりと君の本當のものをつかみたいのだ――君の心をききたいのだ。

小夜子 とおつしやいますと。

相良 いつか君、僕が獨身だつたら、結婚してくれと云つたね。

小夜子 えゝ、申しました、奥さんがなければ考へて見るとは云ひましたわ。

相良 たしかにさうだね。

小夜子 ですけど考へると云ふ事は文字通りに解釋して頂かないと困りますわ、あなた

はすぐ早吞込しちやつて、その翌日でしたか、タンスだの火鉢だの私の下宿へ持込んだりして面喰らふぢやありませんか。

相良 あの時君がタンスが欲しいと云つてゐたから持たせてやつたんだ、それにこれから寒くなるのに火鉢もゐるだらうと思つてアレセントした迄だ、何もそれ以外に意味はないよ、しかし僕が獨身だつたら、君は結婚してくれるね。

小夜子 そりや奥さんやお子さんがゐらつしやらなければ――でもあたしの様な者のためにそんな事をなすつちや。

相良 いけないと云ふのかい、しかし僕は君の言葉を信じて女房子供も離縁してしまつたよ。

小夜子 まあそんな無茶な。

相良 僕は君といふひとつのの見詰めてゐるんだ、それ以外のものはふり向きもしないんだ、小夜子さん。結婚してくれ給へ、たつた今この手を握つてくれ給へ。

小夜子 (だまつてうなだれる)

相良 何故返事をしないんです、小夜子さん

はすぐ早吞込しちやつて、その翌日でしたか、タンスだの火鉢だの私の下宿へ持込んだりして面喰らふぢやありませんか。

相良 あの時君がタンスが欲しいと云つてゐたから持たせてやつたんだ、それにこれから寒くなるのに火鉢もゐるだらうと思つてアレセントした迄だ、何もそれ以外に意味はないよ、しかし僕が獨身だつたら、君は結婚してくれるね。

小夜子 そりや奥さんやお子さんがゐらつしやらなければ――でもあたしの様な者のためにそんな事をなすつちや。

相良 いけないと云ふのかい、しかし僕は君の言葉を信じて女房子供も離縁してしまつたよ。

小夜子 まあそんな無茶な。

相良 僕は君といふひとつのの見詰めてゐるんだ、それ以外のものはふり向きもしないんだ、小夜子さん。結婚してくれ給へ、たつた今この手を握つてくれ給へ。

小夜子 (だまつてうなだれる)

相良 何故返事をしないんです、小夜子さん

はすぐ早吞込しちやつて、その翌日でしたか、タンスだの火鉢だの私の下宿へ持込んだりして面喰らふぢやありませんか。

相良 あの時君がタンスが欲しいと云つてゐたから持たせてやつたんだ、それにこれから寒くなるのに火鉢もゐるだらうと思つてアレセントした迄だ、何もそれ以外に意味はないよ、しかし僕が獨身だつたら、君は結婚してくれるね。

小夜子 そりや奥さんやお子さんがゐらつしやらなければ――でもあたしの様な者のためにそんな事をなすつちや。

相良 いけないと云ふのかい、しかし僕は君の言葉を信じて女房子供も離縁してしまつたよ。

小夜子 まあそんな無茶な。

相良 僕は君といふひとつのの見詰めてゐるんだ、それ以外のものはふり向きもしないんだ、小夜子さん。結婚してくれ給へ、たつた今この手を握つてくれ給へ。

小夜子 だつて——あんまり唐突ぢやありませんか、それに何の罪もない奥さんを離縁なさるなんて……

相良 そんな事を君から聞かうとしてゐるんぢやないよ、それとも君は今となつて不承知だと云ふのか。

小夜子 でもどうお答へしていか判りませんもの、私だつてそこまで突つて考へて見た事がまだないんですもの。

相良 何？

小夜子 だつてさうぢやありませんか、奥さんやお子さんがおありの事を知つてゐながら、あなたと結婚するなど、云ふ事を考へる筈がないぢやありませんか。

相良 でも、君は僕が獨身だつたら結婚すると云つたぢやないか。

小夜子 ハツキリさう云つた譯ぢやありませんわ、もしあなたが獨身だつたら、考へて見る、とから申したわけですわ。

相良 君は今になつて云ひ通れを云ふのか。

小夜子 そんな事はありません。

相良 ぢやいつ迄もおれを苦しめないでキツ

バリした事を云つてくれ給へ、おれは命を投げ出してゐるんだ、君一人を得たいために一切の物を捨てて、かゝつてゐるんだ、イエスかノーかおれの生死は君の一言にあるんだ、おい何故返事をしてくれないんだ。

小夜子 まア相良さん、そんなに昂奮なすつちや。

相良 いやなら嫌でもいいよ、此の上おれは苦しみたくないのだ、俺のこの熱い顔へ嫌だと言投げつけてくれ、おい小夜子。

小夜子 (返答に窮して) ぢやこうして下さいな、私の一存にも参りませんから北海道の両親に一度相談した上で、

相良 両親さへ諸と云へば君に異存はないんだな。

小夜子 え、ありませんわ。

相良 よし、それぢやすぐに北海道へ行から僕も一緒に行くそして二人がよりで頼むんだ。

小夜子 いゝえ、私一人でも大丈夫ですよ、

他にもいろいろ用事もありますから。

相良 ぢやそうしてくれきつとだね。

小夜子 ——

相良 きつとだね。
小夜子 え(と低く)

幕あきのそばやが下手から出て来て、うさんそうに二人を見て荷を下す。

小夜子 それをキツカケに行きかける、相良つづく、小夜子顔でそばやに會釋する。

そばや あゝさつきの姐さん。

にこりとする。

小夜子、相良這入る。

そばや苦笑を湛へて見送る。

幕

第二幕 その一

北海道岩見澤の小夜子の實家

○ 下手に格子戸の出入口がある、玄關の間と、茶の間風の座敷が上手につづく、ずつと上手にも障子を隔て、臺所の小間あり、あまり裕福でない小商人の家。

○ 前幕より数日後、夕暮近い頃。

茶の間に小夜子の母親お末(四十代)が赤ン坊の着物を縫つてゐる、その傍に小夜子の弟清(十五六)が中學校の制服のまゝ雑誌を讀んでゐる。

東西囃しが通る。

清 お母さん、姉さんは何しに歸つて來るの
母 子供顔でも見なくなつたんでせうよ。
清 子供の顔を見に、わざと東京から北海道まで來るんですか、せいたくだなア。

母 ね、清や、今度姉さんが歸つて來てもこの前のやうにいやなことを云ふんぢやないよ。

清 あゝ云はないよ、だつてこの前はひどいんだもの、みんなに無斷で東京へ行つて私生兒なんか抱えて歸つて來るんだもの。
母 でもあの時の事を思ふと姉さんも可哀想だよ、私達に知れるといけないと思つて娘さん三ヶ月の身重で東京へ出掛けるなんて、よくてなれば出來ないよ。

清 今度も又赤ン坊を産みに歸つて來るんぢやないのかい。
母 ホ、まさか——此度はきつと立派にな

つて歸つて來るよ。
この時近くを汽車の通る音 汽

清 あつ、汽車が着いた(立つて支關の方から外を見る)あれに姉さんが乗つてやしな

母 もう何時だ。
清 四時二十分。
母 あゝそんならあの汽車で着いたかもしれ

清 お父さんは遅いね。
母 おひるをたべてから子供を迎へに行つたんだからもう歸つて來る時分だよ。

清 お母さん、姉さんは一體東京で何をして働いてゐるの。
母 姉さんかい——

清 あゝ。
母 姉さんはね(云ひ流る)會社にでもつとめてゐるんでせう。

清 會社——さうか知ら。
母 姉さん清にきつと何か土産を持て來るよ
清 それだとうれしいんだがなア。

この時、入口に車のつく音、小夜子、妹、幸子(十二三)が入つて來る、車夫が荷物を支關におろす。

小夜子 御苦勞でした(金を拂ふ)
車夫 どうもありがたう(去る)

母 (うれしそうに)小夜子かい、まあ、よく歸つて來ておくれただつた、突然電報が來たので、家中ビックリしたんですよ、お父さんも大喜びでね、今在の方に預けあるお前の赤ちゃんを迎へに行つてゐなさるんだよ。

この間に幸子は小夜子の荷物を隅に片づける。

小夜子 さうですか(お辭儀をする)ごぶさたしました、清さんも元氣でいゝね。

清 姉さん、お歸り——
小夜子 お母さん、やつぱり故郷つていゝものですね、今日も津輕海峽を渡つて汽車の窓から北海道の山々を見てゐると何だかうれしくなつちやつて、一人でポロポロ泣けて來るんですよ、でもこの前と違つて此度は晴々とした氣持で歸つて來る事が出來ま

したわ。

母 本當にこの前はおどろいたよ、もう歸つて来まいと思つてゐたお前があんなみすぼらしい風をして、子供まで抱いて歸つて来るんだもの、でも今度はお前大層立派になつて、いゝ衣裳をこしらへたんだねエ、これこの頃の東京の流行かい。

小夜子 え。

幸子 姉さんが汽車からおりて来た時、私もその人かと思つたわ。

母 本當に見違へる様だねえ。

小夜子はこの間に荷物を解き、中から土産物を出す。

小夜子 急だつたもんですから大したものは何も買つて来ませんでした、これは幸ちゃんを着物にして下さいな、それからこれは清さんに。

母 おや、幸子に着物、清には萬年筆かい
小夜子 それから、これ(玩具を出し)赤ちゃんに――

母 おゝきれいな玩具だねエ、こんなのは田舎にはないよ(手にとつて見る)
小夜子 この洋服と帽子、赤ちゃんに似合ふ

でせうか。

母 似合ふどころか、たいしたもんだ(手にとり)これを着せたらどんなに可愛いだらうね。

小夜子 (新しい別の包みを出す)あの方、柄が氣に入らないかもしれませんが、これお母さんとお父さんに、

母 おや、私たちに迄持つて来たのかい、そんなに方々に持つて来なくつてもいゝのにね。

小夜子 いえ、それはあの、私が貰つて来たんぢやないんです。

母 ぢやどなたから。

小夜子 心易いお客様からよ相良さんと仰有るんです。

母 さうかい、カフェーに来る方でも親切な人があるんだね(と云つて清に氣を兼ねる)

小夜子 え。

清 何だ、姉さん、カフェーで働いてるのか會社だなんて嘘をついて女給をしているのか

母 清さん、そんな口の利き方をするもんぢやありません。

清 カフェーの女給にロクなものはないつて

ね。

母 これ、清さん。
清 ナー、姉さん、女給をしたたのか。子供の辭に何を云ふんだい、眞面目に働きたさへすればどんな事をしてたつていゝんだよ。

清 (立上り帽子を持つて出かゝる)
母 清さん、お前どこへ行くんだい、折角姉さんも歸つて来てゐるんだから、お父さんが歸つて来たと一緒に御飯をたべるんですよ。

清 僕不愉快だから遊びに行くんです。
母 これ、お前、何を云ふんだい。

小夜子 お母さん、叱らないで置いて下さい
清さんの目からは私なんぞ汚いものに見へるでせう。

清 (入口から出て行く)
母 (清を見送つて)本當にあの子は生意氣で仕方がないんだよ、氣を悪くしないでね。

小夜子 いゝえ何とも思やしませんわ、それよりも私東京で一生懸命に働いて、清さんや幸子さんを上の學校へ通はせてあげたい

と思ひますわ。

母 さうしておくれ、お父様も此頃では商賈が思はしくないし、少してもお前が助けてくれりやどんなに助かるか判りやしないよ

(間) それにしても今度は何しに歸つて来たんだい、あんまり唐突で。

小夜子 一寸御相談したい事があつて――

(云ひかけて) いや、止ませう。

母 何だい、相談つて――

小夜子 いゝえ、たいした事ぢやないんです自分のこと。

母 自分のこと?、縁談、それとも……

小夜子 縁談――ホ、ホ、私は一度つまづいて来た女です、もう男にだまされはしませんわ。

母 そりやさうだらうとも、ホ、ホ、夕暮らしく工場の笛が鳴る。

この時小夜子の父重造(五十代)在の女房お作(三十位)乳兒を抱いて出る。

父 よ、お歸りだな。

小夜子 あらお父さん、しばらく、御無沙汰してすみません。

父 どう致しまして、いやア、大それた立派になつたな(畏まつて)いやアこれはようこそ、だしぬけに何事だい。

母 一寸ね。

父 あゝさうか縁談。

小夜子 あら。

父 それとも金談か、どつちにしてもお前の顔を見るのはうれしいよ、おいお作さん、その子を小夜子に抱かしてやれよ。

お作 はい、さあ、小夜子や、抱いてくれ大きくなつたぞらう。

小夜子 お、坊や――(抱く)お母さんです

よ、お前大それた大きくなりましたね、三月も見ないとこんなに肥るんでせうか。

母 この子を選んで歸つて来たのは丁度三月前だつたね。

父 あの時は、おれもいやだつたよ、世間の奴等は、ろくな事は云はねえだし。

お作 ナアに私生児だらうが何だらうがかまふもんか、こんなキレイな赤ちやんはたんとはねえんだよ、ろくなガキもこしらへねえ辭に、悪たればかり叩きやがつて、口惜しかつたら、日本一のガキをひり出して見

る、それに見きつせえ、おらの乳で育つた兒だ、第一色艶がちがふぞ。

父 ハ、ハ、又始まつた、だがおりやこの子を見るにつけても、あの野郎が憎くつてたまらないんだ、娘を腹ボテにさせて韓太くんだりへ突ツ走つたりしやがつてとんでもねえ薄情野郎だ。

小夜子 あんな人にだまされたのが、いけないだわ、男には子供なんてどうでもいゝんです、子供は女たちのものですわ(子供が泣く)あゝ、よし、何を泣くの、お母さんです、お母さんです(あやす)

お作 お、何泣くだよ、お前のお母アだべ、それお母アの顔をよく見ろやい、おゝよし、よし、よし(傍からあやす)

母 (玩具を示し)ほら、お母さんが東京から、お前に持つて来て下すつたんだよ、此んな、きれいな洋服も帽子も。

父 どれ、(と手にとつて)ほら見る、(と後からあやす)

小夜子 坊や、何故そんなに泣くの、お母さんがそんなにいやなの。

お作 小夜子や、お前があんまりきれいな

で、ビツクリしてるんだよ、おらが少しの間、裏で抱いてあやして来んべえか。

父 それがいよ、それが——その間に一つ夕飯にでもありつかう、久しぶりに小夜子も一緒に親子姉妹水入らずで飯を食はう。

母 もうちやんと支度が出来てるから、少し早い様だけど、御飯にしますか。

お作 ちや、坊やもおらが乳で夕飯食べるださ泣くんぢやねえ、泣くんぢやねえ（小夜子から子供を受取る）

小夜子 お作さん、ではお願ひします。

お作 あゝ、えゝだよ（玩具を持ち子供をあやし乍ら入口から出る）

暫らく外で子供の泣く聲、母がその間に寢所から支度をした餉嚢を持つて来る、幸子が荷物などを正面次の間に運び去る。

小夜子は玄關に立つてしばらく子供の泣く聲を聞いてゐる。

父 小夜子、さあ、こつちへおいで。

小夜子 ハイ。

母（餉嚢の上のふきんを取る）さあ小夜子はそこへ。

小夜子 ハイ（餉嚢の下手に坐る）

幸子も出る。

母 幸子、お前は姉さんと並んでお坐り（と下手より正面に据へる）

父の上手、母は後向に上手寄り

父 清はどうしたんだ、あいつがゐなきや、何だか水入らずの夕飯が齒の抜けた様ぢやないか。

母 あの子は停車場の方へでも遊びに行つたんでせう、ほんとに仕様のない子ですよ（御飯をついで小夜子父、幸子に配る）

電燈がつく。

父 お前、東京でカフエで働いてゐるんだつてね、都會つてところは若い女の働き場所が澤山あつていゝねえ、だが、それだけに男の誘惑も多いだらうし、いろんな苦勞もあるだらうねえ。

小夜子 えゝ、女一人都會で生きて行くにはそれは苦勞ですわ、私今でこそ女の生きて行く道が判りましたが、あの子を産んだ時は、本當に困つてしましましたわ。

母 そりやこんな田舎の娘が、妊娠の身の上で一人飛出して行つたんだからね。

幸子 でも姉さんはえらいわ、私なんかにはとても出来ないわ。

父 お前はお茶フビイでダメだよ。

幸子 イ、（と齒をムキ出す）

母 さ、何にもないけど食べておくれ。

小夜子 頂きますわ（と箸を取る）

子守唄。

小夜子 ホロリとして箸を置く。

小夜子 お母さん私は幸福ね、子供に買ひたいものは買つてやれるし、働いておれば決し困るやうな事はないんですもの——

母 しかし、女給さんで本當に結構な商賣だね、どうしてそんな商賣を見つけたんだね

小夜子 私、實は死なうとしたんです。

母 エツ。

父 ど、どうしてさ。

小夜子 丁度子供が生れてから一と月目でした、やつぱり僅ばかりの賃仕事をして下町へ賃銀をもらひに行つたかへり途で、銀座の松屋に寄つたんです、やつぱり子供のも

のが目について洋服や帽子を見ると、早く

お金を儲けて買つてやりたいと思ひましたわ、それから玩具部へ来ますと、その時分もうガラ／＼を持ちたがつておましたのでそれが買つてやりたくつて、でも、私の財布には十二銭しかありません、買つてやるにも買へません、すると、そこへ他所の奥様が、五ツ位の女の兒と七ツ位の男の兒をつれて来て、高い玩具を買つて行きましたその奥様の財布には五圓札だの十圓札だのが、のぞいてゐました、金と云ふものは、ある所にはあるものだ、變な氣持になつたんです。

母 ふん、そして。

小夜子 私、知らず／＼の間に手近にあつたガラ／＼を、そつと袂にしよせました。

母 えつ。

父 お前それを盗んだのか。

小夜子 え、私悪いことをしたと、思ひましたけれど、誰も見てゐない様でしたからそのまゝ出口の方へ行きますと、看視人が突然私を呼びとめて、別室へつれて行かれました、仕方ないから、盗んだ玩具を出してあやまりますと、看視人が玩具の値段

ツケを見て「たつた十五銭ぢやないか十五銭の玩具を盗むなんて、よく／＼だねい、から此の玩具は持つておいでと無理に私の手にその玩具を握らせてくれました。

母 (涙をふく)

父 (涙をかくしてガサ／＼食ふ)

小夜子 その晩でしたわ、子供があんまり泣くので關口の大龍のある所を、寢かしに連れて行つて、ふつと死ぬ氣になつたんですそこを刑事さんに助けられて、關口のあるカフェーへ世話して貰つたんです。

幸子 (泣いて) 姉さんはどうして、さう苦

勞ばかりするんでせうね。

母 ほんとお前は氣の毒だね(涙をふいて)今でもやつぱりそのカフェーにゐるのかい。

小夜子 いゝえ、銀座のタイガーつて云ふ店です。

此の時、清があはてゝ入口から歸つて来る。

清 お母さん、今停車場で、洋服の男がうちを尋ねてゐましたよ、姉さんの知り合ひぢやないかな。

小夜子 ど、どんな人です。清 三十位な若白い顔の男。

小夜子 ぢやあの人ぢやないかしら。

父 だれかお前を追つて来た人があるのかい

小夜子 ハイ、あの。

母 構はないからお云ひよ、だれが来るんです。

小夜子 あの、實はその人私に結婚してくれと云ふんです、私返事に困つて「では両親に相談します」と云つて、こちらへ来たんですが、すぐ次の汽車で追つて来たのかしれませんわ。

父 それでお前、結婚する氣があるのかい。

母 いゝ人だつたら身を納めたらどうだい。

小夜子 その人には、奥さんや、子供がある

んです、私そんな人と一緒に、なれませ

んわ、でも私とどうしても結婚してくれと

云つて、奥さんを離別なすつたんですつて

母 まあ。

父 さうか、ぢやその人とは別に汚ららしい關係はないんだな。

小夜子 決してありません。

父 ぢや、こゝへお見へになつたら、私がら

まく云つて上げやう。

小夜子 私、逢はない方がいゝと思ひます。母 ちや次の間にでもかくれておいで。

この時、入口の前に、相良純三が立つ。

相良 ごめん下さい。

一同来たーといふ思入れ、小夜子壺所へかくれる、清と幸子は、壺を片よせて、正面奥へ去る。父が居住ひを直す、母、玄關へ出る。

母 どなたでございます。

相良 水口さんと仰有るのはこちらですか。

母 さうでございます、あなた様は。

相良 ハッ、私は東京の者で、相良と申します、あのう小夜子さんは来てゐらつしやるでせうか。

母 小夜子なら先程東京から來まして、只今奥に居りますが。

相良 エッ、やつぱり来て居りますか。

母 どうぞきたない所ですがお上り下さいまし。

相良 では、失禮します(上る)

母、よき所に座布団を出す。

相良座る。

父 私達は小夜子の両親でございしますが。

相良 左様ですか、突然お伺ひいたしました。

父 やつぱり東京からいらしたんですか。

相良 さうです、實は小夜子さんを上野驛へ送つてそのまゝ、歸る考へだつたんですが、

どうもいろ／＼氣になるものですから、突然北海道行きを決心して、次の列車で、やつて参りました譯です。

父 何かお急ぎのご用で。

相良 いゝえ、やつぱり小夜子さんの事についてですが、小夜子さんからは、まだ何もお話がないんですか。

父 いゝえ別に、尤も縁談について何か云つてゐましたが、それとでもとりとめもない話で、ハ、ハ、ハ、ハ、

母 でも東京からわざ／＼北海道迄いらつしやるんだから、よく／＼の事てなければねえ。

相良 無論です、私としては命一つを投出すつもりで、列車に飛乗つたんですが――かし。

父 立入つた話ですが、何か娘と固いお約束でもあるとおつしやるんですか。

相良 さうです、あなた方に一應相談した上ご承諾すつたら、すぐ結婚しやうと云ふ約束でわざ／＼、北海道まで出向いて頂いたんです、しかし小夜子さんの口を待つ迄もなく、こんな事は直接ぶつつかつて、僕と云ふ人間もあなたの方前へさらけ出した方が近道だと思つてやつて参りました、無論とるに足らない人間です、しかし信じる人のためにはいつでも喜んで死ぬる男です、こんでだつてさうです、僕は、無論死ぬ決心でお願ひに上つたんです。

父 一寸待つて下さい、あなたのやうに、さう突きつめて考へても困りますが、――それに御存じかどうか知りませんが、小夜子には子供がございますので。

相良 えゝ？子供？

母 御存じなければ、何も斯も申上げますけど、小夜子としては子供のことも考へねばなりませんし、今急に結婚すると云ひましても。

父 それも當人の小夜子とその氣になつたも

のなら、イザコザありませんが——
相良 え？小夜子さんに僕と結婚の意志がな
いと云ふんですか。

父 それがその——どうもハツキリしません
ので。

母 お前さん、こんな事は、後の患ひのない
やうにキツパリした事を申上げた方がい
よ。

相良 は、伺ひませう、どうぞおつしやつて
下さい。

父 その——早い話が、その一言にして云ひ
ますと、小夜子に結婚の意志がないんです
相良 ……

母 どうぞ悪く思召さないやうに。
相良、突然突俯して泣く二人は
呆氣にとられる。

父 (うろ／＼して) そのうち、娘の腹もも
一度よく聞いて見るには見るつもりですが
何ともはや。

相良 (決心して) よく判りました、云ひた
い事もいろ／＼ありますが、一切グチは申
しますまい。

父 すみませんね、ちや一寸娘を起して参り

ますから(と母に目くばせする)

母、起つて行きかける。

相良 あの。

母 はい(立止まる) すぐ呼んで参ります
(と行きかける)

相良 いやお目にかゝりますまい、お目にか
ゝつたら何をするか判りません、自分で自
分が恐ろしいんです——ちや、これで失禮
します。

父 でも折角ですから、せめて夕飯でも召上
つて。

相良 は、有難う、ではお冷を一杯頂いて参
りませう。

母 おや／＼、お茶もあげませんで。

相良 いゝえ、水で結構です。

母 さうですか。
と母コップに水を持つて来る。

相良 相良一息にグツと飲む。

相良 では失禮します、これ限り小夜子さん
ともお目にかゝりません、どうぞよろしく
おつしやつて下さい。

母 失禮いたしました。
相良歸る。

父、母顔を見合せて吐息づく。
雨の音。

父 おや、とう／＼降つて来た——あの方困
るだらうにね。

母、窓によつて相良の後姿を求
める。

奥から小夜子が出て来る、そし
て父の前へ突伏して了ふ。

父 聞いたか。

小夜子 え、辛いわ、あたし相良さんにすま
ないわ。

母 (窓に寄り添つて) まあ可哀想に、この
雨の中を傘もさゝないで、トボ／＼歩いて
ゐらつしやるわあの方だつて、こんなつも
りて遠いところをいらしたんぢやないだ
らうに。

父 ……氣の毒だなア。
小夜子突如立上る。

小夜子 私やつぱりお目にかゝつた方がいゝ
わ、そして私の心持をよくお傳へして来る
わ。

とバタ／＼駈出す。
父、母を促す。

母 小夜ちゃん、お待ちよ。

と後を追つて入る。
怒によつてジツと見送る、父、
両音、益々激しく。

暗転

第二幕 その二

岩見澤の停車場

正面は棚、その向ふは構内の處
で貨物車が並んでゐる、上手は
停車場の一部賣店の一部も見え
る、よき所に立木二三本、シゲ
ナルなどよろしくあり。

とつぶりと暮てゐる。

○
上手停車場の軒に炭坑夫十人あ
まりうづくまつてゐる。

雨は小歇みになつてゐる。
驟から坑夫の小頭らしいのが出
て赤切符を一同に配つてゐる。
数名の乗客が下手から急いで來
る、坑夫たちも場内へ入つて行

く。

構内で「××行、××行と驟夫
の聲。

ベルの音、構内を緩やかに行く
貨物列車の音など。
相良が雨に濡れて悄然と出て來
る。小夜子後を追つて出る。

小夜子 私、東京では打明けられませんでしたし
たけれど、實は私子持なんですの。

相良 今更そんなことを聞いたつて何にもな
りやしないよ。

小夜子 私、子供の父親と今は別れてゐるん
ですが、しかし本當に別れきつたといふ譯
には、まだなつてゐませんの、……そんな
こともいろ／＼あるし、それにあたしのや
うな女は、自分でそう思ふんですが、家庭
的な女ではありませぬからね、私父や母に
話す前に、もつとよく考へて見たかつたの
です、ですからまだ相談してはなかつたん
ですの、そりやあなたの御厚意は感謝して
ゐますわ、でも何といつてもあなたはお子
さんのある奥さんがおありでせう、それに
あたしにも子供がありますし、その子供の

面倒は、あたしが見て行かなければなりま
せんし、そんなこんなで行末がうまく行く
事はなさそうに思へましたしね。——あた
しだつて眞面目に考へてゐたんですよ。

相良 さうか、眞面目に考へてよくも僕をこ
の遠い北海道まで呼び出してくれたね、そ
りや僕の勝手だと君はいふかもしれない、
しかし何だか君一人をやつたのでは心許な
かつたから、すぐ追つて來たんだ。

小夜子 でも、あなた奥様の事をよくお考へ
にならなければいけませんよ、いくら別れ
たといつても貴君のお子様はやつぱりお子
さんですからね、どうぞ奥様の所へ歸つて
上て下さい、夫が本當の様に思ひますわ。

相良 君は今となつて僕に説教するつもりな
のか、もう遅いよ、ちや云がね、僕は一切の
ものを犠牲にして君と結婚しやうと思つて
ゐたんだ、だから君の返事次第では、君を
殺し僕も自殺しやうと思つてたんだよ、ほ
れ見給へ——（と隠しから短刀を見せる）

小夜子 エッ——（おどろく）
相良 ハハ、（笑つて）もう驚かなくつて
も大丈夫だよ、僕はもうすつかり落つて

ゐるからね。東京のカフェで君を見てゐると、君がたつた一人て、他に何の關係もない人の様に思はれるけれど、かうして君の家を訪ねてみると、君にはお父様もあれば、お母様もあるし、そのお父さんやお母様にとつて、君が大切な娘なんだといふ事が、解つて来るからね、僕だけの感情で、君の命を如何する事も出来やしないよ、夫に今聞けば、君は人の母だ。だが小夜子さん、實際、僕には大きな打撃だつたよ。

小夜子 すみません。

この時汽車が構内に入る物音、また二三の乗客が下手から急いで通りすぎる、上手からも二三の降客出て行く。

相良 ぢや出かけやう、まあ身體を大事にね

小夜子 あなともどうぞ。

相良 ぢや、最後の握手を（小夜子の手を握り）さつきね、君の所でのませてもらつた水ね、あれは最後の水だよ。

小夜子 エツ。

小夜子後を追つて出る。

相良急ぎ上手に去る。

小夜子追はんとする。
この時、母下手から出る。

母 小夜子。

小夜子 お母さん。

發車の笛、汽車出て行く。

母 あの人、とうとう行つて了つたね。

小夜子（ツカ／＼と柵の方へ行つて汽車を見送る）

驛からお作が子供を抱いて出る

お作 小夜ちゃんぢやねエか、おら雨に降りこまれて困つて了つた、ほれよう寝てるだ

んべ、可愛い顔をして。

母 おや、よく寝てゐること（お作に傘をきせる）

小夜子 坊や——（子供を抱きと）私は働

くよ、お前をたよりに、どんなになつても

きつと働いてみせるよ。

雨一トしきり。

遠くで汽車の笛が鳴る。

幕

第三幕 その一

銀座裏通りの或る地下室の酒場

正面中央に入口の階段、下手にバースタンド、上手にカーテンルーウムがある、中央によるしく藤椅子のセットがある、赤いランタンが天井にブラ下がる、可成りに強烈な色彩の色デンキなど。

○ 前幕より數ヶ月後、早春。

上手のルームに大學の制帽制服の客八人、女給清美、政子がつく、百合枝はバアの中にある。學生たち「若き血に燃ゆるもの」の野球應援歌を唄つて、ビールびんを叩くもの、床を踏み鳴らすものなどあつて騒いでゐる。下手のセットに雑誌記者A、Bが紅茶をのんでゐる、君代がついてゐる。

應援歌

若き血に燃ゆるもの、光輝みてる吾等、希望の明星仰ぎてこゝに、勝利に進む吾が力常に新し、見よ精銳の集ふところ烈

日の意氣高らかに、さへぎる雲なきを、K
O、K O、陸の王者K O——

下手かけから小夜子が出る。

小夜子 (上手ルームに) 學生さん、こゝは
明治神宮ぢやないんだから、もうちつと靜
かにして下さいよ。

學生甲 ヨウ、ヴァンプの小夜ちゃん、賣出
すなよ。

同乙 こいつ生イキな女だな。

小夜子 どつちが生意氣なのさ、いくらポー
ルに勝つたからつて、餘り有頂天になり過
ぎて迷惑をかけない方がいゝわ。

甲 こいつあ手きびしいぞ、参つた〜。

乙 遺は今賣出しのお小夜姐御だ、よろ〜
一同が捨ぜりふで囃し立てる。

また唄ひ出すものもある。
清美勸定書を出す、中一人支
拂ふ、一同入る。

君代、小夜子による。

君代 掛川さん、来るかしら。

小夜子 大丈夫、來ると思ふわ、私の名で呼
出しておいたからきつと來るに違ひないわ
シツカリ談判しなきや駄目よ。

君代、えゝ、やるわ。

小夜子 でも、久しぶりに逢へば未練が出や
しないこと——昔のことを思ひ出して。

君代 冗談ぢやない、もうあんな掛川なんぞ
どうだつていゝわよ。

下手のセットの客は二人を見て
ゐる。

客A おい、小夜子こつちへ來ないか。

小夜子 アラ、あなた來てたの。

同A 何かおごるうか。

小夜子 えゝおごつて頂戴よ。

同B 酒でものむかい。

小夜子 さうね、ミリオンダラをもらふ君
代さんあんたもお上りよ、どうせおごつて
もらふんだから。

君代 えゝ、のんでもいゝわ。

小夜子 ぢや、私がこしらへて來るわ(と下
手へ入る)

君代元の所へかへる、この地下
室の上はダンスホールになつて
ゐて、斷續的にチャズが聞える

A あれが評判のヴァプの小夜子さ。

B 成程、強か者らしいな、だがあんな女に

なら少しはとるけてもいゝよ。

A あいつを北海道まで追つかけて自殺した
と云ふ男は、その後どうなつたかなア、助
かつた様に新聞には出てゐたが。

君代 北海道の歸りに仙臺の宿屋で短刀での
どをついて死なふとしたんですつて、でも
死にきれずに、東京へ舞戻つて來たといふ
ことですよ。

B あの事件であの女は一遍に有名になつち
まつたね。

君代 でもね、小夜子さんは心からのヴァン
プぢやないのよ、私一番よくあの人の氣持
知つてるわ、あの人は世間がまるで毒婦扱
ひにするので、わざとさう見せてゐるんだ
わ。

A どうだか判るものか、あの女には文壇の
大御所吉水薫も引つかまつたといふぢやな
いか。

B さうかい、あの吉水がね。

A 去年の暮にはクリスマススの衣裳をこしら
へてやつたり、また正月着の支度金を出し
たりして、大變なほせ方だつたといふ事
だ、しかし、遺に吉水も手が出せないで今

ではこの酒場の京子を物にしたさうだ。
B そいつあいゝ文壇ゴシツブだな、來月號
にでも書いたらどうだ。

A いゝや、あの吉水の事をワツカリ書くと
やられるとな。
小夜子 カクテルを運んでくる。

小夜子 どうも有がと、頂きますよ、君代さ
んもいかに。
君代 いゝの。

A あゝのみ給へ。
B どうもお客が紅茶で、女給に酒をのまれ
ちや勘定が合はないね。

小夜子 何をシミツタレた事を云つてるの、
紅茶位ちや私たちの賣上げの分が少くつて
儲けにならないぢやないの、だから私たち
がカクテルをのんであげるのよ。

A おいゝ有難うございます。
ヂヤズ流れる。
入口から掛川勇(三十近く)が
ラグビーマン來る。

小夜子 (それを見て)おらつしやい、掛川
さんよ。
掛川 遅くなつてすみません。

小夜子 酒場はまだ背のうちよ。
上手のセツトに掛川坐る。

君代 ためらつてゐる。
小夜子 君代さん、早くこゝへおらつしやい
よ。

君代 (ためらつてゐる)
小夜子 おらつしやいつたら(君代の手をと
り掛川の所へやる)ぢや、御ゆつくりね、
何か通しときますわ(下手へ去る)

君代 と掛川しばらく無言、君代
椅子にかける小夜子出て下手の
セツトに坐る。

掛川 お前、たつしやで結構だね。
君代 えゝ、たつしやよ。

掛川 一度君に逢つて云はうと思つてたんだ
けど、色々と事情があつて妻帯をしなけれ
ばならなくなつたんだから、悪く思はない
でくれ給へ。

君代 そりや分つてるわ、私今更あなたに負
擔をかけやうとは思はなければ子供の面倒
を見て下さいとも云はないわ、たゞ一ツお
願ひがあつて、小夜子さんに呼んで頂いた
のです。

掛川 さうか、で、その話しと云ふのは――
君代 はい、それは――
百合枝が紅茶を一ツ持つて來る

君代 あの、子供の事につきまして。
掛川 子供――
君代 あの子供があなたの子であるといふ事
を承諾して頂きたいのです、あの子には母
があつても父と呼ばず人がありません、私
それが可哀想で。

掛川 そりや困るよ、妻帯したばかりの僕に
そんな事が出来るか出来ないか考へてくれ
ても判るぢやないか。

君代 それも法律の上で認めて下さいといふ
のぢやありません、言葉の上でいゝんです
自分の子だと言つてくれればいゝんで
す、たつたそれだけの事です。

掛川 さあ――(と考へる)
君代 それもいけませんの。
掛川 (黙つてゐる)

この間にA、Bは小夜子に勘定
を拂ひ歸つて行く。
小夜子見送つて後、卓上のもの
を片づける。

君代 私は初めのうちこそあなたを恨んで、誰があんな人をお父さんだと云はすものかと思つても見ました、しかしその強がりはやがて子供が大きくなつた時、私生兒として世の中を狭くさせなきやならないことを知ると、私は一切の恨みをすてました、そしてあなたにこの事をお願ひしやうと決心したのです。

小夜子 出て物かげで聞いてゐる掛川 しかし君は俺以外の男と關係がなかつたとは信じられないからな——だれの子だか判らないものをおれの子だと云へるかい

小夜子 (ツカ〜と出る) 掛川さん 君代さんに限つて他の方と思はしい關係は少しもありません、あの子はあなたのお胤です

それにあの頃の君代さんはあなたのお胤を思つてゐたんです。

掛川 だれが何と云つた所で俺は知らん——カフエーにある女の眞實なんて、アテになるものか。

小夜子 えッ、ぢやどうしても承認なさらないと仰有るんですね。

掛川 知らん〜。

君代 よござんす、もう頼みませんわ、あの子はあたしだけの子です、あなた見たやうな父親なんか持つてない方があの子の仕合せです(泣く)

掛川 (立上る) 小夜子さん 僕に用といふのはこんなことですか、僕はもう歸りますよ、これをお拂ひに置いておきませう(と十圓札を出す)

小夜子 待つて下さい、掛川さん、あなたそれでは餘り君代さんが可哀さうです。

掛川 君達は僕に云ひがゝりをつけやうと云ふんですか。

小夜子 何です、云ひがゝりですつて掛川さん、私たちがいつ云ひがゝりをつけました子供の事をお願ひするのが云ひがゝりですか。

掛川 失敬します(去る)

小夜子 待つて——掛川さん。

君代 小夜子行かうとする君代止めるりません、子供はやつぱり女だけのものですわ。

分だけのものだ。

軽いトロツトのチャズ。

小夜子 この間お客に借りて讀んだ外國の小説に「父」といふのがあつたがその中に子供の父親を知つてゐるのは結局母親だけだといふ言葉があつたわ、男には自分がその子供の父であるかどうか判らない、その父親を知つてゐるのは母親だけだ、でもそんな事は金に苦勞のない、ぜいたくな社會のたわごとよ——結局子供は母親のお腹に宿るんですからね、本當に子供のために苦しむのは母親だけよ、あたしの場合なんかさうだわ、男にとつてはほんの享樂にすぎなかつたんぢやないの、その結果苦しむのは結局あたし自身——女自身なのね。

君代 小夜子さん、私たちは働きませうよ、そして子供を立派に育て、薄情な男共を見返してやりませうね。

小夜子 紅茶と十圓札を下手に持つて入る。

君代は打しほれて卓上によりかゝつてゐる。

チャズ。入口から、きらびやか

に着飾つた京子と吉水が入つて来る。

百合枝 まあ、京子さん、お歸り。

清美、政子も出て来る。

清美 吉水先生、ゐらつしやい。

政子 大阪のおみやげは何です。

吉水と京子、下手のセツトに坐る。

吉水 みやげは後で京子に分けてお貰ひよ。

京子 本當に初めて先生に京都や大阪を見せてもらつて面白かつたわ。

清美 アラ、いゝわねエ。

政子 オヤ、京子さんの指に大きなダイヤモンドが光つてよ。

清美 大阪で買つてもらつたの、見せてよ。

京子 いやア上。

政子 見せて頂戴よ。

京子 ちや、ちよつとだけ。

百合枝 アラ、随分大きいのね、何かヤラツトあるの。

政子 それいくらして。

京子 千五百圓。

清美 まあ(他の二人と顔を見合す)

政子 それ先生に買つてもらつたの。

百合枝 いゝわね。

吉水 おいゝ、何か飲み物を持つて来ないか。

百合枝 ハイ(下手に去る)

君代、ツト立上つて行きかける

京子 君代さんぢやないの、どうしたのよ、いやに情氣てるのね(立つて行く)

君代 (黙つて行きかける)

吉水 おい、何をそんなに怒つてるんだい。

君代 下手に入る。

京子 あの人きつと私に反感を持つてるのよ

小夜子さんと仲好しだものだからあの人の肩を持つて私を憎むんだわ。

吉水 まさか。

京子 いゝえ、さうよ、小夜子さんはダイヤ

ーにゐる時から先生にヒイキにしてもらつ

てゐたのに、こつちへ移つてから私が先生

とこんなになつたので恨んでゐるんだわ

だから君代さん迄反感を持つてるんだ私本

當にこんな所いやんなつちまふわ。

吉水 いやならやめたらいいぢやないか。

京子 やめてどうするの。

吉水 どこかでカフェーでも初めるさ。

京子 先生がやらせて下さるといゝんだけど

吉水 やらしてもいいよ。

京子 うれしいわ。

百合枝が吉水にソーダ水を持つて来る。

この時、下手から小夜子が出る

君代が止めてゐる。

小夜子 京子さんー私がいづあなたを憎んで

君代 小夜子さんいゝぢやないの、いゝぢや

ないの。

小夜子 よかないわ、皆んなの前で私のこと

を云はれちや黙つちやゐられませんがね

京子さん、私はね、あなたの様に先生から

ダイヤの指環を買つてもらつたり、關西く

んだりまでお供をしたりはしませんからね

私たちは、眞面目に働いてゐるんです、あ

なたの様な特別なサービスは致しませんか

らね。

京子 (立上り) 何ですつて、大きな事を云

つてもらひますまいよ、先生にどんな事を

して頂かうと御一緒にどこへ行かうと私の

勝手です、へん憚り様、お前さんみたいな

ヴァンプとは違ふわよ。

小夜子 何ですつて——

君代 小夜子さん！(と、とめる)

小夜子 さういふお前さんは何だ、私がヴァンプならあなたは何です。

京子 私、私なんか銀座無宿のお小夜さんから見たらまだほんの駆出しよさんざ男を手玉にとつて半殺しにする程の度胸は持つちやぬませんからぬ。

小夜子 あんたぢやあるまいし巾着切りみたいに男の懐は狙はないよ。

京子 その代り首を狙つたつてね。

小夜子 何ですつて。

京子 さうぢやないか相良さんはどうしたんだい首をついて死にかゝつたぢやないか。

小夜子 死にたきや勝手に死ぬだらうさ、私の知つた事かい。

この少し前に面からボロ服を着た相良がぬつと入つて来て、ツカ／＼と前へ出る。

小夜子 あツ相良さん。

吉水 君は？

相良 相良純三です、小夜子のために仙臺で

咽喉を突いて死に損なつた相良です。

吉水 君がその相良か、おりや吉水だ(手を握つて)ヤツパリ小夜子を探ねて来たんだね。

相良 そうです去年の暮から正月へかけてずつと仙臺の病院にゐましたが傷も癒えたので又候小夜子を求めて東京へやつて来ました(小夜子に)おい小夜子よくも俺を欺いたね、おいおれの姿を見る、おれのこのみじめな姿を見る。

小夜子 私決してあなたを欺きはしませんあなたを奥さんの手へ返してあげた迄です。

相良 貴様まだそんな事を云ふのかおれは貴様の爲めにあらゆる物を犠牲にしたんだぞ両親からも世間からも捨てられて了つたんだぞ、おい此れを見る(トのどを示し)この傷跡を見る貴様のその手で突いたんだぞおい顔を上げてまともに此の傷を見る(と小夜子の手を握む)

君代 いけません、相良さん勘忍してあげて下さい。

相良 何をするんだ退け。

女給一同口々に「およしなさい

よ」ととめる。

吉水 (君代を引きはなして一同に)おい止めるな、相良君の自由に任してやれ、おい小夜子この人の心持ちが判つたらせめて一度この人に身を任せてやれ思う存分ぶたれてやれ。

小夜子 はい、わかりました。

小夜子座して瞑目する。

相良躍りかゝつて小夜子を打つ

吉水 一同を支へる。

ジャズ。舞臺暗くなる。

暗申にて相良の怨罵する聲、な

じる音——

第三幕 その二

山の手にあるアパートの一室

下手は庭、塀の一部、上手に廊下と部屋がある、すべて二階の體。部屋の正面は壁、下手庭の向ふは下町を望む夜景。

○ 前幕の同夜、夜半。

○ 部屋に君代と小夜子。小夜子泣いてゐる。遠くチャラメル音

君代 いゝわ、私もあの酒場は止めるわ
そして又二人で明日からどこか外のカフェ
ーへ出ませうよ。

小夜子 私、あの相良さんをだました様に世
間から思はれるのが口惜しくつて、たま
らないの、でも、あの人が現はれないうち
は、そんな噂位何でもなかつたわ、人がヴ
ァンプの小夜子だと云へば、却てそれを私
の看板にして、わざと腰腕の様にみせて
来たわ、私はどうしたつて東京で働いてお
金を儲けなきゃならないんですもの、故郷
には子供を他所に預けてあるんですものね
それに故郷の家も此頃は私の金を當てに
してゐる様ですし、随分責任の重い身置な
んです。

君代 私だつてさうよ、だからお互に力にな
つて行きませうよ。

小夜子 でも、今夜の事を思ふと、私本當に
くやしいわ、相良にあれば込まれたばかり
に、私はもうあの酒場にもゐられないし、

朋輩にだつて合せる顔がないわ。
君代 だから明日から他を捜しませうよ銀座
へ出りやいくらでも働くカフェエがあるわ

小夜子 (涙を拭いて、帯を解く) 寢ませう
よ、君代さん。
君代 寢ませう (帯を解く)

老婆 あの水口さん、まだ起きてるんですか
小夜子 おばさん、何か御用?
老婆 ハイ、あのう、お人ですよ、どうしま
せうね。

小夜子 エツ、人つて……だれだろう。
君代 誰でせうね。
老婆 この名刺の方ですよ、二人づれでおい
ていすよ (名刺を出す)

小夜子 (見て) 勝負見宣治——君代さんこんな
人知つてる?
君代 知らないわ。

老婆 ぜひ今夜中にお目にかゝりたいつてさ
う云つてらつしやいますよ。
小夜子 どうしませう、逢つて見ませうか。
君代 でもこんな夜中に氣味が悪いわねいゝ

わ、だれだつて構はないわ。私さつきから
何だかこう非常に元氣な氣持になつたのよ
一ツ逢つてやりまうよ。

老婆 ちやこゝへお通ししますよ、去る)
君代 相良さんも一所ぢやないかしら。
小夜子 来たつておどろかないわ、今度こそ
負やしないわ。

勝見 廊下から勝負と相良が出る。
小夜子 小夜子さんのお部屋はこちらですか。
君代 アツ(驚く)

小夜子 あゝやつぱり相良さん!
相良は酔つたものゝ如く、ぐん
にやりしてゐる。

勝見 相良君、そこへ坐り給へ。
相良下手へ坐る。

勝見 しばらく……相良の親友の勝負です、
銀座裏の酒場でこのアパートを開いてやつ
て来ました。

小夜子 記して、こんな時分に相良さんをこ
ゝへ連れて来て如何なさるお積りなんです。
勝見 あなたに要求したい事があるんです。
小夜子 要求。

勝見 さうです、敢て要求と云つた方が適當
でせう、この可哀さうな相良と結婚してや
つて下さい、この男はあなたを死ぬ程思つ
ておます。

小夜子 でも私は——
勝見 いやと仰有るんですか、では仕方あり
ません、あなたを告訴します、結婚詐欺の
名目ですね。

小夜子 私を告訴するつて——

勝見 さうです、あなたがこのこの男とどう
しても結婚出来ないとい仰有るなら、この男
の負ふた傷手の償ひをしてもらふ迄です。

小夜子 (突然笑ふ) ホホ、、よくもそん
な勝手なことが云へたものですね、私がい
つ相良さんをだましました、相良さんがこ
んなことになつたのは、みんな御自分の勝
手ぢやありませんか、私は店に来るお客さ
まだと思へばこそ、金を使つて下さるお客
様だと思へばこそ、僕が好きかと云はれ、
ば、ハイとお答へしたまでです、それを女
の心をよく確かめもしないで、奥さんを離
別したり、北海道まで追つかけて來たりし
て、御自分勝手に身の破滅をお招きになつ

たんぢやありませんか、よく考へて下さい
相良さんは三十にもなつて、しかも立派な
家庭の人です、それが迷ふも迷はないもな
い、私が悪いか、この人自身が悪いかは世
間に聞いて下さい。

相良 小夜子、ぢやお前は最初から僕を愛し
てゐたのぢやなかつたのか。

小夜子 好きは好きでしたわ、でも結婚なん
て考へたことがありませんわ。

相良 さうか、それで一切が判つた、やつば
り俺は馬鹿だつたのだ(ハがつくりする)

勝見 相良、どうしたのだ。

相良 勝見、小夜子に謝つてくれ、おれ今は
日小夜子を酒場で散々な目に遭はしたしか
しそれ程憎いのはやつぱり小夜子を愛して
ゐるからだ知ると、俺は濟ない様な気が
する、俺は一度死に損ねた人間だ今夜こそ
小夜子に手をとられて死んで行くのだ。
勝見 君は何かのんだのぢやないか。
相良 のんだ、このアパートへ来る途中毒を
のんだ。仙臺で咽喉をついて助かつたが、
せめて今一度小夜子とめぐり合つて死なう
と覺悟をきめてゐたのだ。

勝見 えッ、そんならこのアパートへ小夜子
さんの所へは死ぬために來たのか。

相良 さうだ、思ひもかけぬ君に逢つておれ
の最後を見届け貰はうと思つてつれて來
たのだ(小夜子に)小夜子さん、この手を
握つて下さい最後だ。

小夜子 (だまつて相良の手をにぎる)

相良 小夜子さん、僕は女給なんて、蕪葉女
ばかりかと思つてゐたが、みんな真面目に
生活した、かつてゐるのだといふことを君
から知りました。僕は死ぬ今わの聲で天下
の男達に云つてやりたい、諸君(苦しさを
に)諸君、カフエーに働く女給も真面目な
生活者の一人だ、諸君の草藥の對象となつ
て血みどろになつて、働いてゐるのだ(段
段に消へ入るやうに聲がうすれる)

小夜子 相良さん!

勝見 おい相良(と相良を抱く)

小夜子 あ、もう駄目かしら——

君代 小夜子ちゃん(と、よる)

相良は、その場に突ッ伏してし
まふ遠寺の鐘。

幕

編輯後記

鷹治郎大一座に、猿之助一門久々來阪で、とても
 本月の道頓堀、否關西劇壇は賑やかだ。

出し物も鷹治郎新作揃ひで、大いに氣を吐き、猿
 之助始め、關西の名舞踊手の舞踊三篇などは、珍ら
 しく盛澤山である。

おかげで、誌面の賑やかなこと……中座の狂言一
 つに一つ宛の記事があつても八篇はある——といふ
 わけでとても素晴らしい原稿に接して讀者と共に編輯
 子の渺なからず欣快とするところであります。

これ程大量の原稿をいたゞいて、本誌五十輯記念
 號は、全く新しい面目をもつて、皆様にまみえます

然し發行日の遅れた事は、實に申譯けがありません

んが、本月は、原稿の方よりも、寫眞の方に時間か
 かゝりました。新作や初演ものばかりなので、なる
 べくいゝ寫眞を蒐めたいと努力したゝめです。

尙五十輯記念としては、特輯として、食滿、鳥江
 兩氏から舞臺脚本をいたゞくし、それに西條八十先
 生の「女給の唄」をいたゞき得た出來た事を誇りと
 存じます。

大森痴雪、川村花菱兩先生からも脚本を頂戴する
 事になつて居ましたが限られた紙數で掲載出來な
 かつた事を兩先生始め讀者諸士にお詫びいたします。

來月は、顔見世號です。吉例京都南座顔見世興行
 なんていふと随分古めかしく聞こえますが、何故か
 しら無性になつかしみのある顔見世氣分の、萬喫を
 していただくつもりであります。

住 田 冬 和

昭和五年十一月一日發行

月刊『道頓堀』第五十輯

◆ 誌代は前金でお拂ひを願
 ひます。

◆ 郵券代用は一刻増にて御
 註文を願ひます。

◆ 御相談の上廣告掲載の需
 めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

廣告の御用は電通または當編
 輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢(郵費五風)

昭和五年十月三十日印刷
 昭和五年十一月一日發行

大阪市區久左衛門町八番地

編輯兼 松竹土地建物興業株式會社
 發行兼 鳥江 鏡也

印刷所 北島 竹次郎
 大阪市東區錦橋南之町一丁目

印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市區久左衛門町八番地

發行所 松竹土地建物興業株式會社
 道頓堀編輯部

電話 六六六〇番
 六六六五番



器 械 ¥2.00
 刃 六枚附
 替 刃
 五枚入一装 ¥1.00

朝の清澄、

夕の歡樂よ！

早く、キレイに、心地よい

エングルス安全剃刀

一動作で三部分に分解、ボネもなく
 鏡もなにも簡単よ、

邦人の濃いヒゲは特に
 よく剃れます

大阪市東區平野町 伊藤喜商店

堺筋出張所 淡路町堺筋

電話本局 三三三〇番
 三三三六番
 三三七六番

いよ一番に上レア

クラク美身

品産國良優

五年十二月號



粉白クラブ

一部金參拾錢